ポケモン不思議のダンジョン　半魔界の探検隊～蒼（碧）の波導の悪魔～

ハボック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン　半魔界の探検隊～蒼（碧）の波導の悪魔～

【Ｎコード】
Ｎ６１０６Ｒ

【作者名】
ハボック

【あらすじ】
半魔界と呼ばれる魔界でもない半端な世界。この世界で１人で探検隊の修行をしていたイーブイの少女、フロムはある日海岸で夕日を見ていてしばらくした後立ち去ろうとした時、後ろに一匹のリオルが上から降ってきた。リオルの名はソロ。２匹が会った時、この世界のある歯車が動き出した。この探検隊物語は何を示すのだろうか・・・・

夕日は今宵何を呼ぶ？

夕日が海岸を赤く照らしている。海岸からは波の音がザザーン、シャーと聞こえる。夕日に照らされた海岸に一匹ウサギのような長い耳と首の周りを覆う襟巻きのような毛が特徴のポケモン、イーブイがいた。

「あーあ。夕日が綺麗でもこの世界はやっぱり汚いわね。」

このイーブイ、声と口調からして女の子だろう。首には桃色のスカーフを巻いている。現在このイーブイがいるこの世界は半魔界という半端な世界。またこの世界には不思議のダンジョンという名の通り不思議なダンジョンがある。これの詳細は後ほど・・・

イーブイが何故先程の言葉を言ったかというと、半魔界では半悪魔という状態になったポケモンが不思議のダンジョンに潜んでいるのと、お尋ね者の数が非常に多いためである。そんな世界で生きるこのイーブイ、これらに飽きているために先程の言葉を放った。

「さてと・・・そろそろ戻らないとニロゲムに怒られるわね。」

イーブイが海岸から立ち去ろうとしたその時、自分の背後に何かが落ちてきた音がした。振り返ると砂煙が蔓延していて見えなかった。

「い、一体何！？」

眼を凝らして砂煙の中心を見た。中心にいたのは体全体が青く、小型の獣人に近い容姿をしていて小柄ながらしなやかで強靭な体をしているポケモン、リオルだった。突然上から降ってきたリオルは右手で頭を押さえていた。頭からぶつかったらしく、揺れているよう

なので右手で頭を押さえているようだ。

「ねえ・・・大丈夫？」

イーブイが顔を引きつらせながらリオルに聞いた。

「・・・・・・・大丈夫・・・・・・」

静かな声で答えた。ついでに言うと目は無気力とも思わせるようなほどに目は半開きの状態だった。イーブイは若干警戒をしてリオルに落ちてきた理由を聞き始めた。

「上から降ってきたみたいだけど、何あったの？」

「・・・・覚えてない・・・・」

「ええ？じゃあその前のことは？」

「覚えてない・・・気づけば落ちてる最中だった・・・・そして何も覚えてない・・・・何も・・・」

「何も覚えてないって、誕生日や親とかも？」

「覚えてない・・・・」

イーブイは不審すぎる回答に疑問をぶつけた。

「ねえ、まさかとは思うけど騙そうとしてる？」

「・・・・こんなメチャクチャなこと言って騙す価値あるか？」

「あ～無いわね。まああんたが怪しい奴だけど騙す奴じゃないことは分かったわね。」

「ああ、そう。じゃあな。」

リオルが立ち去ろうとしたがイーブイに止められた。

「あ、でも行き先あるの？」
「・・・・・・・・・・無いな。」
「ん～だったらあたしと探検隊やらない？」
「・・・・探検隊？」
「そ、探検隊！探検隊になれば冒険はもちろん、未開の地の探検や調査、お宝に名誉など！いろいろ手に入るわよ。それに探してればあんたのことも案外分かったり。探検隊になって損は無いと思うわよ？どう？」
「・・・・・・・丸め込もうとしてるかもしんねえけど・・・・まあいいか。やろう。」

話し合いの結果、そのリオルはイーブイと探検隊になることを誓った。

「やった、決まりね！あ、自己紹介忘れてたね。あたしはフロムよ。あんたは？名前は・・・覚えてるよね？」
「・・・ええと・・・オレの名前は・・・・ああ、ソロだ。」
「ソロ？「独唱者」って意味じゃん。まあ覚えやすくていいけど。じゃあ申請しに行こう。あたしに着いて来て！」
（ラッキー！やっとパートナーかリーダーが出来た！これで探検も楽になるわね！）

フロムがスキップしながら海岸の反対側にある道に進んでいった。ソロは疑問に思いながらもフロムの後に着いていく。十字路の交差点に出て真っ直ぐに進もうとした。が、その時目の前に一匹のジュペッタがズバットとドガースからカツアゲをくらっているのを見つけた。

「おい、金の1ポケぐらいあるだろうが！出しやがれ！」
「も、持ってないって！」

「ほ～じゃあどくどくでもくらうか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ソロは傍観しているだけだった。この時ソロの思考は・・・・・・
（何だこれ？助けるのか？助けないのか？助けなきゃいけないのか？アイツ等を見てても楽しくねえな。アイツ等を止めさせたらなんかあるのか？暇潰せるかな？まあいいや、とりあえず殴ろう。）
「ねえソロ、助けに・・・て、何する気なの？」
フロムが助けに行こうと言おうとした時にはソロが真正面から2匹に近づいていった。そしてある程度の距離まで来た時にドガースとズバットを殴った。二匹はそのまま倒れ込んで気絶した。
「暇潰しにもならんてどういうことだよ？」
「あわわわわわ・・・・・」
「・・・ああ、お前もう帰っていいぞ。」
「ご、ごめんなさーーーい！！」
「何故謝る。」
ジュペッタは猛スピードで十字路の西側に走っていった。フロムはポカーンとしていた。たった一撃殴っただけで気絶させるのは簡単じゃない。しかもただのパンチで気絶させたのだ。ソロはどうでもいいという感じでフロムのところに戻ってきた。
「早く案内してくれ。」
「え？あ、うん。」
フロムはビクビクしながらもソロを探検隊の申請する場所まで移動した。

主役とヒロインは決まった。次は役者だ。

夕日は今宵何を呼ぶ？（後書き）

何で始めたんだかな～？

フロム「いや、あんたが始めたんでしょ？」

あ～なんかみんなポケダン小説書いてるから俺も書こうと思ってね。
まあある程度はオリジナルいれようとしてこうなった。

ソロ「・・・世界観大丈夫かよ・・・」

うげえ・・・・あんまり言わんでくれ。

次回予告

フロム「さーて、次回のポケダンはー」
謎のオッサン「フロム、初めてのコンビ探検。ソロ、ソーダを飲んでビーリビリ。作者、恐怖のテンパリの３本立てでお送りします。」
ソロ「痺れるわー。（美味すぎる！！）」
フロム「ちょ、ソロ！？」

ｃｈａｐｔｅｒ１：探検隊結成

第一話：不審すぎるギルド？

「なあ、そういえば探検隊になるからには修行とかあるんだろうな？」

「ああ、そうね。最初のうちは依頼とかをやって修行をしてくわ。時々時間が空く日があるけどその時なら探検できるわよ？と、話してるうちに着きましたっと。」

「・・・・ここ？」

「ここよ。」

「え～～・・・・ここ？」

辿り着いた探検隊の申請場所は体全体ピンク色で大きな目と丸い体を持つポケモン、プクリンを模した何とも可笑しい建物。看板にプクリンのギルドと書かれていたが入り口には柵があって入れなかった。ソロのさっきまでの静かで無気力じみた声は無くなって普通の音量の声に変わった。

「あ、あのさ。もう一度いい？」

「なに？」

「ここ？探検隊の？」

「そう、ここ。」

「マジかよ・・・・・」

「ほら、この網に乗って。」

ソロは無理矢理金網の上に立たされた。と、そこに誰かの声。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形は・・・えーと、多分リオル！多分リオル！」

「何だ多分って！！」
「だって分からないものは分からないよ。」
下の方でなんかもめている。フロムは何となく分かってたようだ。
「何でもめてんだよ・・・・」
「リオルこの付近じゃ殆ど見ないからね。」
「あーまあいいや。そこ！まだ一匹いるな！？網に乗れ！」
「ニロゲム、あたしなんだけど！」
「んん？あーフロムか。じゃあもう入れ！」
入り口にあった柵が上に上がって入れるようになった。これで入っていいようだ。ソロは何かスッキリしなかったがつっ立っててもいる意味が無いので入ることにした。入り口の少し奥に梯子があった。フロムが先に降りてその後にソロが降りていった。現在ソロとフロムがいる所はギルドの地下1階。ここには沢山のポケモンが集っていた。ただ現在ここにいるのは全員ギルドの弟子だったが。ヘイガニやキマワリにビッパなどいろいろいた。
「どう？結構賑やかでしょ？」
「あー、そうだな。」
「て、ここで見ててもあれか。それじゃ、地下2階に行こう。」
フロムとソルは次に地下の2階へ向かった。地下の2階ではグレッグルが壺を磨いていた。フロムは気にしなくていいと言ってソロを扉のある個室まで連れて行った。その個室とはもちもんこのギルドの親方の部屋である。

で、その親方の部屋では・・・・・・

「お、親方様・・・・今月の予算、２２００ポケです・・・・」

「２２００？凄い凄い！」

「赤字的な意味で凄いですよ！マズイですよ！食事の量減らすか新たな弟子を雇って仕事させないと経営費が無くなりますよ！！」

先程の建物のポケモンと同じプクリン（親方）と計算手帳を持った頭が♪の形をしている特徴的なポケモン、ペラップが話し合っていた。予算の話をしていたようだ。ペラップの方はもの凄い焦ってるが親方の方は子供みたくはしゃいでいる。ペラップは大粒の涙を流して今後の予算を考えていた。

「どうしよどうしよどうしよどうしよう・・・・・ホントにヤバイよ。税率上げたほうがいいかな？でもそれすると弟子達が苦しくなるし、私のお小遣いも払ってこれって相当ヤバイよ・・・・」

そんなペラップに虫の知らせ？が来た。

「親方様ー！リーダーが出来ましたー！！」

「・・・勝手に決めるなよ。」

元気ハツラツなフロムと頭を右に４１度傾けたソロが入ってきた。ペラップはというと・・・・

「コラー！いきなり入るなっ・・・・て、弟子！？新たな弟子！？やったーー！予算が解消できるーーー！！」

ちょうどいいタイミングで来たため翼をバサバサさせていた。親方はソロに探検隊のチーム名を聞こうとした。

「やあ！新しい弟子、及びフロムのチームリーダーだね？早速だけどチーム名を決めて？」
「あ・・・ソロ、何か思いつかない？」
「いきなり言われてもな・・・・」
ソロはしばらく考えていたが、思いついたようで親方に言った。
「チーム名はネガシオン。否定って意味だ。」
「よーし、決まり！ネガシオンで登録するね。登録♪登録♪みんな登録……たぁーーーーーーっ！！」
このプクリン特有のハイパーボイスが周りに広がった。威力が凄まじいようでギルド全体が大きく揺れた。
「おい・・・こんなの聞いてねえぞ、フロム・・・・」
「ごめーん！言い忘れてたーーー！！」
「グエーーー！！やっぱ慣れないーーーーー！！」
3匹は耳を塞いでいた。数秒たってやっとハイパーボイスが止んだ。親方はハイパーボイスを止め後、後ろに置いてある宝箱みたいな箱をソロに渡した。
「おめでとう！今日から君も探検隊だよ！それと記念に探検キットを渡すよ。この中には探検に必要な道具が入ってるよ。開けてごらん？」
「ああ。」
ソロは箱の中を空けてみた。開けて見ると中にはトレジャーバッグと呼ばれる探検隊として活躍すれば物を入れる量が増えていくバッ

グと探検隊には必要な探検隊バッジ。最後にダンジョンの場所を示す不思議な地図。ただここにあるものだけではなかった。

「それとトレジャーバッグの中を見てみて。君に似合うリボンとバンダナがあるはずだよ。」

「オレに似合う？」

ソロは本当か？と思ってトレジャーバッグの中から1つのリボンとバンダナを取り出した。

「・・・・これが？」

「え・・・何その色？」

「あれ？うーん、おかしいね。そのような配色は無いはずだけど。」

「うわ～どくどくしい色だな・・・」

ソロのリボンの色は赤と黒という普通には無い組み合わせだ。バンダナの方はパワーバンダナと呼ばれる攻撃力を高めるバンダナだ。リボンの方は謎。何だか納得できなかったが、ソロは文句を言わずに親方にお礼を言った。

「ありがとう。」

「いいよ、別に♪あ、でもそのリボン他のに変える？」

「ああ、変え・・・・・」

ソロは不気味な配色のリボンをかえようとしたが・・・・

（何だ？手放してはいけないような気がする・・・）

「あーやっぱこれでいい。」

「本当にそれでいいの？」

「ああ、これでいい。」

ソロはリボンを変えようとしたが手放してはいけない感じがして変えるのをやめた。フロムは不思議に思ったがまあいいやで済ませた。ペラップの方は謎に思っていた。このことで話しが逸れそうになったが、ここで親方がソロにこれからのことを言った。

「まあさっきのはもういいみたいだし、これからのこと言うよ。しばらくは厳しい修行だけど頑張ってね！フロムと協力して助け合うのも忘れちゃいけないよ？」

「ちゃんとしてね？リーダーソロ。」

「・・・・ああ、分かってるよ。」

ソロにこれからのことを話した後、自己紹介をすることにした。

「あ、自己紹介が遅れたけど僕の名前はカミーユだよ。君は何て名前？」

「ソロ。独唱者って意味だ。」

「独唱者、何だかロマンがありそうな名前だね！そうだ、フロランも自己紹介しようよ。」

親方改めカミーユがペラップに自己紹介をするように言った。

「分かってますよ、親方様。私の名はフロランだ。以後、覚えとくよーに！」

「ああ、分かってるよ。」

こうしてプクリンとペラップ、カミーユとフロランの自己紹介が終わった。最後にカミーユがソロとフロムに言った。

「それじゃあ2人共頑張ってねー！友達、友達ー！」

「りょーかーい！ソロ、明日から頑張るわよー！」
「ハイテンションだなあ・・・まあ・・今のオレに必要なことみていだし、マジメにやるさ。」

その言葉を聞いた後、ソロとフロムは部屋から出た。カミーユは嬉しそうな顔をして窓から外を眺めた。ここは崖にギルドが建てられてるので地下の2階からは海が見える。

「このギルドもまた賑やかになるなあ♪」
「まあ確かに賑やかになるでしょうねえ。・・・・でも何であんな色のリボンが出てきたんでしょうかね？あんなの今まで一度も無かったのに・・・・」
「うーん、僕も分かんない。でも何か理由があると僕は思うよ？」
「理由ですかあ・・・・・嫌なものじゃなければいいですね。」
「うん、そうだね。」
（嫌なものじゃなければかあ・・・でもフロラン、あの色はたぶん良いものじゃないと思うよ・・・）

カミーユはあの色のことを心で思っていたが口にはしなかった。あのリボンは何なのか。それは現時点では分からない。

第一話：不審すぎるギルド？（後書き）

後書き　今回はこれで終了。↑体力切れ

フロム「ねえ、この後の続きは？」

カット。次回いきなり依頼行きです。

ソロ「・・・カットかよ・・・」

あれ、見たかった？

ソロ「オレは別にいいが他の奴にはその後分からんだろ。」

あーそうだね。でも許してくれるよね！？

フロム「どうだか。」

アアアアア・・・ダメージくる・・・・あ、それと次回は荒野の戦士達更新だから。

次回予告

謎のオッサン「良い子のみんなはメン〇スをコーラに入れては駄目ですよ？」

ソロ「じゃあ悪い子はいいんだな？」

フロム「ねえ、まさかやる気？」

ソロ「面白そうだからな。」

フロム「駄目！絶対！！」

第二話：ファーストミッション＆ベストコンビ？

第二話：まずは内容把握（前書き）

メチャクチャ遅れたぜ・・・・

ソロ「ＰＣ使えなかったからな。」

もうあんなの御免だ・・・

フロム「使う時間決めないとね。」

そうっすね・・・では連載再開。タイトルは変更しました。サーセン。

第二話：まずは内容把握

「起きろー！朝だぞー！」
「うるせえ・・・」
「きょ、今日も寝坊・・・」

二人が朝、最初に耳にしたものは騒音という名のモーニングコール。本当に騒音なので困る。その騒音という名のモーニングコールを発したのは騒音ポケモンのドゴームであったが・・・・・・・

「ねえ、ニロゲム。その騒音コールなんとかできないの？」
「なんともしない！第一、俺が来る前に起きて集合していれば聞かずに済むことだろうが！！」
「さっさと行こ。」
「「ちょ、無視して行くな！！」」
「～♪」

ニロゲムと呼ばれたドゴームとフロムの会話をスルーして口笛を吹きながら集合場所に向うソロ。フロムとニロゲムは慌ててソロの後を追った。
で、集合場所である地下2階の中央広間で耳にしたものはやはり・・・

「遅い！ギルドに来て早速寝坊するな！」
「悪い、眠かったから。」
「ソロ、呑気に言うことじゃないよ。」
「コイツがリーダーで大丈夫かよ、フロム？」
「た、多分大丈夫、うん。」
「行き先が不安だ・・・」

「ガー！話してないでさっさと整列しろ！（怒）」

フロランがソロ、フロム、ニロゲムの三人に怒りの罵声をぶつけて弟子達の所に整列させた。フロラン、あんたも十分騒音な声だぜ。怒りがエンジョイした初日だが、何時も通りの朝礼が始まった。フロランの声でが朝礼が開始された。

「では、親方さま。一言お願いします。」

ガチャ

親方の部屋の扉から、親方のカミーユが出てきた。目は開いているが・・・・

「ぐ～ぐ～ぐ～ｚｚｚｚ」

弟子達「ひそひそ・・・」「お、親方さま相変わらずだな。」「あれ、目が開いてて起きてるように見えるけど実は寝てるんだもんな・・・」「ヘイヘイ、さすが親方さま！そこに痺れる、憧れるー！」

何ということでしょう。カミーユは寝ながら扉を開けて来たのだ。それも目を開けたまま・・・その光景を目にしたソロはそれを参考にしようとしていた。

「オレもあーやって来ようかな？」

「いや、あれ無理あるから。ていうかやらないで。結果的にあたしが起こすことになるから。」

「はあ・・・無理か。」

ソロはため息を吐いて諦めた。まあ、やろうとしても無理だろうがな。異様な光景があったがフロランは気にせずに朝礼を進めた。

「親方さま、ありがたいお言葉、ありがとうございました♪」
（あれただの寝息だろ・・・）
（ソロ、それ言っちゃ駄目。）
「さあ、みんな♪親方様の忠告を肝に命じるんだよ♪」
（いやあれ忠告ｎ）
（追及しちゃ駄目！取り返しのつかないことになるわよ！？）

ソロとフロムはひそひそ話しで会話をしていた。フロムはソロのあれに対しての追及を必死で阻止していた。フロランは気にせずに続けた。

「最後に朝の誓いの言葉、始め！」
弟子達「せぇ～の！ひとーつ！仕事は絶対さぼらなーい！」
「当たり前だろ・・・」
「言っちゃ駄目！」
弟子達「ふたーつ！脱走したらおしおきだ！」
「恐らく、集団リンチだな。イヤだな・・・」
「だから駄目だって！」
弟子達「みっつー！みんな笑顔で明るいギルド！」
「逆に怖えよ。」
「何回言わせる気？（呆れ）」
「さあ、みんな♪仕事にかかるよ♪」
弟子達「おおーーーー！！」

こうして波乱の朝礼が終わった。朝礼が終わった後、弟子達はバラバラに散っていったが、２人立ち止まっているのがいた。ソロとフロムだ。

「で、オレ達はどうすればいいんだ？」

「えーと、地下1階に上がって依頼掲示版で依頼を選んで行くんだけど・・・その前にここで説明したほうがいいわね。これからの内容について。」

ソロはフロムからこれからの内容について説明し始めた。

「修行のことなんだけど・・・その修行の行き先は全て不思議のダンジョンってとこなのよ。」

「不思議のダンジョン？」

「そう。不思議のダンジョンでは空腹になるスピードが速いのよ。入るたびに地形は変わるし、落ちてる道具の種類や配置も変わる。さらに途中で倒れるとダンジョンの外に追い出されてお金も半分無くなるし、バッグに入ってる道具も半分ぐらい無くなったりするのよ。・・・でも、倒れるらへんの説明ははっきり言って殆ど適用されないわね。」

「適用されない？どういうことだ？」

「不思議のダンジョンで、出てくる敵なんだけど・・・本来、正気を失ったポケモンとお尋ね者しかいないのよ。でもこの世界の不思議のダンジョンには半悪魔って状態に陥ったポケモンが時々いるのよ。」

「半悪魔？」

ソロはこの半悪魔に疑問が出来た。これの詳細が気になるのだ。フロムがそのことに説明し始めた。

「半悪魔っていうのは、見た目はポケモンなんだけど・・両手足が赤と灰色に染まってるのよ。ポケモンで正気を失ってるところは変わらないんだけど半悪魔になっているポケモンは技の威力と範囲が通常のポケモンと比べて高いのよ。それに身体能力も上がってるし、単純な力勝負じゃ負けるわ。非力なポケモンでもバンギラスのよう

な重量級に張り合うほどよ。これが原因でダンジョンで倒れるより、奴らにやられてダンジョンの外に出られないことが多いからよ。ただ1つこっちが勝るのは頭脳だけ。奴らは頭が悪いってことがせめてもの救いね。」
「なるほどな。・・・他にはないのか？」
「後は～修行場所に関しては無いわね。まあ、残りは依頼に関してかな。」
「依頼に関して？それも説明必要か？」
「説明はー・・・はっきり言って無いけど、とりあえずはついてきて。見れば分かるから。」
「？」

ソロはフロムに言われて後についていった。地下の1階、ここが依頼を選び、契約する場所である。ここにある掲示版の前でまたフロムが説明を始めた。

「基本的に受け方とやり方は普通にやればいいけど、依頼の内容ね。これ見て。」
「？・・・・・これ、依頼？」
「そう、依頼。後ソロの今のレベルも考えてね。」
「はあ・・・・」

（落とし物くらい自分で取りに行けよ）

依頼に書かれてた内容はペンダントを落としてしまったから取りに行って欲しいという内容だった。これを依頼と言えるのだろうか？だが事実、これは依頼として成立してしまっている。ソロはため息を吐きながら依頼場所を見た。

「海岸の洞窟？」

「そう。昨日あたしと会った所のすぐ近くよ。ここはダンジョンのレベルも低いし、今のところ半悪魔も全くいないから安心して探検ができるダンジョンなのよ。初心者にはうってつけの修行場でもあるわ。」
「そうか。じゃあ行くとするか。」
「そうね。あ、そういえば技何がある？確か記憶が無いのよね？大丈夫？」
「あっ・・・・・・」

ポケモンにはそれぞれ覚えられる技と覚えられない技がある。体当たりや切り裂く、気合玉など。補助系の技もある。ソロはリオルで格闘タイプ。瓦割りなど気合玉などなどが覚えられる。だがソロには記憶が無い。ある程度の知識は取り残されているようだが記憶だけは無い。つまり自分の技を把握していない。早速壁にぶつかったソロ。

「え、ほ・・ホントに使える技何も知らないの？」
「ああ・・・・知らない。」
「・・・・・・・まあいいや、ダンジョンのレベルは低いんだし。そこで技の修行すれば問題は無いわね。」
「・・・じゃあ行くか。」
「そうね。」

こうして壁にぶつかりながらも依頼場所に向かう二匹。大丈夫だろうか・・・・・・

一方ある崖ではヒコザルとキモリ、ワニノコの3組がいた。

「いやーここは空気が新鮮だねえ～！！」

ヒコザルはハツラツな声で言った。キモリはそのヒコザルに質問をぶつけた。

「おい、ファル。本当にここに価値のあるお宝あるのか？」

「そりゃーあるに決まってるよー！」

「いささか心配になってきたぞ俺は・・・」

ワニノコは結果が見えてると思ってファルと言われたヒコザルを睨んだ。この３組がいずれ物語の歯車になるとは想像できないだろう。

第二話：まずは内容把握（後書き）

ルパン・ザ・サード♪

ソロ「いや違うだろ。」

うん、違う。でもコイツ等のテーマはルパン三世のテーマで決まってるから。

フロム「どう関わるの？アイツ等と。」

まあ、じきに分かるさ。ていうかテーマでどうなるか分かるだろ？

次回予告

ファル「さあ、俺の晴れ舞台」

ソロ「どけ。」ドガ！！

ファル「あらーーー！？」

ソロ「そしてファルは消えた、完。」

フロム「そうそう終わりにされても困るんだけど・・・・」

謎のオッサン「さよなライオン。」

ハボック「洗脳やめろーーーー！！」

第四話：ファーストミッション

第三話：ファーストミッション（前書き）

さあ行くぞ第四話！

ソロ「遅いんだけど。」

フロム「早くしてくれない？」

お前等なあ・・・・

第三話：ファーストミッション

ソロとフロムは依頼場所の海岸の洞窟にいた。ダンジョンの名だけあって海岸の近くだ。

「何でこんな近い所で依頼をやるんだか。」

「依頼だからよ。さっさと行こう。」

「ハァ・・・」

洞窟の中に入って行く2人。その後ろから3人の影が来ていることに気づいてなかった。

「クックック・・・オメエらあんな奴に負けたのか？」

「へへへ！そうなんすよ兄貴！」

「け！さっさと潰しに行こうぜ！」

「まあ待て。最適な場所に行ってからだ。」

影の正体はズバットとドガース、そしてリーダーらしきスカンクのようなポケモン、スカタンク。憂さ晴らしか、それとも仕返しか。ともかく企みは動き出した。

ソロは途中の通路で技の指導をフロムから受けていた。

「はっけいは掌打（しょうだ）のイメージよ！手の平から衝撃波を生み出すようなイメージをしてやって！」

「フン！」

はっけいは物理技の1つ。手の平を相手にぶつける技。衝撃を相手

に吸収させて麻痺状態にさせることも可能、威力も少し高めで扱い易い技のため、上級者も使う者がいる。ソロは技の飲み込みが早く、すぐにはっけいが発動できた。

「へえー飲み込み早いじゃない。じゃあその飲み込みに乗ってブレイズキックもやってみない？」

「ブレイズキック・・・炎を足に宿して蹴る技か。」

「そう、そういった知識は残ってるのね？」

「みたいだ。」

次に覚えようとするのはブレイズキック。技の難易度は高いがそれだけ使う価値はある。先程ソロが言っていたがブレイズキックは炎を足に宿らせ、相手を蹴りつける技。追加効果で時々相手をやけど状態にさせることも可能。

「じゃ、やってみて！」

「ブレイズ・・・敵が来たみたいだな。」

「あ～・・・そうみたいね。」

奥の通路からカラナクシとサニーゴが数体。ダンジョンのレベルはそれほど高くないため敵の動きも遅い。

「さて、実戦ね。ソロ、行けるよね？」

「当然。」

サニーゴが最初に体当たりを繰り出してきた。動きが単調のため避けるのは簡単、受け流すこともカウンターを狙うのも簡単。ソロは当たる直前に一歩後ろに下がり、ただの膝蹴りをくらわし、追撃で掌打を当てる。ただの攻撃であるにも関わらず吹き飛ばす。次にカラナクシが水鉄砲を放った。フロムがソロの近くに来てシャドーボ

ールを放つ。威力差で水鉄砲が押し返され、カラナクシも吹っ飛んでいった。

「弱い。」

「油断しない！後ろ！」

ソロの後ろから何時の間にかカブトが接近してきていた。後ろ向きのまま蹴りつけて怯ませ、隙が出ている内にうろ覚えのままでブレイズキックを行う。どうやら成功したらしく足から炎が出て、カブトを蹴りつける。タイプ関係であまり効かなかったがやけどを負わせることができた。さらに追撃ではっけいを繰り出す。タイプ関係によって大ダメージを与えられたカブトは数メートル吹っ飛ばされ、転がって気絶した。

「出直して来い！」

「ソロ！一歩後ろに下がって！」

フロムの指示を受け、一歩後ろに下がる。目の前を水鉄砲が通り抜けていく。後少しで当たっていた。

「電光石火！」

フロムが電光石火を行って水鉄砲を放ったサニーゴを攻撃。ノーマルタイプが岩タイプに攻撃をしても効果的なダメージは与えられないが接近するには十分だった。

「吹き飛びなさい！」

至近距離でシャドーボールをぶつけてサニーゴを吹き飛ばした。壁にぶつかりそのまま気絶。

「フロム、頭下げろ。」
「え！？う、うん！」

ソロがフロムの上をジャンプして通り、カブトにただの飛び蹴りを当てる。また追撃にカブトが吹き飛ぶ前にカブトの体をつかみボディブローを空中でくらわし、低空で1回転し、肘打ち状態にして地面に叩きぶつける。止めに大ジャンプし、急降下かかと落としを当てる。カブトは度重なる連撃と威力に耐え切れずに気絶。

「追撃が凄いね。あたしはあんなの真似できないよ・・」
「ああ、オレ、バトルセンスはあるようだな。」

周りの敵を一掃し、実戦も兼ねたとこで奥に進んで行った。ソロとフロムは後ろにあの3人組が見ていることに気づかなかった。

「あ、兄貴。あのリオル、追撃が凄いんだけど勝てるんすか？」
「問題ない。あの女に集中的に攻撃、人質を取れば恐らく攻撃できまい・・・」
「さすが兄貴！実力が駄目なら頭脳っすね！」
「ククク・・それ褒めてるのか？」

果たして彼らにそれができるだろうか？

ソロとフロムはダンジョンの奥、奥、奥。とにかく奥に向かっていた。途中でアイテムも拾っていき、トレジャーバッグの中に入れていった。しばらく進んでいくと奥地らしきところに来た。

「行き止まり？」

「違うわよ、ここで最後。・・・・ここまで来て何も無いなんてことは無いわよね？」
「だったらここに・・・あ、足元にあった。」
「足元！？気づきなさいよ。（汗）」

なんとソロの足元に水色のペンダントがあった。依頼のペンダントだ。それを拾い、トレジャーバッグに一端入れる。

「じゃあ、帰ろう？」
「待て。・・・・おい、『さっきからなにコソコソ着いて来てるんだよ』？」
「ククク・・・なんだばれてたのか・・・」
「へへ！昨日の仮は返させてもらうぜ！」
「け！ズタボロにしてやるよ！」

先程までソロは気づいていなかったと書いたが前言撤回。初めから気づいていたようだ。ズバットはソロを嘲笑するような態度をし、ドガースも嘲笑するような態度、スカタンクは見下している表情だ。ただし、ソロはなんとも思ってない模様。

「仕返しに来たのか？」
「ククク・・それはコイツ等のことだ。俺様がお前にしたいことは、俺様のチームに手を出したことを後悔させるための見せしめだ。」
「「ああ、初日から面倒な相手と遭遇・・・・」」
「「「無視すんな！！」」」

ソロとフロムがため息を吐いてスカタンクの話を途中無視。３人組はつっこむ。スカタンクはイラつきながらも発言し続ける。

「とにかく！俺様のチーム、ドクローズ２に手を出したからには！

痛い目に遭ってもらうぞ！！」
「ふん、所詮は性悪人の掻き集めだろ。いいぜ、潰してやるよ。」
「やるしかないわね。お馬鹿チームなんかと戦いたくないけど。」
「「「舐めるのもいい加減にしろ！！毒ガススペシャルコンボＥＸ！！」

はもりながら毒ガスと煙幕、どくどく、ヘドロ爆弾等の連携技を繰り出してきた。

「く、クサ！！」
「環境潰す気だろコイツ等。汚物は熱で消毒しねえとな、ブレイズキック！」

ソロがブレイズキックを維持した状態でスケート選手のような動きで連続キックを行いながらドクローズ２に向かっていく。煙幕で前が見えはしなかったが、攻撃の来る方向から何所にいるか分かる。ドクローズ２はソロが向かってきていることに気づいていない。フロムは頭で作戦を考え、実行した。

「煙幕を逆に利用しよう。シャドーボール！」

煙幕の中にシャドーボールを連続で放つ。

「けっ！兄貴、なんか手ごたえがない気がするんだが！？」
「そんなことはないは」
「見つけたぞ・・」

ソロがスカタンクの目の前にいた。ソロはスカタンクにアッパーをくらわし、空中高くに打ち上げる。

「ぐおお！！」
「風車上げ・・メンコ落とし！！」
空中でさらに1回転してアッパーを当て、空中で浮いたまま逆回転してかかと落としをくらわす。下に落ちそうになるが、空中でまだ追撃が続いた。
「まだ終わりじゃねえぞ。」
ドゴ！
「ゴハ！」
首を掴まれて膝蹴りをくらい、空中でまた1回転して地面に投げつけバウンドさせる。ソロが着地し、もう1回バウンドして地面に付く直前に足払い蹴りで浮かし、胴体を掴み上げて止めのはっけいを行う。スカタンクはそのまま吹っ飛ばされる。
「つ、追撃が・・・・つよ・・・すぎる・・・ガク」
「え？ちょ、兄・ギャア！？」
「ズバッ・・グエエ！！」
後からフロムの放ったシャドーボールがヒットし、一発で倒れる（弱い）。ソロとフロム、両者共無傷で返り討ちにした。
「さて、後は勝手にダンジョンに追い出されるだろうし、帰るとするか。」
「そうね。・・・もう来ないでよ・・・」
2人は探検隊バッジを翳してダンジョンから脱出した。ドクローズ

2、作戦実行出来ずに惨敗。

第三話：ファーストミッション（後書き）

ギルドにて。

フタチマル「いやー助かりました！これお母さんから貰った大事な物なんですよ！あ、これ依頼の報酬です。」
ソロ「２０００ポケ・・・多いな。」
フロム「す、凄い！でもね、ソロ・・・」
ソロ「何だ？」
フロム「これ・・報酬ギルドに９割カットされるのよね・・・♪（苦笑い）」
ソロ「・・・・は？」
フロム「つまり、あたし達の収入は・・・２００ポケ・・」
ソロ「・・・・ｏｒｚ。」
フロラン「悪いね、運営費とか食費とかでこういう風にしなきゃいけないんだよ・・・」↑罪悪感を感じてる
ソロ「・・・なら仕方ない。」

これで大丈夫なのか？次回予告。

次回予告
ソロ「みんなで魔法なんとかになろう！」
フロム「あんた後書きでキャラ変わってるよね？」
謎のオッサン「暗黒盆踊り、今夜７時から」
フロム「やんないからね！？」

ｃｈａｐｔｅｒ２ルパン・ザ・ファル　第一話：その名はファル、通り名ルパン

第一話：その名はファル、通り名ルパン（前書き）

ある種の問題会です。

第一話：その名はファル、通り名ルパン

「○○○○・・・まだ・・に・・・・・・するな・・・」
「なんでだよ○○○○？・・・は・・・・・・だろ？」
「まだ・・・ぞ・・・」
「まあまあ落ち着こうや。・・・・・・・・・なんかねえよ。」
「○○○○には分かるまい・・・」
「はあ・・・早いとこ・・・・・してほしんだがなぁ・・・」
「○○○○も考え・・・・んだ。」
（・・・・・何だこの声？何を話してるんだ？それに途切れ途切れで聞き取れねえ・・・）

夢の中だろうか？周りは真っ黒で何も見えない。声の主はどこから来ているのかも分からない。自分の姿は見えるがそれ以外何も見えない。途中から眠気までしてきた。

（こりゃ・・・もう起きてるの無理だな。）

ソロは目を閉じて倒れそうになった。・・・その瞬間。

「ハッ！」

目が覚めた。窓からは朝日の光が差し込んでいて明るかった。だが太陽は別の場所にあるためここからは見えない。

「結局夢か。・・・・なんだったんだ？ただの気のせいだといいんだが・・・」
「あ、アンパンラーメンが迫ってくる・・・」

（・・・・・なんの夢だよ？）

フロムはうなされて寝返りをしていた。とりあえず体を揺さ振ってみるが全く起きない。殴ろうかと考えたがチームワークを乱さないようにするため殴ることは避けることにした。ソロは起きるまで準備をすることにした。まずトレジャーバッグの中身を確認する。

「昨日の収穫は・・ねじりはちまきと・・パワーバンダナ２つ目。モモンスカーフもフロムが着けてるから２つ目。２つ目は資金送りだな。後は金を少々とリンゴ５個にオレンの実３つか・・・初期からすでにあるのがパワーバンダナと・・・この不気味なリボン（・・・）か。」

トレジャーバッグからあの赤と黒のリボンを出した。改めて見るがやはり不気味だ。

（効果も分からねえし不気味で着けたくねえし・・・ん？）

ソロはこのリボンの不審なとこを発見した。

（このリボン、真ん中にある金具で止められてるのか。それにリボンにしちゃ生地が厚いな。それによく見ると端という端が虫食いみたくボロボロじゃねえか・・・金具を外してみるか。）

金具の止め金部分に手を掛けて外す。するとリボンであったものが広げてみるとボロボロの赤と黒のマントのように長いコートらしきもの（ローブに近い）だった。サイズが自分ピッタリだ。

「・・・なんでリボンから「ローブ」らしきものになるんだ？」

とりあえず着てみる。・・・・・特に何も起こらない。ここでは効果が発揮されないのかもしれない。なんとなくパンチをしてみようとしたその時。

「う、ううん・・・あ・・おはよう、ソロ。」
「ああ、おはよう。・・・・寝ぼけ面だな。」
「眠いんだからしょうがないじゃない。」

フロムが目を擦りながら起きた。ソロは待ちくたびれたような顔をした。

「お前起きるの待ってたんだぞ？」
「起こしてくれていいのに。」
（揺さ振ったが起きなかったんだよ、お前が・・・）
「どうしたの？」
「ハァ・・なんでもない。とりあえず支度しろ。」
「何でため息？」

2人はトレジャーバッグの点検、装備の確認、それぞれ行った。そしえフロムが今更なことを言う。

「ねえ、そういえば何でローブを身に着けてるの？ていうか何時から手に入れたの？」
「あの赤黒リボンを分解したらこれになった。なんとなくだが着てる。」
「ああ、そう・・・何か効果あるといいね。」
「有益なものだといいがな・・」

こうして2人の修行生活が再びスタートした。

一方ある建物では騒がしいことになっていた。

「ルパンだー！怪盗ルパンが現れたぞー！」「追え追えー！宝物を取り返せー！」

「だーから俺はファルだっての！！」

廊下の通路を一匹のヒコザル、あのファルが王冠を持って逃げていた。後ろから追ってきているのは足の遅いポケモン達・・・ではなく足の速いポケモン達。だがファルのほうが数段早い。ファルは通路の途中で右に曲がり、走る。が、途中で行き止まりに来た。後ろからポケモン達がジリジリと来るが・・・

「ばあ～い♪ってあら～～～～！！」

「えええええええええええええ！？！？」

ファルが壁を蹴った瞬間デカイ木槌が壁から出てファルの背中を叩いた。笑えない勢いで館の遠くに放り出されたファル。ちなみに王冠は持ったまま。

「誰だあそこに仕掛けなんか作った奴は！？」「知るかよ！わしだって始めて知ったわ！！」

場面は変わり、館の奥地に1体のハガネールがいた。

「ファルめええ・・・またもわしが来る前に逃げられたかー！怪盗ルパンの通り名を持つヒコザル　ルパン・ザ・ファルー！貴様必ずこのコガネスケがとっ捕まえるからなあああ！！」

館の遠くでは背中が曲がったファルとワニノコ、キモリがいた。

「お帰りだなファル。お前にとって可愛い子はいたか？」

「いだだだ。居なかったぜザグ。居たのはこのお宝ちゃんと警備のとっつぁん達だけだったぜ。」

「期待するだけ無駄だろ。」

「ちっとは夢持とうぜキリマル？と、まあお宝は盗み成功！な～はっはっはっはっはー！！」

ザグと呼ばれたキモリとキリマルと呼ばれたワニノコ、そしてヒコザルのファルは談笑をしばらく続けていた。

「さて、次は何所に行くんだ？ファル。」

「次ねえ、トレジャータウンってとこギルドの弟子見に行こうぜ！」

「・・・なんでだ？」

キリマルが質問をした。その答えは・・・

「最近な・・新しいチームができたんだとよ！で、そんなかに可愛

いイーブイの女の子がいるって聞いたんだよー！でも彼氏は間に合ってるみたいなんだよねー・・・ちなみにこれは怪しいじっちゃんから聞いた。」

こんな理由だった。どうやら女に目がないらしい。ナンパ体質とみえる。

「そんな理由で行くのか？」

「馬鹿らしい・・・」

ザグとキリマルはくだらないと頭を下げる。ファルはまだ熱く言うが・・・

「勿論ちゃんとしたお宝探しだってあるぞ？ほら、確か「未開の荒野」ってとこ！あそこの地図が手に入ったんだよ！つー訳で支度支度ー！行く途中で弟子達にも会いに行くぞー！！」

「それはお前だけで行け・・・（ザグ「・・・あ、でもイーブイの女の子には若干会ってみたいな。すごいモフモフだったら最高だな♪」）

キリマル「女ったらしが2人・・・」

怪盗？ルパン・ザ・ファル現る。

第一話：その名はファル、通り名ルパン（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ファル「レッツゴー！」
ザグ「イエーイ！」
キリマル「ボケが・・・」

ソロ「支障がなきゃいいが・・・」
フロム「多分・・・無理。」

次回予告へ

次回予告

ファル「納豆をパイに入れよう！」
ザグ「そしてゲーセンの店員にぶつけるんだ！！」
ソロ・キリマル「イット・イズ・ワンダフル！ソーエキサイティング！！」

ファル・ザグ・キリマル・ソロ「ヒーハー！！」
フロム「ねえ、絶対おかしいよこれ。ねえ、」
新キャラ？「真面目にやってください。」

第二話：リンゴの森にて

第二話：リンゴの森にて（前書き）

今月は探検隊バーゲンセールだ！

ソロ「仕事連絡ここでするか。」

フロム「駄目でしょ。ここじゃ。」

後で活動報告にも書くよ。では・・・

ファル・ザグ・キリマル「第二話！」

第二話：リンゴの森にて

「さあ今日も仕事に取り掛かるよ♪」
「「オーーー！！」」
「さてと、2日目か。」
「んじゃ、今日も依頼掲示」
「あーちょっと待ったそこの新チーム、ネガシオン。」
フロランがソロとフロムを呼び止める。なんらかの頼みごとだろうか？
「なんだ、一体？」
「お前達には悪いんだがリンゴの森に行ってセカイイチを取ってきてほしい。」
「え～またセカイイチ～？」
フロムがうんざりしたような顔をする。というよりもうんざりそのままだ。一方ソロは分からず。
「ソロはその顔だとセカイイチを知らないようだな。では説明しよう。セカイイチとはとても大きくて美味しいリンゴなのだ♪そして親方様の大好物・・・」
「おい、声のトーン下がったぞ。」
「ようは親方様の大好物がトラウマってことよ。はぁ・・やんなきゃ恐ろしいことになるしなあ・・・行こう、ソロ。」
「頼んだぞ・・・」
フロランがゲッソリした顔でその場から立ち去る。ソロはあまり納得できなかったが結局フロムとリンゴの森へ行くことにした。ギル

ドから出た後、ソロはもう1つの準備をすることにした。

「トレジャータウンで準備を揃えるか。」

「道具を売りに行くの？」

「同じのなんていらないだろ？効果が上乗せされるわけでもないし。」

ソロはトレジャータウンと呼ばれるギルドのすぐ近くの町に移動した。実はソロとフロムは依頼が終わった後のすぐにトレジャータウンの把握をしにいっていた。勿論フロムはトレジャータウンのことを知っていたため、ソロはフロムに色々教えてもらった。とりあえずソロとフロムが向かった先はカクレオン商店。ここでは探検に必要な道具や食料などが売られている。グミと呼ばれる食料もあるが、これは特殊な効果が出るためと調達が難しいために安価ではない。ソロがカメレオンのようなポケモン、いろへんげポケモンのカクレオンの2人のところに行った。ちなみに右側にいるカクレオンは色が若干紫色である。

「「いらっしゃ～い♪」」

「この2つを売る。後、リンゴを3つくれ。」

2つ目のパワーバンダナとモモンスカーフを売却してリンゴを3つ買った。買い物を済ませたその後、リンゴの森に向かった。（飛ばすの早いなオイ）

時間を飛ばして・・・・・リンゴの森に着いた2人。ダンジョン

に入る前に確認をする。

「装備は？」

「万端だ。・・・ここには半悪魔いるのか？」

「・・・・・・低確率で・・」

「なら遭遇しないことを祈るか。」

2人は緊張感を持ってリンゴの森へと入っていく。進んでいく限りそう手強いポケモンはいなかった。キャタピーやらミツハニーやらで本当にそう強いのはいなかった。ソロがブレイズキックと体術でむしポケモンや、くさポケモンをごり押し気味に倒していく。フロムは電光石化とシャドーボールを駆使し、高機動型で倒していく。

「ブレイズキック。」

「シャドーボール！」

次々に進んでいく二人。途中、スピアーが来たが、ソロが空中で投げ飛ばして地面に無理矢理降ろす。バウンドしたところを素早く着地してフルスイングのアッパーカットで攻撃、スピアーがグルグル回転して吹き飛ぶ。殆どをソロが片付けてしまうため、苦戦することはなかった。

まあ、強いて苦戦すると言うならバタフリー、ナッシー等である。状態異常を引き起こす技や連続攻撃技で行く手を阻まれたのだ。だが、動きをよく見ていたため、ダメージを追うことはなかった。しばらくダンジョンを進んでいると奥地に到着した。

「あれがセカイイチか・・・随分とでかいリンゴの木と果実だな。」

ソロとフロムの前には3階建て以上のでかいリンゴの木。取得目的のセカイイチのようだ。リンゴ本体も木の大きさに相応しい大きさ

だ。それ加えてにつやもある。フロムがセカイイチを見ながら言う。

「それだけ美味しいわよ、あれは。実も果汁だってすごく美味しいもの。さてと、昨日みたく面倒事が起きる前に帰るとしましょうか♪」

「オレが取りに行ってくる。お前はそこで待ってろ。その手じゃ枝切れないだろ？」

「う・・痛いこと言うね。」

フロムがソロを恨めしそうに言う。ソロはそれを無視し、木に向かってジャンプした。木に登った後、セカイイチの枝部分を手刀を水平に振って斬っていく。フロムは下でソロの様子を見ていた。

「やっぱり、記憶を失う前って戦闘得意だったのかな？技の水平斬りじゃなくてただの手刀の水平斬りなんてそんな簡単にできないはずなのに・・・」

下から見て思う。何故、あそこまで戦闘センスがあるのか？記憶を失っているにも関わらず・・何故、戦い方が身に着いているのか？ここに来るまで、フロムはソロの様子を見ていた。左からパラスが来た時、ソロが素早く反応してブレイズキックを当てた。また、バタフリーが１００メートル先にいても微かな音でソロがまた反応して鉄の針を投げてバタフリーに当てた。各感覚が研ぎ澄まされているように思える。それと同時に思う事・・いくらなんでも戦い方が上手すぎる。フロムはあまり考えたくないことを考えてしまった。

（誰かに戦闘のために鍛えられてたとか？それとも、復讐のため？・・・）

「おい、もう終わったぞ。」

「え？あ、うん。」
「ボーっとしてる場合か？食料の確保もできたし、帰る・・・・・まだ帰れそうにないな・・・」

ソロが身構える。それと同時にフロムも身構える。身体中に緊張が走る。２人が来た道から両手、両足が赤と濃い灰色で染まったざっそうポケモンのクサイハナ。頭の花部分から灰色の粒子のようなものが出ている。

「・・・・あれが、半悪魔だな？」
「・・そうよ。気をつけなさいよ・・・手を抜いたらやられるからね！」
「ナ・・ナ・ゾー・・・・」

呻き声を上げて近づいてくる。ソロがまず鉄の針を４本飛ばす。するとクサイハナは右に素早く避ける。

「！？」

クサイハナは元々素早さはあまり高くない。が、目の前の半悪魔となったクサイハナはまるでジュプトルのような速さで避けた。ソロが驚くが、それで攻撃の手は緩めない。すぐに接近してブレイズキックを当てる。クサイハナはくさタイプとどくタイプ。ブレイズキックはほのおタイプの技。この場合、どくは普通のダメージ量になるが、くさタイプがあるためダメージ量が増える。これで効くと思った。確かに効いた。だが、大きく怯みはしなかった。

「ちっ！」
「ナ・ゾー・・・・」

毒の粉をソロに向けて振り撒く。素早く後ろに下がったため、吸い込むことはなかった。フロムがソロの後ろからシャドーボールを数発放つ。クサイハナはまた素早く左右に避ける。その隙にソロはクサイハナの背中に回りこむ。

「頭が馬鹿ってことは本当みたいだな。」

ドガ！

ソロがクサイハナの背中と頭を右、左の順で膝蹴りをする。それだけで済ませる訳がなく、頭の花部分を両手で掴み、左脚で打ち上げる。クサイハナが空中に浮いてる間にソロは両足にブレイズキックを発動させて力を貯める。ソロのちょうど頭に来たところで右脚から回転蹴りを行う。

「そのままぶっ飛べ！」

左足の裏、かかとで蹴り飛ばす。クサイハナが悪足掻きをするように毒の粉を振り撒こうとするが・・

「毒の粉を撒き散らさないで、シャドーボール！」

フロムがシャドーボールを放って技を中断させる。クサイハナは地面に倒れ、そのまま動かなくなった。気絶で済んではいたが。

「もういなさそうだな。」

「ふう・・じゃ、帰ろう。」

ソロとフロムはしばらく周囲を確認した後、ダンジョンから脱出した。

一方、ファルとその一味はトレジャータウンにいた。

「おい、ファル。ここか？」

「ああ♪ここだ。」

「小さい町だな・・」

さて、この3人組み、目的はあるものの、その時に問題が起きそうな予感がするのは気のせいだろうか？多分気のせいではない。

第二話：リンゴの森にて（後書き）

終わりさ！スランプ気味だ。

ソロ「おいおい。」
フロム「大丈夫なの？」

多分問題ない。

ソロ・フロム「「駄目だこりゃ。」」

あ、そうそう。この半魔界の探検隊のイメージテーマ曲の募集中！
現在の候補

作者が考えたの：ブレイブルーコンティニアムシフトのＯＰ「碧羅の天へど誘えど」
クロウドさんが考えたの「月蝕グランギニョル」

次回予告

ソロ「焼きそうめん！」
ファル「納豆ピザ！」
ザグ「メロンラーメン！」
キリマル「イワシアイス！」
謎のオッサン「マグロティッシュ。」
フロム「絶対誰も食べたくないから！！それと最後のなに！？」
新キャラ？「病院行ってきてください。」

第三話：トレジャータウンでの大騒ぎ―責任取れルパン・ザ・ファ

ルーｂｙコガネスケ

第三話：トレジャータウンでの大騒ぎ―責任取れ　ルパン・ザ・ファル―by

大波乱の第三話だ・・・

ソロ「オレはしーらね。」

ファル「うひょー！やっと来たぜえ！」

はいはい、テンションの高いこと。では第三話！

※文章の出来が悪いです。

ルパン・ザ・サード♪　あり？←ＣＭカット時のあれ

第三話：トレジャータウンでの大騒ぎ―責任取れ　ルパン・ザ・ファル―by

ザグとキリマルは最初に近所の人達と普通に挨拶をして聞き込みをしていた。探検の話だったり、宝の話だったり様々。ファル達はこの時にいい宝があるところを探っていた。収穫は、

「でっどうだったん？」

「未開の荒野の情報ばっかだ。もう地図持ってるから役に立たないな。」

「こっちは収穫があった。トゲ山というダンジョンに盗賊の宝が眠ったままのようだ。世間に知られているというのにな。」

「へえ～それは興味深いな♪よし、候補に入れるぞ。」

ファルはザグとキリマルが聞き込みをしている間に探検用のショルダーバッグを購入し、その中から手帳を取り出して書き始めた。手帳にはチェックの付いた地形名やダンジョン名があった。まだチェックが付いていないのも所々ある。余白があるところに先程聞いたダンジョン、トゲ山を書き入れる。書き終わった後バッグに入れ、辺りを見回す。

「なーんか嫌な感じがするんだが・・」

「俺も。」

「・・・・・恐らくアイツだ・・」

3人はガラガラ道場と書かれた建物に隠れる。それから少し時間が経ち、3人にとって嫌な相手のオッサン声が聞こえてきた。

「ルパーン！どこだあー！」

（ゲー！やっぱり来やがった！そして俺はファルだっつの！！）
（おい、どうするんだよ？ここ小さいから回りこんで逃げようにも難しいぞ。）

「へっ・・へっ・・ヘックション！」
「「キリマルー！！」
「！そこかー！！」

事もあろうかクシャミをしてしまったキリマル。そのクシャミにあのハガネール、コガネスケが道場に回りこんできた。尻尾には特注の脅威の3連装手錠が縄で結んである。なんだと！？

「今日こそ貴様を逮捕するぞー！」
「うひえ～！コガネのとっつぁんしつこいぞー！」
「逃げろ、逃げろおお！捕まったら自由がねえぞー！」
「・・・・不覚だ・・」

3人はすぐさま足で地面を蹴ってコガネスケの横を通り抜ける。それと同時に手錠を結びつけた尻尾が前から来る。ファルがあなをほるで2人を連れて地面に潜り、回避する。一定の距離で地面から出て、走りだす。

「にーがすかー！」

アイアンテールを繰り出して道場を破壊しながらファル達に当てようとする。道場にいた道場主はこのより後「なんてことだ～（泣）」となるだろう。この騒ぎは当然すぐに広まり、コガネスケが暴れ回っているのを探検隊が駆けつけ、止めようとする。が・・

「邪魔するなー！」

「どわーーー！！（汗）」

尻尾で追い払われる始末。さらにはスーパータフ。効果抜群のじしんをくらってもなんのその。全然ダメージになっていない。ただ周辺の建物に被害が出ただけだった。コガネスケは再びファル達を追いかける。ファル達はカクレオン商店に入り込み、身を隠す。だが、それは無意味に終わった。

「そこじゃーい！」

ドカーン！

商店をアイアンテールで吹き飛ばした。それしていいのかあんた！？ちなみにカクレオンの２人は何故か留守だったため、無事で済んだ。商店は潰れたが。

「とっつぁん激ヤバ！なに普通に商店壊してきてんの！？」

「貴様捕まえるためならワシはどんな障害も破壊する！さあ覚悟ー！」

「おい、オッサン。」

後ろを振り返るとそこには赤黒いローブを着たリオル、ソロがいた。

「ここでなー・・・」

そう言いながら尻尾を掴む。

「うるさい音を出すな！」

「のわあああああ！！！」

ヒュー・・・・・・ドボーン・・・・

遠くへ投げ飛ばされて行き、海に落ちた。探検隊達は落ちて行ったコガネスケを見た後、妙にホッとして去っていった。パンパンと手を払ってそのまま去ろうとするソロ。そこをファルが声をかける。

「いやー♪助かったぜ。サンキューな♪」
「助けたつもりはない。」
「それでも助かったし、感謝してるよ。おお、そうだ。お前ってプクリンのギルドの弟子か？」
「そうだが、なにか？」
「ほ～そうか。すげえ強いんだな。あ、名前教えてくれよ。俺はファルだ♪」
「・・・・ソロだ。」

キリマルとザグはその様子を見ていて来はしなかった。が、ファルが呼んだため、来て自己紹介をした。

「俺はザグ。まあ、コイツと腐れ縁な関係だ。」
「キリマル・・あることでこの2人と行動している。」
「まあ、この3人組みで旅でもしてるんだ。時々お宝も探したりな。おっとそろそろ時間になるな。それじゃあな♪次会う時はちょっとゴタゴタあるかもしれんけどその時はよろしくな！（コガネのとっつぁんの騒動のせいでここには居れないな、今日は。）」
「じゃあな。（おいおい、もう行っちまうのかよ。挨拶一人しかしてねえじゃん・・・）」
「また会おう。」

そういって3人はトレジャータウンから早くも出て行った。また来る可能性もあるが。ソロは辺りを見回した後、ギルドに向かった。

（たく、何をしたらああなるんだよ・・）

その頃、コガネスケはどうやって泳いだのか、浜辺にいた。荒い息を吐いて休息をとっていた。

「ぜえ、ぜえ・・死ぬかと思ったわ・・あのリオル、後少しでルパンを逮捕出来たというのに・・・邪魔しおって・・！」

憎々しげに呟いて浜辺から去るコガネスケ。浜辺には綺麗な夕日の光が炎のように海で揺らめいていた。この後コガネスケに多額の修理費が寄せられたのはいうまでもない。

第三話：トレジャータウンでの大騒ぎ―責任取れ　ルパン・ザ・ファル―by

うーん、今回は文章があんまりだな。

ソロ「時間というプレッシャーにやられたか。」

うん・・次回から新章に突入だ。何故かんなに章が早いかって？追い込みだよ追い込み。

では、マジメ次回予告。

次回予告

？「四騎士の内、最初の騎士。最弱であり最強でもあるおれ。おい、ソロことガキ。さっさと起きろ。アイツ等に地獄の雷をぶつけてこい。このブリッツの力をな！」

ｃｈａｐｔｅｒ３：四騎士―南の騎士　稲妻の化身ブリッツ―

第一話：序の口

ソロはまた暗い空間。自身の夢の中にいた。辺りを見回してもやはり暗闇しかない。今回は前みたく声はまだ聞こえてこない。いくら待ってもだ。出れるとしたら寝ることだろうと目を瞑って寝ようとしたと時、声が聞こえてきた。

『貴様、本当に人間か…？一体なんなのだその力は？』

しわがれた声が聞こえてきた。人間？何故人間が出てくる？それに力とは？ソロが混乱している間に次の声が聞こえてきた。

『テメエらは人間を舐めすぎだ…人間ってのはな…しつこくて汚くて身勝手で意味不明だから、雑魚の癖してクソな事もするし、何をするかも分からねえ奴なんだよ。神をぶち殺そうとする奴だっているしな。結論から言えば雑魚と呼んでるやつを甘く見るなってことだ。さてと、じゃあ…アバヨ。』

若い男の声がしてから以降、何も聞こえなくなった。そして前にはなかった事が起きた。光が上から差し込んできたのだ。その光は蒼色に輝き、妙な感覚が体に走る。

「一体なんなんだよ…この夢は？それとこの蒼い光、なんだ？まるでオレを見てるような…」

ここで意識が途切れ、目を覚ました。

「……連続して夢を見てるな。…オレになにかしてほしいのか？」

腰を上げて窓から外の様子を見る。光が差し込んでいて太陽は昇っていた。やはり太陽はここからは見えないが…

「今日も一仕事だな…」

トレジャーバッグの整理をし、修行の準備を終える。この後、しばらくしてフロムが起き、何時もの朝の集会に行った。

「さあ今日も仕事に取り掛かるよ♪」

「「オーーー！！」」

あのファルと会った数日後からの修行生活が始まった。今日は何をするか…フロムと話している間にカミーユが珍しく2人のところに来て話しかけてきた。

「やあ、2人共♪修行は順調？」

「まあな。それよりなにか用があるのか？」

「なんだろう？」

2人が疑問符を浮かべて聞き返す。それでカミーユが言ったことは…

「2人ってさ、そろそろ実力も出てきたからランクの高いものに挑戦してみたら？」

「…そうだな、ランクの低いモノは飽きてきた。」

「そうね…じゃあ行こう、ソロ。」

ソロとフロムは地下1階の依頼を受ける掲示版のところへ向かった。

その後ろ姿を見守るカミーユ。少し集会場の辺りを見回して自分の部屋に向かっていった。

ソロとフロムは依頼掲示版の前に立って今日も依頼を選んでいた。ちなみにソロはもう普通の依頼に飽き飽きしていた。やはりただの物品捜索ではつまらないのだろう。ソロは依頼掲示板から離れ、右側にある掲示板に移動してそちらの掲示板を見る。

「お尋ね者ポスターか…」

見れば凶悪そうなメンツがズラリと並んでいた。中には馬鹿っぽい顔をしたポケモンもいたが。顔は無視して自分に倒せそうな相手を探す。ソロは1つのポケモンの顔に眼を向けた。牛のような眼つきをし、黄色と茶色の二色…さいみんポケモンのスリープだ。下の部分に”Bランク”と印鑑の跡があり、犯罪内容も記載されていた。

「強盗か。…コイツならオレとアイツだけでも倒せそうだな。おいフロム！」

フロムを声を上げて呼ぶ。さっきまで依頼掲示板を見ていたフロムが歩いてこちらに向かって来た。

「なに？…って、もうお尋ね者やるの？」

「ああ。ランク高いのでもアイテムの探索と採取は飽きた。もっと腕が試せるモノをやりてえしな。」

拳をパキパキと鳴らしながら言うソロ。フロムもそろそろ物品捜索に飽きていたためか賛成した。

「そう。ソロがそう言うならやろうかな、お尋ね者の逮捕。相手とランクは？」
「これだ。」
スリープのポスターに指を指して示す。ランクはB…フロムはそれを見て不安になった。
「Bランクって結構手強いわよ？大丈夫なの？」
「ふん…負けるなんて考えるな。コイツはそんな強くはねえよ。」
「……そうだといいけど…」
不安になりながらもフロムはスリープ逮捕に参加することにした。
一方、ソロは左手の拳を見て強く握っていた。
（……血が騒ぐ。闘争心が駆りたってるのか？）
鼓動がバクバクと鳴る。早く…早く！と言うように。急ぎたくなる気持ちを抑えて何時もの十字通路へ向かうソロとフロム。

今回の依頼目的場所はトゲ山。鋭く尖った岩石が特徴の岩の山だ。
「さて、始めるか。」
「うん。」
トゲ山の入り口に入っていくソロとフロム。その2人を崖から見下ろす何者がいた。

「まんまとランク、顔に騙されやがって……お前ら探検隊はな、ここで朽ちるんだよ…この俺によってな！」

その正体はスリープの進化系で同じさいみんポケモンの『スリーパー』。ソロはこの時、このような形で悲劇と、奴と会うことになるとは想像もしていなかった。

第一話：序の口（後書き）

ソロ「おい、これは死ぬパターンじゃねえのか？」

さ、さあなんのことだろうね？

フロム「え、嘘でしょ？ねえ嘘でしょ？」

……あばよーとっつあーん！

ソロ&フロム「「逃げた！！」」

※次回予告はありませ（殴

第二話：飛んで火に入る夏の探検隊（前書き）

嫌な予感のする第二話目です。

ソロ「死ぬのはゴメンだ。」

…どうなんでしょう？

フロム「言葉からして嫌な予感しかしない…」

嫌な予感はするけど第二話。

第二話：飛んで火に入る夏の探検隊

トゲ山を進む道中何体かの野生ポケモンと遭遇した。ムックルやイトマル、イシツブテなどだ。

「はっけい。」

体当たりを繰り出したイシツブテにソロはカウンターの要領ではっけいを当てる。

「シャドーボール！」

フロムは距離が離れたところにいるイトマルにシャドーボールをぶつけて倒す。後ろからもう一体のイトマルが糸を吐くを行おうとするが…そこをソロがブレイズキックで攻撃し、技を中断させる。

「一掃完了。」

「ひとまず片付いたね。」

全て気絶で済ませ、周りを警戒しながら先に進む。途中の通路で道具をいくつか拾いながらもお尋ね者のスリープを探す。

「地形が荒れてるな。」

辺りを見ながらソロが言う。足場は凸凹しているのは当然のこと、所々尖った石や岩、削れた壁もある。

「そりゃそうよ。岩で出来た山の上にトゲまで付いてるもの。荒れてて当然だし、道だって複雑でもおかしくないわよ？」

「たくっ、道が長いな。」

トゲ山の道のりの長さに悪態を吐く。このダンジョンは長いだけでなく岩で出来ているだけあって道が複雑なのだ。他の高難易度ダンジョンに比べればまだ優しい方だが、出てくるポケモンに苦戦したり、複雑な地形の多変化によって方向感覚を失ったりする探検隊が出る。ネガシオンも突っ掛かることがしばしばだ。

「急いだっても良いことは無いわよ？落ち着いて行こうよ。」

苛立ちながら足を進めるソロにフロムがなだめるように言うがあまり効果は無かった。

「そうは言ったって…よく分からねえが血が騒ぐんだよ…」

「血が騒ぐ？」

「そうだ。それに誰かに急がされているような感覚もするんだ…」

ソロの鼓動が早く鳴っている。待ちきれないとでも言うように。それを少しでも落ち着かせようと説得の言葉を掛ける。話は聞いているがこの鼓動と騒ぎは抑え切れそうになさそうだ。

「ん？」

目の前にこのダンジョンには出現しない紫色の球体の体系をした”どくぶくろポケモン”のマルノームがいた。2人の姿を見るなりすぐに駆け寄ってきた。

「おーい！そこの2人方探検隊ですか！？」

息を切らせてきたマルノームにソロが目を合わせずに言う。

「ああ、そうだが？」
「ちょっとソロ…いくらイラついてるからって話をマトモにしないのはやめなさいよ。」
イラ立ち気味の彼にピシャリと言うフロム。
（なんかコイツ最初はビビッてた癖に言うようになったな…ま、話しやすいからいいけど…）
「それで、何か用なの？」
「実は…この先に知り合いがいるんですけど……見知らぬ人達に捕まって…！金を出せと脅されてるんです！しかもその中にお尋ね者のスリープが！」
「ええ！？スリープが！？」
お尋ね者の名を聞いて飛び跳ねる。丁度自分達の目的の相手ではないか。ソロはマルノームの言葉を聞いて疑問を抱く。
（ちょっと待て、『見知らぬ人達』と一緒だと？ポスターの情報と違うな。スリープは確か単独のはずだが…それとコイツ……）
「ソロ！助けに行こうよ！」
「待て。」
急ごうとするフロムを捕まえて自分のところに持ってくる。
「なにするのよ！急がないと」
フロムの言葉を手で遮ってマルノームを問いただす。

「おいマルノーム。お前スリープが全く知らねえやつと一緒って言ったよな？スリープは単独の強盗犯のはずだぞ？」
「あ、そういえば…」
フロムは今頃情報と違うことに気づいた。気づいた頃にはマルノームが説明しだしていたが。
「ええ、単独の強盗犯のはずなんですが…でも共犯者がいたんです！2人も！」
「へえ……まあいいか、行くぞフロム。さっさと救出と逮捕をするぞ。おい、案内しろ。」
横暴な態度で言うソロ。マルノームはビビリながら道案内をした。
「……」
道案内されるとき、フロムは思っていた。マルノームが背を向けている時にソロは相手を疑っている顔をこちらに見せてきたのだ。
（あのソロの疑いの顔…もしかしてこのマルノームは…）
疑いの念を持ったまま案内されるがままに走る。
奥地に着いたあたり、ようやく足を止める。そして奥に見える４つ

の姿が目に映った。

「いた！あいつらです！」

マルノームが指を指し、示した先には『ボロボロになったスリープ』とスリーパー、てまねきポケモンのサマヨール。フロムは共犯者が一人足りないと思っていた矢先、

「いやーわざわざお疲れ様」

マルノームが口を開く。しかし発言の最中…

「ああ、お疲れ様。だから『死ね！』」

ソロがマルノームになにかの種を口の中を殴りなぐりつつぶち込む。激痛で口を閉じたと同時に口の中で爆発が起き、力無く倒れた。種の正体は”ばくれつの種”、名の通り爆発を起こす種だ。

「共犯者なのは正解だったな。嫌な予感は合ってたって訳だ。」

「ソロ…どうして黙ってたの？」

「お前も何か怪しいと思ってただろうから黙ってた。」

フロムがソロに向かって言おうとするが、あのスリーパーによって遮られた。

「あ～あ～話はやめてもらおうか。いや～バッカだねえ～最近の探検隊は。こう易々と騙されるなんてなあ！！ちなみに、あのスリープはただのどっかの市民！俺が催眠術で操ってこっちを犯人に仕立てたのさ。スリープとの戦闘で力を消耗した探検隊の連中を俺達がフルボッコにしてたんだよ。それも記憶障害を起こすほどにな…ギ

ャハハ！！」

犯行の説明と嘲笑をしながらこちらに歩んでくるスリーパー。サマヨールも嘲笑を浴びせる表情をして歩む。

「探検隊狩りは楽しいねえ。お人好し様様！善人潰すって楽しい～！」

「……あなた達、とんでもない外道ね…」

怒りを露にして身構えるフロム。サマヨールは「お褒めの言葉どうもありがとう～。」と言い、フロムを煽る。その一方、ソロはというと、

「ご説明どうもありがとう。だが面白くねえし、目障りだから死ね。いや、捕まれ。」

どうとも思ってない模様。

そんなことに興味も面白味もない。オレがしたいことは、『テメエら』をぶっ倒すことだ。

拳を強く握り締めてスリーパー一行と対峙するネガシオン。一方のスリーパーは嘲笑の表情を崩さない。すでに勝ちは決まったとでもいう高飛車で汚く醜い表情だ。

第二話：飛んで火に入る夏の探検隊（後書き）

次回は探検隊狩りのスリーパー一行（マルノーム除く）と対決だ。

ソロ「立ちが悪いな。」

フロム「絶対に許せない…もうランクも何もあるもんか！徹底的に潰してやるわ！！」

そう旨く行くといいけどね…

次回予告

ズガガガガガガ！！

ソロ「ガッ！……あ……なん……で…だ？『シャドークロー』……発…動した…だけ…な……の……に……」

ドサ…

（この……ローブ…の…せ…ぃ…）

？？？【あーあ、やっちゃった…】

第三話：悪魔の鍵（シャドークロー）

第三話：悪魔の鍵（シャドークロー）（前書き）

はい、記念すべき主人公〇〇目です。

ソロ「テメエ！」

それにこうしないと先に進まんし。

フロム「うう…」

ではどうぞ。

第三話：悪魔の鍵（シャドークロー）

「サイコキネシス！」

スリーパーがサイコキネシスを放ってきた。ソロは視界に入らないように素早く移動してサイコキネシスを避け、フロムはソロとは別の場所からスリーパーにシャドーボールを放つ。シャドーボールを見てすぐに回避行動を取ろうとしたスリーパーに後ろから拳大の石が頭に当たってその場にうずくまった。頭が一時的に麻痺したのだ。

「クッソ、誰だ！」

「そら、まだあるぞ。」

後ろを見ればソロの足に拳大の石が複数乗せられていた。地面を見るといくつかの箇所が抉り取られている。足に乗せている石を放り上げて一個ずつ蹴り飛ばしていく。遠くで呪いを行おうとしていたサマヨールにもだ。スリーパーは二度もくらうかと念力でこちらに飛んできた石を跳ね返す。サマヨールは石に気づくのが遅くて頭に一撃当たった。

「イッテェ…ガキじみたことしやがって…」

「余所見してる場合？シャドーボール！」

「ぶはあ！？」

悪口を言ってる間にフロムの放ったシャドーボールが直撃し、一度倒れ込んだ。再び起き上がった時、怒りを露にして眼を光らせ、フロムに襲い掛かって来た。

「こんのガキー！怪しい光！」

「そんなの当たらない、うっ…！？」

何時の間にか怪しい光が当たって混乱状態になっていた。視界がずれたり曲がったりしている。不意に後ろから蹴られ、転がり飛ばされた。

「う…なんで？」

痛みに耐えながらも後ろにいた位置を見る。そこには腕を組んで下品な笑いをしているサマヨールがいた。

「ガハハハ！なんだ？これぐらいも予想できなかったのか？周りよく見とけよ！」

「……事前に待機させていた怪しい光を後ろから当てたのね…」

フロムがサマヨールにシャドーボールを放つ時、目で確認した時は完全に怪しい光は前にはなかった。足元や左右、上にもなかった。ならば他にあるのは目で確認できない真後ろだ。サマヨールは巧みにも怪しい光を事前に待機させていたのだ。普通こういった工夫をするのは非常に大変だが、彼にとっては苦ではないようだ。

「さあどう料理してやろうかな～？年頃の女の子ボコるのは久しぶりだからな～さぞいい声で泣くんだろうな～。楽しませてくれよ～？」

「くっ…！」

（悔しい…！こんな奴にやられるなんて…！）

「…！またか！」

遠くにフロムがサマヨールに袋叩きにされそうになるのを見てすぐに石を数個飛ばし、スリーパーを無視して向かう。

「余所見するなバーカ！」

当然スリーパーは背を向けた相手に対し攻撃しない訳がない。サイコキネシスで捕らえようとした時、ソロがこれまでにはない鬼を形相をして振り返った。

『ああん？なんつったテメエ！！』

「…え？」

（今…なんかコイツ言葉が変わった気が…）

突然の豹変様と異常なまでの恐怖に驚き、惨めに一歩後ろに下がってしまった。今のソロの眼が完全にヤバイのだ。また、全身を切り刻まれるような感覚にも襲われた。

「（今、一瞬意識が…）ってコイツを相手にしてる場合じゃねえな。たくっ、世話の焼けるパートナーだな！」

「だ！待ちやがれ！って、ぎゃあ！？」

追いかけようとした時地面に足を踏んだ時、突然穴が空き、その中に落ちていった。しかも5メートル程あり、大分深い。穴の中でスリーパーは半ギレ状態になって叫びを上げた。

「このクソガキがあああ！！調子に乗ってんじゃねえぞ！！」

『黙れや小僧！！内臓抉り取るぞ！！』

「ひい！？」

またあの豹変時の怒声が聞こえ、またも惨めに小さい悲鳴を上げてしまった。この声が響く度に全身を切り刻まれる感覚に襲われるのだ。

「ち、畜生…何俺はあんなガキにビビッてんだ？たがが怒声じゃねえか…」

記憶に残っている恐怖で体をブルブル震わせながらも壁に手を掛けて上り始めた。

「さあ～どこから痛ぶるかな～。」

「ふん！」

サマヨールの横から石が数個飛んできて頭、横腹に当たり、さらにソロが飛び蹴りを入れて吹き飛ばす。混乱中のフロムに状態異常から正常に回復させる癒しの種を食べさせ混乱から回復させた。

「うう…ありがとう…」

「一々血が上って突っ込に行くな。一度の隙が勝敗を左右することもあるんだからな。」

「このリオルが…テメエだけ無駄に強いじゃねえか。」

サマヨールが起き上がってソロを睨みつける。フロムよりソロに狙いを定めたのだ。ネガシオンのチームリーダー立場であるソロはフロムと違い、確かに実力では圧倒的な差がある。戦闘スタイルもまた違い、地形を利用した戦い、倒れた相手にさらに追い討ちを掛け、技をあまり使用せずにただの肉弾戦であったりと。遠距離ではシャドーボールや飛び道具を放ち、近距離では電光石火によるヒット＆アウェイのスタイルを主とするフロムとは全く違う。

「このガキどもが、無駄に強い野郎だ。」

穴から這い上がってきたスリーパーも来て囲まれたソロとフロム。どちらも眼を鋭くさせて相手の出方を探っている。スリーパーはサイコキネシスの準備をしていて何時でも発動できるが、ソロにまた何かで妨害される可能性があるためすぐに発動はしないでいた。

「スリーパー！何ビビッてるんだよ！足震えてるぞ！？」

「へ？お、おいおい。まだ震えてんのか」

「やれ！」

「シャドーボール！」

サマヨールに指摘を受けて隙をみせたスリーパーにソロがフロムにシャドーボールを放たさせる。当然隙を見せたのだから避ける暇もなく、効果抜群のゴーストタイプの技を受けて大きく仰け反る。サマヨールがその間に呪いをしようとしたが、ソロがバッグから鉄の針を４本投げてサマヨールの胴体と足を容赦なく刺す。

「このガキ、容赦ねえな！」

「黙ってろ！」

鉄の針が刺さっている足にブレイズキックを容赦なく浴びせ、サマヨールが悲鳴を上げる。このあまりの容赦無さにフロムが怯えた。木に刺さった釘を打ち込むようなものなのだ。釘が内部に刺されば刺さるほど木は外傷的ダメージを受ける。ソロが今、行ったこれはその木と釘と同じ原理だ。負傷箇所にある物体をさらに負傷箇所にぶつけることによって外傷と内部ダメージを広げる。こういうことなのだ。これがどれほど容赦ないのか分かったであろう。

「サイコキネシス！」
「させない！」
ソロにサイコキネシスを当てようとしたが、怯えから立ち直ったフロムに電光石火を受け、技が中断された。さらに至近距離からシャドーボールを放ち、黒煙を舞い上げた。その黒煙の中からフロムが出てきてスリーパーからすぐ離れる。しかし、それが仇になった。
「サイコキネシス！」
「…！」
後ろにはスリーパーが大きく仰け反った状態のままサイコキネシスを発動させていた。フロムはソロのいる方向へと飛ばされ、攻撃をしていた彼へとぶつけられた。ぶつけられた衝撃で倒れたが立ち上がり、傷ついたフロムをその場に待機させた。
「深追いしすぎだ…」
「…ごめん……」
一方のサマヨールはソロからの猛攻ですでに気絶して倒れていた。フロムが待機したのを確認し、一人でスリーパーと対峙した。
「リオルのガキ1人だけか。パートナーは使いものにならないってか？」
「そうは言ってないぞ。ただ…」
「ただ？」
「テメエはオレの手で潰したいだけだ。」
拳をバキバキと鳴らしてスリーパーに向かった。

「金縛り！」

手から紫色の光を発し、ぶつけようとするが簡単に避けられてしまった。さらに念力を発動させて捕まえようとする。が、ソロは足場に思いっきり踵落としをして岩の壁を出現させる。これは能力とかではなく、ただの物理的攻撃を加えて作り出しただけで力ある者なら誰でもできることだ。念力の力はソロに届かず岩の壁に妨害され、攻撃の成功は失敗した。

「クソ！邪魔だこの岩！」

「これで黙ってろ！」

念力で持ち上がった岩の壁を突き破ってはっけいを当てた。はっけいは”かくとうタイプ”の技だ。対してスリーパーは”エスパータイプ”。相性関係でダメージは薄い。それでも相性の悪いはっけいを当てたのには訳があった。

「な、体が！」

体が痺れて上手く動けなくなった。そう、これこそが狙いだ。はっけいは相手の体に強い衝撃を直接与える技。その衝撃は各神経にも衝撃を与える。当てるのが上手くいけば相手を麻痺状態にすることもできる。ソロの戦いぶりを見ていたフロムが自分の力の無さに俯いた。

「あたしに…ソロみたく、もっと力があれば引っ張ることなんて…」

「クソが！麻痺状態になるなんてよ！」

「これで終わりにしてやるよ。」

右手を強く握り、麻痺状態のスリーパーに迫った。その時、異変が起きた。

「ん？なんだ…右手が…」

「お、おいおい。まさかそれでトドメ刺す気か？おいおいやめろ！」

右手から黒と紫のオーラが急に出てきて5本の爪に変化した。ゴーストタイプの技、シャドークローだ。しかし、普通5本の爪にはならない。精々3本だ。対してソロのシャドークローは5本。まるで人間の手だ。フロムがソロの手を見て不思議に思いながらも指摘した。

「それはゴーストタイプの技シャドークローよ！スリーパーはエスパータイプだからダメージを大きく与えられるわ！」

「そうか。ならこれで…」

「まてまてまてまて！待った！分かったからそれはやめ……ん？」

「ゴホッ！ゴホッ！」

ソロが急に咳き込んで腹を押さえて蹲った。スリーパーはその間にサイコキネシスを発動して近くの岩にぶつけて距離を取る。飛ばされたソロはまだ咳き込んでいた。そして新たな異変が起き始めた。

「な、何だよありゃあ…？」

「ソロ！？一体どうしたの！？」

「あああああああああああ！！」

赤と黒のローブが巨大な籠なり、ソロを閉じ込めた。さらに体全体から黄色い稲妻と赤く揺らめく炎、白い火花と黒いオーラが出てきた。叫びを上げ続け、周りに強烈な風圧が発せられた。

「あああああああああああああああ！！」
「ち、畜生…何が起こってるってんだよ！俺はもう知らねえぞ！」
スリーパーはその場から去ろうとするが、空間に黒い障壁が立ち塞がっていて脱出できなかった。
「何だよこれ！おい！出せ！」
「ソロ！しっかりして！何が起こってるのよ！！」
「あああああああああああああああ！！」
ソロは籠の中で遠のく意識の最中、今まで起きたことを振り返っていた。
（何がどうしてこうなった…？シャドークローが勝手に発動されて…それで咳き込み始めて。それからローブが籠になって…訳が分からねえ…クソ、こんなことならこのローブ置いてくるんだったぜ…）
「あ……さ……」
籠が霧散してソロに纏わりローブになった。籠から開放されたソロはその場に倒れ込み、動かなくなった。フロムはすぐさま駆け込み、ソロを揺さ振る。
「ソロ！ねえ、しっかりして！」
「この青ガキめぇ…散々俺様をボコりやがってよ～…もう死ねや。」
気絶から覚めたサマヨールが動かなくなったソロとフロムに近づいていった。スリーパーもサマヨールに便乗して近づいてくる。
「俺をこんなにも混乱に陥れやがってよぉぉ…覚悟しろや！」

「…！ソロ、起きて…起きて！やられちゃうよ！ねえ起きて！」
「「まずはおめえからだ。」」
必死に揺さ振るが起きず、虚しく終わった。後ろからスリーパーがフロムを念力で捕まえ、サマヨールが殴り始めた。
「ガハハハハ！あースッキリするー！この瞬間が楽しみなんだよなー！」
「うっ！ぐっ！」
「オラオラ泣けよ！泣き叫べよ！」
「きゃああ！」
「泣けよ！痛みの悲鳴じゃなくて泣けよ！」
狂ったようなお尋ね者の2人組みはフロムを痛めつけ続ける。遠くで倒れているスリープが殴る音と蹴る音でようやく意識が覚めた。
「…な、なんだよこの音…え…！」
そこにはフロムが痛め続けられる姿とスリーパーとサマヨールの姿があった。血相を変えてその場で策がないか慌て始める。と、そこに拳大の石が転がっているのを発見した。その石をお尋ね者の2人に向けて投げた。石はスリーパーに当たり、スリープに振り向く。スリープは脅えながらも威勢よく叫んだ。
「お、おい！このアホお尋ね者！来るんなら来いよ！」
「ほう～いい度胸じゃねえの。おい、このガキ頼むわ。」
「あいよ。さあ～まだまだ続くぞ～。おら！」
「カハッ…！ダメ！逃げて！」
スリープにスリーパーがゆっくり近づいていき、両手を翳した。威

力を込めたサイコキネシスをぶつけるつもりだ。ニタリと笑い、スリープに言った。

「よおし、行ってやるよ。死にたくなるまで痛めつけてやるよ！」

「に、逃げるもんか…逃げるもんかよ！」

「サイコ…キネシス！」

「ぐわあああああ！」

「あ～大分殴って快感だった…！んじゃそろそろ、記憶を失うんじゃなくて死ね。」

「……ごめん…ソロ…」

瀕死となったフロムにサマヨールが呪いをかけようとした。遠のく意識の中、ソロに謝り続けて目を閉じようとした。しかし、それはこれから起こることによって打ち破られた。

『この集団で集まるだけのクソ弱者が…いきがってんじゃねえよ！！』

「はあ？」

「ソ、ソロ？ソロな……の？」

サマヨールの横に立っている「ソロ」であろう人物はリオルの姿はしていた。が、何か違うものがある。ソロと同じ立ち位置には赤と黒の法衣を着て大鉈を持った『人間の青年』がテレビにある砂嵐のように半透明になり、立っていた。声もあの怒声に変化していた。

『黙って見てりゃあ調子に乗りやがってよぉ…この小僧どもがあ！！』

「ひい！？」

次の瞬間、大鉈の腹による殴りつけと蹴りで脇腹と足を思いっきり攻撃され、勢いよく回転した。その頃、ソロの意識の中では…

【あーあ、やっちゃった…これ君の責任だからね？】

【否定はしねえ……】

黄色い炎のように揺らめく物体と同じく炎のように揺らめく黒い物体が真っ白な空間で話していた。黒い物体は黄色い物体に咎めるように責めて言っていた。

第三話：悪魔の鍵（シャドークロー）（後書き）

ソロ「おいいいいい！」

こういうことです。（キリ

フロム「作者扱い酷い…」

吸いません。

ソロ？『字が違うぞゴラアアアア！！』

ぎゃあああああああああ！！

第四話：バッドガイ―悲のない悪漢―（前書き）

悪漢ってのはどこまでも面倒なもんだ。関わりたくなきゃ逃げるんだな。

語り：大鉈を持った青年

第四話：バッドガイ―悲のない悪漢―

『どいつもこいつも気に入らねえな…』
「おご…ゲフ…え？ちょ、ま…待って…」

青年は大鉈を肩に担いで倒れ込んでいるサマヨールの首を掴んで持ち上げた。ギョロリと大きく開いた眼差しで睨みつけ、首を掴んだまま腹を勢いよく蹴る。蹴られたサマヨールは体をくの字に曲げて咳き込んだ。同時に吐き気にも襲われ、目の前が少しずつ霞んできた。そんな状態になっていても首を掴んだまま大鉈の腹で殴る、大鉈を持った右手の拳で殴りつけるなどをして青年の執拗で横暴な攻撃は続けられた。

『対した力もねえクセに吼えんなじゃねえよ！このゴキブリ！！』

最後に空中に放り投げ、黒いオーラを纏った大鉈を握った右手で殴れる高さまで落ちてきたところで腹に右ストレートが炸裂した。
『豚のような悲鳴を上げろ！！』
「ギィヤアアアアア！！」

瞬間、ドス黒い衝撃波が拳から発せられ、サマヨールを飲み込んだ。想像を絶する痛みが腹から全身に行き渡たり、岩まで吹き飛ばされて激突した。さらに殴られた時に体から複数の大、小の青白い球体が出現し、「ソロ」の体に入っていった。目を見開いたままの青年はサマヨールが意識を失ってるのを確認して今度はスリーパーのところへ向かおうとしたが、後ろから声を掛けられた。

「まっ…て…！もう…やめて…十分…よ…」

声の主はフロムであった。青年にもうやめてほしいと懇願するが青年は悲のない残酷な言葉を投げ掛けた。

『テメエがよくても、俺はよくねえ。寝てろ…！』

「うっ…！……」

青年に容赦のない蹴りを腹に浴びせられ、痛みに耐え切れず気絶した。気絶を確認した後、青年はスリーパーのいる方向へ歩いていった。青年が後ろから近づいているのに気づかず、スリーパーは今まで犯人に仕立てていたスリープを踏みつけ、殴りつけ、金縛りを掛けて一方的に弄っていた。

「ゲホ…！ゲホ…！」

「さあ…そろそろ死ねや。」

首を両手で鷲掴みにし、苦しみを多く与えようと窒息させようとする。喉を押さえられて上手く呼吸が出来ず、振り払おうと暴れようとするもサイコキネシスによって動けなかった。スリーパーがこうして弄るのに夢中になってる最中、誰かから後ろから首筋を掴まれた。一方で絞首から開放されたスリープは意識が保てなくなり、その場で気絶した。

「ぐえぇ…！だ、誰だ！…てっ……」

『よう…クソ小僧……』

「ひ、ひい！？」

後ろから響いた声はスリーパーが聞いたことのあるあの怒声の主、大鉈を持った青年だ。やはり大きく見開かれた眼はスリーパーに向けて今にも斬りかかろうとしている。だがその前に掴んだままヤクザ蹴りをかまし、離したと同時に大鉈の腹で両足を瞬時に殴る。そ

の間、約０．１秒。

「ぎゃあああああああああ！！」

この世の者とは思えない叫びを発し、骨が折れたのか、動かせない足で地面をのた打ち回った。さらに青年は容赦なく２度も大鉈の腹で胴を殴りつけ、頭をグリグリと踏みつける。その間もスリーパーは激痛による叫びを上げ続けたが、青年は一行に止めようとしない。

「ひ…やめ…！もう許して」

『ああ？聞こえねえな…ああ、そうかそうか死にてえのか。じゃ死ね！！』

「待てまてマテ待てまてマテ！」

言葉を聞かず青年は大鉈の刃を向けて振り下ろした。刃がスリーパーの首を通り、胴体から切り離され…なかった。大鉈は何時の間にか消えていたのだ。スリーパーは殺されるという恐怖のあまり、首を切られたと思い、泡を口から吹いて気絶していた。一方でソロの立ち位置にいる青年は砂嵐が少しずつ消えていき、やがて消滅した。それと同時にソロが倒れ込み、静寂が訪れた。辺りは風の通り過ぎる音だけしか聞こえなくなった。

「なーはっはっはっは！お宝ちゃんが近いぞ～！」

同時刻、ファル一行はソロ達のいるトゲ山を訪れていた。目的は勿論、お宝である。常時ハイテンションなファルにザグとキリマル肩

をガックリと下げていた。

「コイツの底なしのテンションはどこから来てやがるんだ…」

「着いていけん…」

「ハイ！そこ気を落とさない！」

ガンガン奥へ進んでいくファル一行。ついには奥地、乱戦跡地に着いた。辺りの岩は所々破壊されており、地面なども陥没した跡が残っている。ファルは周りの光景を見て「ワーオ…」と声を上げた。一方、ザグは何か感じ取ったらしく、岩陰の方へ向かった。それを見たキリマルとファルは岩陰へ向かって行った。その岩陰の奥にはソロ達が全員気を失って倒れていた。

「ファル、あいつってソロじゃないか？」

ザグが倒れているソロを指差してファルに聞いた。ファルは常時ハイテンションの時とは思えない冷静な対処をした。

「ああ、ありゃソロだな。…お尋ね者のスリープもいるし、全員気を失ってるし。何が遭ったんだ？」

とにかく今はソロ達を救出しようとまずソロを持ち上げた。その時、空から雷が降り注いだ。慌てることもなく、ファルは雷をソロを背負ったまま低姿勢で避けた。雷の音を聞いたザグとキリマルはその雷のところに駆け寄った。雷の降り注いだ方向にはギザギザした羽毛を持ち、体の大部分が黄色で染まっている鳥が体中から稲妻を走らせていた。ザグが目を見開かせてその鳥を見た。

「アイツは…サンダーか？」

「その通り…我はサンダーである。」

ザグの答えにサンダーと呼称された鳥は大きく頷いた。サンダーの大きな態度にキリマルが内心、腹を立ててサンダーに問い詰めた。

「何故ファルを狙った？」

「ファルとはそこのヒコザルのことであるか？我が狙ったのはそこのリオルだ。」

「ソロか…なら何故そちらを狙った？」

「その少年は敵だからだ。そして…元人間の青年とでも言っておこうか…」

サンダーの答えにファルを除く2人がこの事実に驚愕した。

「なーるほど、敵ねえ。で、それが？コイツはまだ何の危害も加えてないと思うんだけど、それ以前に何でそんなこと知っているんだ？」

「答える義務などない。」

一方のファルは何故そのことを知っているのか聞こうとしたが、サンダーに答えることを否定された。

「さて、我には時間が無い。ヒコザルよ、そのリオルを置いていけ。そうすれば貴様を殺したりは」

サンダーの要求にファルは相手を馬鹿にする声全開で断った。

「やーだね。まだ何も起こってねえのにそれはねえよ。それにコイツとはもう友達なんだ。」

「…刃向かう気か？」

「そっちこそ俺に刃向かう？ザグ、キリマル。全員をトレジャータ

ウンに連れて先に行っててくれ。」

ファルの言葉にザグとキリマルはファルを除く全員を集め寄せ、青い玉、不思議玉と呼ばれる物の一つ、”穴抜けの玉”を使った。すると空から青い光が降り注ぎ、ザグ達を包み込んでいった。光が消えた頃にはすでに誰もいなかった。サンダーは舌打ちをしえファルを睨みつけた。一方のファルはニヤニヤして笑っていた。勝利を勝ち取っていると言わんばかりに。

「ハハ、強いよ？俺様は。完璧に強くなっちゃってるから。」

「……その傲慢をまず黙らせるとしよう…！」

辺りの岩をドロドロの赤熱にさせるまでの強烈な雷をファルに向けて放った。次の瞬間、トゲ山の頂上、奥地は強大な雷に埋もれた。

「ん……あれ…？オレは、確か…」

ソロが目を覚ました時、目に映ったものは自分達の個室であった。隣りではフロムが大怪我を負って眠っている。

「……何がどうなっているんだ？オレは、あそこにいたはず……」

訳が分からず、ソロはその場で下を向いて黙り込んだ。この時、ソロはあることに気づかなかった。赤と黒のローブが消えていることに…

「ガ…アガ……き、貴様…その力はなんだ？何故我が雷撃が追い払われる！？」
「だーから言ったじゃん。「俺様は強いよ？」って。言っとくけどトリックなんて何も使ってないぜ。ただの実力で払っただけだ。」

戦闘は何時の間にか終わっており、サンダーは焼け焦げて地面に落ちていた。そのサンダーをファルは岩の段差から見下ろしていた。体に傷跡は全くなく、息が荒れていない。サンダーは強烈なダメージを受けた重い体を持ち上げ、ファルを睨んだ。

「ちぃ…ここは退くとしよう…」
「あ、待ちやがれ！」

サンダーは黄色い雷を発生させて飛び去っていった。取り逃がしたファルは肩を竦めてトゲ山の奥地から歩き去っていった。

「次会った時には洗いざらい吐いて貰わないとな。」

ファルはこの時、何かが後になって起こると確信し、楽しそうな笑みをしてした。

第四話：バッドガイ―悲のない悪漢―（後書き）

これにてお尋ね者編は一件落着。

ソロ「……色々納得いかねえ。」
フロム「後半出番がなかった…」

そこらへんは我慢してくれ…ところでこの3章目なんだけど、当然まだ続きます。ここから激動への道が開いたのだ！次回をお楽しみに！

外伝１：ある者の記憶（前書き）

意味深な息抜き話です。

外伝1：ある者の記憶

自分達のいる崖から朝日を見た。とても綺麗だ。自分達はあの暗くて辛い世界を駆け続けて、自分も、???も、ヘトヘトになってた。それでも自分達は諦めずに前へ進み続けて、ここまで来れたんだ。でも、途中で心が折れたんだよね、自分は。でも???が立ち上がらせてくれた。そのおかげで諦めずにいられた。

最初は???が心を折らしてたのに、ちょっと立ち直ったら自分を立ち上がらせてくれた。自分が言葉をしたからかな？……たぶん違う。ちょっと前に???が「お前のその諦めない意志が皆を動かす。」って言ってたけど、本当にそうなのかな？

皆も奥底に諦めたくないって意志があると思うんだ。誰かが動けば皆も動く。それだけだよ。自分は正直、考えてもいない。ただ止まりたくなかっただけ。あの時、止まっちゃったけど。

そうなっちゃった時、自分にとって大事な仲間が助けてくれる。???が「君自身が諦めてどうするのさ！」って言ってくれた。うん、そうだよね。元はと言えば自分が言い出したんだ。それなのに言ったことがやれていなかった。???はやってくれてたのに、自分は諦めちゃったんだ。そんな時、???がさっきの言葉を言ってくれた。

もし、自分はあの時???がいなかったら諦めてた。1人だったら何もできなかった。???がいてくれたから諦めずにいられた。自分に言えることはそれだけ。

「…！……また夢か。」

夢から覚めたソロは窓の外から外の風景を覗いた。今日も朝日の光が差し込んできている。夢の言葉を意味深に思って思考を巡らせるが、たどり着く答えは見つからなかった。頭を掻きながら横でまだ寝ているフロムを見る。

「おい、起きろ。」

起きろーーーーーーーー！！朝だぞーーーーーーーーーーーーーー！！

あ、頭がグラグラするぅ……

……（頭が痛い……）

オレの意識の中、最初のオレ達と似たような反応をした声が響いた気がした。

外伝１：ある者の記憶（後書き）

この外伝の関係性は蒼（碧）の波導の悪魔の続編（仮）で分かると思います。でもポケダンの時、闇、空の探検隊やってる方には多少オリジナリティがありますが、お分かりだと思います。どの場面かがですね。

第五話：動く影（前書き）

今回から物語の冒頭に語り手を居させます。

ウゼェ野郎が…ワン公さっさとおっ死ねや！！

語り：黒いポケモン

第五話：動く影

「フロラン、あの黒いローブを知らないか？」
「黒いローブ？いや、知らないな。お前があの3人に運び込まれた時にはすでに無かったぞ。」

（無い、か…冗談じゃねえぞ。あんなのほっといたら大変なことになる…）

ソロは無くなったローブがどこにいったか聞いていた。フロランは何食わぬ顔で答え、そのまま去っていった。

「ファルのやつがオレをここまで運んできたのか……ちっ、何でオレが助けられるような立場に…！」

「おーい！ギルドの人いるかー！？いるなら開けてくれー！」

薄っすらとだがギルドに着いた時に意識があった。あの時、オレはあのローブに何かをされて…意識が保てなくなった。そのせいであの様だ。

「お、おい！フロム！それにソロ！お前達この2人に何かしたのか！？」
「する訳ねえじゃん！トゲ山でこいつらと全員で倒れ込んでたんだよ！」

ファルのやつに助けられ、フロランのやつと話した後に介護をされたような気がした。目が開けられないせいで何をしていたのか全然分からなかったが…

とにかくオレはあいつに借りができちまった。そのせいで朝から不調気味だ。

「クソ…胸糞悪い……」

内心感謝はしていたが、ソロは受け止めることができなかった。スッキリしない朝の中、ローブを探すためにトレジャータウンの住人達に聞くが、収穫は全くなかった。

「誰も知らない…か。オレとフロムを運んだ当事者がいれば何か」

「ようソロ！もう体調大丈夫かー？まごふっ！」

後ろから突然変な踊りをして現れた当事者＝ファルをぶっきらぼうに殴った。殴られたファルはコマのように回転しながら地面に倒れ込んだ。自力で起き上がる暇を与えず、首を絞めながら掴み上げた。

「ちょっ！くび！首絞まってる！あら〜〜！」

ソロは青筋を立てながら再びぶっきらぼうに投げた。地面をスライドしたファルはフラフラ立ち上がりながらも無傷でいた。地面を思いっきり踏み鳴らしながらファルに近づいたソロ。よほどご立腹のようだ。

「探してる最中に後ろから変な踊りして現れやがって…まあいい。それより話せ。オレのローブをどうした？」

「ローブ？あ、あの不気味な配色の物か。」
「知ってるんだな？」

ファルが知っているような素振りをしたため、聞き出そうと顔と右手を近づけて詰め寄る。「まあ落ち着けってw」と言いながら両手でソロの胴をゆっくり押して引き離した。

「あのローブはな、あー信じられんだろうけどさ」
「いいから早く言え。」
「あー…お前の中に入ってった。」
「はぁ？」

一瞬、何を言っているのか理解できなかった。だが、ファルは確かに言った。

「どこだ！どこに入っていった！」

挙動不審者のように心を荒ぶらせながら肩を掴み、もの凄い速さで揺さ振って聞こうとする。やられている本人は首をやや痛めながらも苦し紛れで答えた。

「イダダダ！ギブギブ！眼、眼の中！」
「……眼の中？」

一端落ち着いて掴んでいた手を離し、どうなったかを聞こうとする。

「オーラみたくなった後、渦になって両目に入ってったんだよ。お前ってなんか特殊な力でも持ってるんじゃねえか？そのリミッター制御の役割でもしてんじゃねえか？」
「逆だ…あれが籠のようになってオレを閉じ込めた。その最中に何

かを無理矢理起こされたような感覚があった。それからはぶっ倒れて覚えてない。気づいた時にはお前にギルドまで運ばれ、お尋ね者とフロム、スリープが瀕死の状態になってやがった…」

会話の最中にソロは地震が何もできなかったことを呪い、拳を握り締めた。そんな様子をファルはやや目を細めて見た。まるでこの光景をすでに見た事のあるような目だ。

「あー…ところでさ、お前がさっき言ったフロムって名前。それってあの女の子のイーブイのことか？」

「あ？何だ突然？…そうだがそれで？」

重々しい会話を切り替えようとするかのように先程とは全く関係ない話題を持ち出したファル。いや、実際に切り替えようとしているのだろう。ソロの返答にファルは興奮をするように声を上げた。

「おーやっぱそうか！あの子結構かわいいじゃん。まあ今は傷だらけで体中汚れちゃってるけどさ。傷も治って綺麗になりゃもっとかわいいんじゃねえか？ソロ、お前はいい彼女を持ったな。」

やけ熱く語り、ノリノリ気味な動きで肩を叩き、「頑張れよッ！」と真面目な目で言った。

「はあ？彼女？」

そんな熱弁に今のソロが返す言葉はこれしかなかった。それはそうであろう。まだ関係はそこまで深くはないのだから。ところでだが、今までの重い会話はファルにはぐらかされた。

「さーてと…そろそろあいつらが帰って来てる頃だろうし、俺も帰

るとするか！んじゃな！」

背伸びをした後言うことだけを言ってそのまま走り去っていった。その場に取り残されたソロは自身の右手の拳を見つめ、目を細めてギルドに帰っていった。

「……」

「……」

トレジャータウンの住民しかいなくなったこの場に、まだ部外者の人影が建物の物陰にいた。その正体は両腕両足が赤と灰で染まった2匹のストライクだ。

「あいつだ。」

「あいつだ。」

「始末するか？」

「始末する。」

「あいつは今も？」

「ただの人間だ。」

『クロノスを始末するぞ。』

2匹は最後に声を揃えて言った後、物陰の奥へ消えていった。また、彼らとは別に上空からは白い髪のようなものが生え、黒い衣を纏った謎のポケモンがいた。青く光るその瞳は帰る途中のソロを真っ直ぐ捕らえていた。まるで見る相手を目障りと思っているかのように。

「野郎しつけえな……引っ付き虫かよあのキャンキャンうるせえワン公はよォ…テメエら！！今の俺様が下手に手を出したらクロノスの野郎にぶっ殺されるからぁ、しくじんじゃねえぞ！！」

『了解。』

地上のガラガラ道場付近にいる2人のストライクが、謎のポケモンの言葉に再び声を揃えて了解と言った。

「ただいまー…」

「おそーい！もう昼食が出てるわー！」

ギルドの食堂に到着した時、早速フロランとニロゲムに怒られた。全員の目の前には食糧が置いてある。準備万端の証拠だ。そしてソロの座る席の付近にはまだ怪我を負っているが、フロムの姿があった。

「ソロー早くしてよー！」

彼女は怪我を負ってまだ新しい割りに結構元気であった。回復が早いのか飯を食べたいがための空元気なのか、ともかく彼女の様子にげんなりし、目を逸らして呟いた。

「……心配したオレが馬鹿だった…」

内心で心配していたようだ。以外にもソロは心配性のようだ。尤も、元から心配性ということは断言できはしないが。

「ん？」

視線を逸らした時、何か異変を感じた。ギルドの一員の配置は全て

同じ。物の並び方も普通。だが何か足りないのだ。そう、確か食事の時に何時もセカイイチにがっついている彼。

「カミーユがいなくないか？」

「あぁ、親方様なら今出かけてるとこでゲス。」

近くにいた長く大きい前歯が特徴的で丸い体を持つポケモンがソロに言った。まるねずみポケモンのビッパである。

「出かけた？どこに行ったんだブラム？」

ソロに呼ばれたビッパのブラムはその場でしばらく考えたが、答えは導きだせなかった。

「え～とでゲスね…」

「いや、知らないならもういい…」

どこに行ったのか知らないのは明白になり、これ以上聞いても無駄なため自分の席に行った。フロムの隣りに座ってようやくカミーユ除く全員が揃った。ギルドの全員がやっと食べれると思い、食糧に今にも手をつこうとするが、ここで皆の嫌いなお知らせ話が出てきた。

「いただきまー…」

「ちょーっとまったー！！」

そのお知らせ話をするのは無論、フロランである。折角の食事が中止され、シュプレッヒコールが一斉に浴びせられるものの、知らせをしない訳にはいかない。腹を空かせた者が発する怒りのシュプレッヒコールを押し切り、知らせる事を話し始める。

「え～実は遠くのダンジョンで新種の半悪魔が発見されたようだ。」
「し、新種！？」「一体どんな奴なんだ！？」
「静粛に！！…特徴だが、外見は従来のものと変わらない。ただ、我々普通のポケモンのように高度な思考を持ち合わせているようだ。何も考えずに真っ直ぐ突っ込んでくるのではなく、相手をよく見て動くようになっている。戦術を立てるようになったのだ。加えて今までの全能力が上昇している状態だ。お前達、遭遇しないよう…くれぐれも気をつけてくれ。」

ギルドの一員にとって悪い知らせであった。従来の半悪魔なら大半の探検隊は倒せる。だが、相手が今までと動きが違うとなると倒すことが一体だけでも困難になってくる。不安と不穏な空気がたちこめる中、フロランは気を取り直そうと食事の合図を出そうとした。

「ではっ！待たせたな。いただきまーす！」
『いただきまー…』

全員が言い終わるより前に、異変は起きた。

「うおっと！な、何だ？」
「ソロ、地面…揺れてない？」

バランスを崩しそうになったソロにフロムが足元を見ながら言った。揺れている感覚はある。だがテーブルは…揺れていない。食糧が置かれている食器も揺れていない。つまり錯覚のようなことが起きているのだ。この錯覚のような事が起きている最中に、食堂の入り口からあの2匹のストライクが現れた。

「な、何だお前達は！？いや、それよりどこから入ってきた！？」

ギルドの門は何時も柵があり、出入りができないようになっている。来客を招き入れる時、ギルドの探検隊が出る時に開けるものである。だが、彼らはどうか？柵を無理矢理こじ開けたのか？しかしそれの場合は大きな音が出る。なら切り裂いたのか？恐らくそれでもない。柵は頑丈にできている。それこそ技にもびくともしないほどだ。どうやって侵入したのか、今となっては考える暇もない。

『どけ。』
「うわ！」

2匹のストライクはフロランを弾き飛ばし、腕にある刃を交差させて鳴らして奥にいるある人物へにじり寄った。

「見つけたぞ。」
「見つけたぞ。」

そのある人物とはソロであった。

「始末するか？」
「始末する。」
「シャドーボール！」
「ハイパーボイス！」
「ハッパカッター！」
「ブレイズキック！」

仲間の危機を感じ取ったギルドの一員全員がストライクに向け、一斉に技を繰り出した。爆煙が舞う中、追い打ちをしようとソロが爆煙の中心にブレイズキックをした。途端に衝撃波が発せられ、食堂のあちこちが散り散りになり、物が散乱した。

「こいつ…」
『その程度かね？』
爆煙が晴れた中心地に、ブレイズキックをシザークロス２つで軽く受け止めているソロと無傷のストライク２匹の姿があった。
「あいつら…何で無傷でいるの！？技は命中したはずなのに！」
技は確かに命中していた。確かにだ。爆煙が舞う前にフロムのシャドーボールは確かにストライクの顔面に直撃した。しかし、それであるのに無傷であるとは異常だ。ダメージを次こそ与えるため、もう一度シャドーボールを放とうとするが、足を突然引き摺られて中断された。
「な、何これ！？」
「うわー！何でゲスかこれー！？」
「離れろ！この手！」
引き摺っているモノの正体は真っ黒な手だった。オマケにソロを除く全員が掴まれ、引き摺られている。引き摺っている真っ黒な手の進む先は食堂の入り口に何時の間にか発生している黒い空間の先だ。必死に手を引き離そうとするが抵抗は空しく終わり、全員が黒い空間に引き摺り込まれてしまった。取り残されたソロは黒い空間へ向かおうとするが、２匹のストライクに邪魔されて向かえなかった。
「雑魚共は俺様が相手する。テメエらはそのしつこくウザッテェワン公をぶっ殺せ！！ヒャーハハハハハハ！！」
「…！？」

突如、立ち塞がるストライク2匹の後ろから狂人のような声が黒い空間から発せられた。その言葉に2匹のストライクが声を揃えて了解と言った。声の主が気になるが、今はその事を考えている暇はない。刃を構えて突進してきたストライクに攻撃態勢を取った。

第五話：動く影（後書き）

ソロ「急転開だなオイ…」

だってさー、そろそろ物語りにエンジン掛けないとじゃん。第一、激動への道が開いたって前言っただろ。

フロム「ねえ…あたしの出番は？」

……もうちょっと待たれ！退散☆

フロム「あ、コラー！」

ソロ「…そういやこれの更新、メチャクチャ遅かったな。」

第六話：闇より深い暗黒は目覚めた（前書き）

何がどうなってるんだ？オレは何で狙われてるんだ？それにあの手はオレだけ掴まなかった。何か意図があるのか？クソ、一体何が起きてるんだ…！

語り：ソロ

今回残酷描写やばいのでご注意を。

第六話：闇より深い暗黒は目覚めた

「はっけい！」
『シザークロス。』

はっけいとシザークロスがぶつかり、相殺を起こした。技と技がぶつかった衝撃で両者とも後ろに大きく下がり、重心を低く保って次の技の準備に移る。半悪魔と思えるストライク２匹は後ろにいる方がまるで影のような動きをしていた。

「うおおお！」
「無駄だ。」
「無駄なのだよ。」

変則的に移動を繰り返しながらパンチとキックを連続で行うが、やはり後ろにいるもう１匹が影のような動きをする。回避をする時、攻撃をする時、前に立っているストライクと全く同じ動きをする。ただシンクロしているだけなら少しは楽になるのだが、回避時はともかく、攻撃時が非常に厄介であった。

「ブレイズキック！」
「シザークロス。」

赤い炎を纏うキックを相性の悪いシザークロスで相殺された。普通なら力の押し合いがここで始まるのだが、この戦いは違った。

「シザークロス。」
「…！シャドークロー！」

攻撃時が厄介なこと。それは動きが同じだが、攻撃する際の角度が違うこと。影は本体と同じ動きをするが、場所、角度が違う。加えて今回、影の役となっているストライクは実体である。つまり攻撃が一度に二度くるということだ。そうなると普通は技を一度だけで相殺ができたことが、影の動きに成りきっているもう1匹のストライクにより、二度も使わなければいけなかった。しかし、2度目のシザークロスを防ぐのにシャドークローを発動したのは失敗と言える。

「ぐっ…！」

シャドークローは以前勝手に発動したように、人間の手のように5本指の暗い爪になっていた。しかも今回は発動した際、短い間ではあるが激痛が走るようになっていた。そのせいで隙ができてしまい、脇腹に蹴りを2発くらった。

「…マズイ！」
『エアスラッシュ。』

至近距離から放たれた風の刃を咄嗟に発動させたブレイズキックで弾き、そのまま顔面に蹴りかかった。

「無駄なのが、」
「分からんのかね？」

本体役と影役のストライクが同時に鋭い刃を振り回して腹を切ろうとする。迫りきた2つの刃の一撃目をブレイズキックで相殺し、二撃目をリスクがあるのを承知してシャドークローで直撃を防いだ。リスクが発生するシャドークローを使用したのを見たストライクは微笑を浮かべ、それぞれ別の動きをして本体役だった方がシザーク

ロスを肩に向け、影役のストライクが辻斬りを先程蹴りを入れた脇腹に目掛けた。

「…ざ…けんな！」

唸りを上げた刃が当たるかの刹那、シャドークロー発動時の激痛を歯を食いしばって耐え、シザークロスと辻斬りを裏拳と踵蹴りで受け流す。大振って繰り出した技を外したストライクはやや前のめりになり、動きが鈍くなった。

「くらえ！」

懇親の力を込めたブレイズキックを動きが鈍くなったストライク２匹へ抉り込ませるように蹴りつけた。直撃を受けたストライク２匹はややよろけながらも体勢を立て直そうとしたが、ソロが間髪入れずに連続でブレイズキックをさらに浴びせる。今の彼は、精神がこの日で左右されたせいなのか、何時もの冷静さを欠いていた。

「激しいな。」

「激しいな。」

攻撃を受けている最中にもストライクは妙に落ち着いていて、冷静さが保たれていた。若干平常心を失ったソロは相手を吹き飛ばすためにはっけいを行おうとするが、ストライク２匹も何時までもダメージを受け続ける訳がない。影役だったストライクがわざと本体役の盾になり、直撃を自ら受けた。このわずかな間に本体役が影分身を発動させ、ソロに標的を撹乱させた。

「所詮は分身、影を見れば見分けなんて…」

影分身は相手に本体を見分け難くするように擬似分身を生み出す技…言わば撹乱技である。パッと見ると見分けがつかないが、これには致命的な弱点がある。本体には影があるのだが、分身体には影が存在しないのだ。（ちなみに、弱点はあくまで独断である。）本体を特定しようと目を配らせるが、異変に即座に気づいた。

「影が…ある？」

あるはずの無い影がストライクの影分身には存在していた。そしてこの後、最も驚く事が待っていた。

『真空波。』

「ぐあ！？」

本体だけならず、分身体までもが刃から発せられた数多の衝撃波がソロを襲った。狭い部屋全体で衝撃波が乱気流を起こし、食堂だけならぬギルド全体までもが弾け飛んだ。瓦礫という瓦礫が辺りに降り注ぎ、ギルドは一瞬にして廃墟になった。本体役であるストライクが影分身を解除し、分身体が体へ戻っていった。

「やはりエネルギーを使う。」

「技はまだ使えるか？」

「せいぜいシザークロス、エアスラッシュ３発程度だろうな。」

『まったく不便で困るな。改良技、暗黒分身は。』

ギミックは分からないが、先程の実体を持つ影分身は彼らが習得している影分身の改良技であるようだ。改良技、暗黒分身に対してハモりながら愚痴を漏らしつつも瓦礫の奥へ向かった。

『どこにいるのかね？』

『姿を現すといい。楽になるぞ？』

「ヒュー……ヒュー…」

先程の真空波のせいでソロは瓦礫の奥の奥。カミーユの部屋より奥、弟子の部屋ぐらいの位置で仰向けになって僅かに呼吸をしていた。俗に言う「虫の息」というものである。

（ヤバイ…本当に…死ぬかも知れねえ……）

ガララ…ガラガラ……

（…こっちに、来てやがる……う！）

「ぶ、ぶふ！」

『…！！』

（…ああ、これは死んだな……）

突発的に吐き気が襲い、赤い液体を吐き出した。鉄臭い味が口に広がり、意識が薄くなり始めた。しかも最悪のタイミングを吐血を起こしてしまい、その時の咳き込みが響いてしまった。耄碌とする意識の中、死が近づいていると感覚でまだ意識は覚醒していた。だが、どちらにしても死んでしまうのは目に見えている。まず致命傷をすでに負っているのだ。見つからずに済んでも恐らく死ぬ。そして先程の咳き込み。これを聞かれてしまったのだ。前者のケースの可能性は無くなり、もはや見つかるのは当然。瓦礫が次々除けられる、転がる音、踏みしめる音が近づいてくる。

「へ…へへ……”シャドークロー”。」

瓦礫の山から自ら手を出し、ストライクに見つかるようわざと己の手を敵前にさらけ出した。

『そこか。』

彼には策があった。それが通じるかどうかは分からないが、今はそれをするしかなかった。何より無抵抗で殺されるのは御免だからだ。

（こいよ、影真似野郎……近づいたら…この闇の爪で切り裂いてやるよ…！）

『さよならクロノスの“オマケ”。シザー…』

「うおおおおお！！」

瓦礫をストライク２匹の顔に向けて弾き、ゴミのように積まれた瓦礫の山から飛び出して巨大化した黒い爪をストライク２匹の体に通り抜かせた。ジャギリ！！と切り裂く音が響き、黒い爪を通り抜かれたストライク２匹は何の切り傷も無しで、力なく倒れた。

「…切れ…て、ない？」

そういえば、シャドークローを発動した時、いくらか今までと違うことが起きていた。五本指のシャドークローが上半身並みに巨大化したこと。激痛が走らなかったこと。そして、今起きた切断されてないことである。

（…よく分からんが…一応倒せたみたいだな…）

「ハ…ハハ…ざまあみろ…」
『ふうむ、残念だったな。』
「…！」

倒したと確信したが、甘かった。ソロがシャドークローで切り裂いたストライクは暗黒分身の分身体であった。ならば本体はどこか？後ろから気配がしたが、気づいた時には遅かった。

『辻斬り。』

双対の辻斬りが深く刺さった。荒々しい刃はリオルの小さい体を突き抜き、宙に持ち上げられた。

「ガッ…！」
「ふうん、つまらん。」

脇腹に刃が刺さったまま壁に投げられ、バウンドをして床に落ちた。

「ぐ…かっ……」

壁に叩きつけられたせいで傷口はさらに広がり、大量の出血を起こしていた。瞬く間にソロの場は血の池になり、赤い池に突っ伏した。

「始末完了か？」

辻斬りを影の役として行ったストライクが血の池と化したソロの倒れている所まで行き、背中に腕の刃を突き立てながら本体役のストライクに言った。

「いやまだだ。見ろ。」

影役のストライクに本体役のストライクがまだだと否定した。ソロは完全に倒れてはいなかった。まだ完全には…

「……ぁぁぁ…」

「やはりあいつか。」

「あいつだ。」

『クロノスのバックアップが働いている。』

脇腹を刺され、倒れていたはずのソロは黒いオーラを体中から発しながら体を大きく曲げ、ゆっくり起き上がった。それに呼応するかのようにシャドークローが突然炎のように噴き出し、赤と黒のオーラを纏った人間の手がシャドークローの内側から出現し、影役のストライクが追い討ちに突き立てた辻斬りを掴んだ。

「やっとお前か。」

影役のストライクは落ち着いて言っているが、ストライクの象徴と言える腕の刃の一部は掴まれている人間の手で握り潰されていた。影役のストライクは刃の一部を握り潰された後で素早く後ろに下がり、本体役のストライクと真横に並んだ。

「あいつだ。」

本体役のストライクはほくそ笑んでシャドークローの中に潜む者を凝視していた。シャドークローの紫と黒のオーラが炎のように噴き上がる隙間からは、あの大鉈を持った赤と黒の法衣を着た青年が瞳孔を見開かせてストライクを睨みつけていた。

「やあクロノス。」
「やあクロノス。」

睨みつけられたストライクは爽やかな笑みを浮かべながら青年を「クロノス」と呼び、また順々に発言してお辞儀をした。そんな行いに返ってきた返答は物騒且つ、乱暴な言葉であった。

『テメエらをぶっ殺す！！』

エコーとドスの効いた殺害宣言を堂々とし、右手で人差し指を指し、左手の親指を立てて真下に向けるという奇妙な動作をし、途端に怒声を上げた。

『ブリィィィィッッ！！』

その怒声を上げた途端にソロの体全体から少しずつ黄色い稲妻が発生を始めた。秒数が経つに連れて稲妻は大きさを増し、やがて２ｍの大きさを越す小規模の稲妻がソロの体を包み込んだ。だらりと垂れ込んだまま立ち尽くしているソロはようやく口を開いた。本人の口調ではなかったが…

「インストール完了。カーッ！やっと空気吸えたぜーー！」
『バックアップか。面倒な相手だ。』
「あ？テメエらもういんのかよ？は～メンドクサ。」
『オイ！！ブリッッ！！』

今のソロの体を借りているであろう、ブリッッと呼ばれた者は青年、クロノスの怒声を受けて「へーへー。」と適当な返事をした。

「まーつうことだ。テメエら、死ね♪」

軽い口調で恐ろしく物騒な物言いをし、シャドークローを解除して拳を握り締めながら突き出した。

「四騎士で南を司る騎士。稲妻の化身ブリッツだ。そこんとこよろしくぅ！」

第六話：闇より深い暗黒は目覚めた（後書き）

ソロ「クロノス登場はや！しかもオレオマケだと！？」

うん、結論がこうなった。

ブリッツ「次回はこの俺が活躍を」

次回をお楽しみに！

ブリッツ「テメエ！俺のだい（ｒｙ」

第七話：神速の稲妻と四騎士（前書き）

ひっさしぶりだなー空気を吸うのは。けどなーこれはねえよ。

このクソッタレ共がいるってことはあの野郎もいるな……

語り：ブリッツ　クロノス

余談なこと。クロノスのテーマＢＧＭ勝手ながら考えてみました♪

格闘ゲーム、ブレイブルー　ハクメンのテーマ『ＳＵＳＡＮＯＯＨ』

是非聴いてみよう！

第七話：神速の稲妻と四騎士

「う……うう……」

目を覚ました時に居た所は夢で出てくる真っ暗な空間。何時も通りの場、何時も通りの空間。しかし、心なしか閉塞感が感じられる。これは何時も通りの事ではなかった。近くに壁があるような気配もする。起き上がるのがだるく感じるが、ジッとしている訳にはいかないため、体に鞭を打って起き上がる。

「……何時もと何か違う…」

辺りを見回すが当然、黒しか見えない。しかし、それでも何かがあるように思えてならない。

「…あれは…何だ？」

真後ろに振り向いた時、黒だけの空間の奥に雫ほどの蒼い光が見えていた。不思議に思い、その場所まで近づいた。そこに来て目にしたものは、石の杯に置かれている青白く光る球体のような物であった。

「これは…オレの魂か？」

見覚えのあるような感覚がするからなのか、自分の所有物と感じるからだろうか、どちらにしても分からなかったが、何となくそんな気がした。己の魂と思われる物に触れようと、ゆっくりと青白く光る球体に触れた。

触れたその瞬間、球体が蒼い閃光を放った。

「な、何だ！？」

閃光は辺りを蒼く染め、やがて閉塞感と感じていた原因のモノが露にされた。

「……遺跡か？」

蒼い閃光が放ってからしばらくして、東西南北に蒼い炎が灯り始め、辺りを照らした。その時に目にした光景が、石の壁で囲まれ、蒼い炎が宿る東西南北にそれぞれ石の神殿が築かれた遺跡のような所だ。そしてこの遺跡らしき所の中心地に赤と黒の円陣が描かれている。その中心に、あの石の杯に置かれた青白く光る球体があった。ソロは再び辺りを見回し、周りの確認を行った。全体を見たが、今の状態以外は特に何も無かった。と、なると残り気になるのは４方角に位置する四つの神殿だけだ。物は試しと北側の神殿は入ろうとした時、神殿の上に黒い炎をような物体がいるのに気づいた。気配が全くなかったのに警戒し、戦闘態勢に入った。と、その時…

「やめなよ。僕は戦えないし、ここで君と戦って何の得があるのさ？」

その黒い炎のような物体が２０代くらいの青年の声を出して言葉を話した。が、得体の知れない存在だ。初対面で信じられるはずがなく、警戒を解かずに何時でも攻撃できるよう重心を低くする。

「だから僕は戦えないって。とりあえず、君に色々話したいから構えを解いてくれない？」

「……分かった。」

「やっと理解してくれたか。…さてと。ではようこそ、思念の神殿へ。正しくは君、ソロの意識空間だけどね。僕は四騎士と呼ばれる四つの思念体。その内北を司る騎士、ダーインだ。よろしく、元(もと)『クロノス』。」

黒い炎のような物体、ダーインがあの青年の名をソロに言い、一礼をするような動きをした。ソロはクロノスとは対面していないため何の事か？と思い、聞き返した。

「ダーインとか言ったか？お前がさっきオレに言ったように、オレにはソロって名があるんだ。他人と間違えないでほしいんだが…それに元って何だ？」

「さっき言った通りだけど？ソロってのはクロノスの偽名だよ。」

「オレの過去を知ってるようなこと言いやがるな。いや、お前…知ってるだろ？」

「おっと、これ以上は秘密。今はここまで。」

隠し事があるようで、ダーインはここでソロとクロノスのことに関して話しを切った。ソロは聞かせろと追求したが、ダーインは黙っているだけで何も聞き出せなかった。

「何で知っちゃいけないなんだ？」

「何でって？弱いからさ。まだまだ弱い君に真実を伝える意味も必要も全く無いね。「四」まで来れたら教えて上げるよ。来れればね。」

「…シャドークロー。」

挑発のような発言に青筋を浮かべたソロがシャドークローを発動した。が、やはり爪が巨大化している。その爪を見たダーインは呆れつつも、その爪について話した。

「無駄だよ。僕は思念体。ダメージなんか一切受けないよ。しかもその爪って僕の能力で発動するのだから、僕が制限したら君使えなくなるよ？」
「お前の能力だと？」

「そうだよ。」とダーインが答え、そのまま話し続けた。

「丁度いいからここで四騎士についても話しちゃおうか。四騎士は東西南北の方角それぞれを司り、異なる能力を有している思念体。僕達は今までクロノスのサブウェポンとして活躍してたけど、今は君の主力といったところかな。ついでにレベル指定もされている。一は速さと破壊の稲妻を操るブリッツ。二が物理攻撃を一切受けつけない幻影の炎を操るファントム。三が時を操るオールド。そして四がこの僕。相手の魂を喰い千切る能力を有している。」
「便利な能力だな。」
「…それでも、クロノスには敵わないんだよね。」

後ろを向いて傾けるような動作をしてため息を吐いたダーイン。どこか悔しさがあるようにも思える。しばらくして再びこちらに向いて言い始めた。

「あんまり真実は言いたくないから色々省くけど、とりあえず君は一度死亡したことによって覚醒し、晴れて四騎士の力を扱えるようになった。でもだからといって最初から四まで使える訳じゃないよ。今の君では基礎の一だけしか使えず、二より上はまだ使えない。一は覚醒するだけで他は必要ないけど、二以降は資格＝見合った実力が必要だからね。ま…一でも十分強いけど。一対一じゃ一番相性が良いしね……ちなみに、君のシャドークローって呼んでるその爪は僕の能力によって発動するものだけど…それだけは例外で制限なく

使えるから。」

最後にレベル一であるブリッツをやや妬ましげに話しながら石の杯に近づいた。

「今ブリッツが君の体を使って戦ってる。あのストライク達とね。杯に置いてある物を見てみるといいよ。彼の力がよく分かると思うし。」

そう言われて杯に置かれている物を見た。だが置かれているのは青白い球体だけ。何も見えなかった。

「見ようと認識しないと見えないよ。そうしなきゃ魂は本人に応えてくれない。」

「…うるせえな。ていうか、やっぱりオレの魂かよ。」

目を凝らして奥底を覗くように見た。そうしてると次第に己の体を動かしているブリッツが見えてきた。

「……これ、反則だろ……」

目の前に起きていることが信じられず、絶句した。ソロを苦しめてきたあのストライクは、今やブリッツに弄ばれていた。

「そらそらそらそら！どうしたどうしたー！」

あれ程の重傷を負っていたリオルの体は黒いオーラによるものか、一切の傷が無く、何時の間にか完治していた。そしてソロの体を動かしている南の騎士、ブリッツは稲妻を纏いながら常に神速並みの移動速度をして翻弄していた。ストライクがどれだけ技を繰り出そうと攻撃しようと、全て外れていた。影役のストライクも使えるようで、暗黒分身を生み出したが、ブリッツの移動速度に対応できずに一瞬で潰されてしまっていた。

『バックアップごときがこれか。『あの方』とクロノスはどれだけ強いのか。』

「ああ?！誰がバックアップごときだ！！俺は！四騎士で！最強なんだよ！！」

上から目線気味の言葉に激昂したブリッツはストライク2匹を約0.1秒の間に雷を纏った拳で左右のフックパンチ、ボディブローからのアッパーカットを一気に畳み掛けた。その攻撃速度に便乗するかのように、もはや目で捕らえられない速度で様々な体術を次々と畳み掛けて哲学のような謎の講義を始めた。

「いいかぁ！！速さとは力だ！！破壊力だ！！基礎能力だ！！優秀能力だ！！最重要能力だ！！物事全ても速さこそが全てDA☆飯食う時もそう！！体洗う時もそう！！掃除もそう！！そして敵の殲滅が一番そう！！つまり時間を短縮することによってあらゆる行動が可能となり！あらゆる手段を立てることができる！！つまり速さを極めることによってこれらをここまで有効的に使い！多くの行動ができるのDA☆故に故に故に速さこそが全ての力なのDAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！」

講義をしながらストライク2匹を宙に放り上げた後、雷の力を利用して空中を壁を蹴るように動いて身動きの取れない2匹の獲物を同時に稲妻を纏いながら蹴り飛ばした。だが、一回で終わる訳がなく、獲物の飛ばされる先の地点へ瞬時に移動し、今度は殴り飛ばした。しかしそれでも終わらず、また飛ばされる先の地点に移動してアッパーカットで打ち上げる。それ以降は殆ど似たような繰り返しだ。トドメに真上へ移動し、両手の掌を獲物に定め、紫色の稲妻を集め始めた。

「分かったかこのボケナス野郎がーーーーー！！紫電！！」

直後、高圧縮のされた紫色の稲妻がジグザグ上に動いてストライク2匹に襲いかかった。余った多大な電気エネルギーは真下に直撃し、有機物が次々と発火を引き起こして火の海と化した。

「これが速さ。これが力だ。覚えておくんだな。」

消し炭と化したストライクが落下した直後にわざとらしく髪を掻き揚げる動きをして決めポーズを行った。倒してからの達成感なのか、ブリッツがその場で「イェァァァァァァァ！！」と叫んでいるのを魂を通して見ていたソロは俯いて目を離した。

「何でこんなやつが……」

「悔しいでしょ？でもね、一対一で彼に勝るのはクロノスを除いて僕達の中じゃいないんだよこれが。ファントムは使い物にならないし、オールドは動きが遅いから捕らえることができないんだよね。」

ダーインもどこか妬ましそうな視線をブリッツに向けていた。

「さーて、あいつらがいたんだから『スパイク』の野郎もいるだろ

うな。」
『おい、交代しろ…野郎は俺がぶっ殺す。』
クロノスの言葉にブリッツは「へーへー。」と適当に返事をして目を閉じた。それと同時に右腕から五本指のシャドークローが出現し、赤と黒オーラが一気に広がって体全体を覆った。赤と黒のオーラｈ次第にある形へ変化していった。
「……ようやくマトモに動ける…」
今まで発していたエコーボイスがなくなり、普通にドスだけが効いた声を発して姿を現した。その姿は全身真っ黒で実体のある影としか思えないが、あの赤と黒の法衣を着た人間の青年の形をしている。また、後ろ腰にクロノスの特徴とも言える身の丈ほどの大鉈を担いでいる。そして黒い姿の中、赤い目だけは黒の中からはっきりと見えていた。
「こいつが…クロノス……」
初めてクロノスという人物を目にしたソロ。しかしこの時、言い様のない感覚に襲われた。それはまるで鏡の自分を見ているかのような感覚である。
「ソロ、君にもう一つだけ、伝えることがある。」
困惑気味のソロにダーインが話しかける。正直聞きたくなかったが、聞くことにした。
「これから伝えること。これは君がこれから成すべきことだ。」
「成すべきこと？」

それはね…とダーインが言った瞬間、クロノスは食堂付近にあったあの黒い空間の目の前まで来ていた。そしてダーインが口をここで開く。

「この空間を生み出した奴…」

『スパイク』を倒すことだ。

＞i３０３７９―２９７８＜

第七話：神速の稲妻と四騎士（後書き）

次回予告

フロムとギルドの一員は窮地に陥っていた。黒い衣を纏い、白い髪のようなものを頭に生やした不気味な笑いをする謎のポケモンは、ポケモン従来の技とは違う未知の力を振るい、手も足も出なかった。全員が倒れ、万事休すに陥った時に場が一転した。クロノスの参戦、そして…突然現れた黒い衣を纏い、白い髪を生やした同じ姿を持つ謎のポケモンによって。

今回これですいません。では落ちます！

第八話：赤黒と紫黒と漆黒（前書き）

何で最近になって事件が連続して起きるんだろう？…何でだろう…

…凄く嫌な予感がする……

語り：フロム

第八話：赤黒と紫黒と漆黒

「ヒーヒヒヒ…ヒャーハハハハハハ！！」

黒と紫の入り乱れる不気味な空間で狂人のような笑い声が響いた。

「うぐ……」

「つ…強すぎる……」

力なく倒れ込んでいるニロゲムとフロラン。全身は傷だらけで打撲跡や切り傷が所々出来ていた。そして、倒れ込んでいるのは彼らだけではない。

「い、一体…何者なんで……ゲスか？」

「ヘイヘイ……ポケモンじゃ…ないだろ、お前……」

ブラムの横に倒れている蟹のようなザリガニのような容姿に、赤い甲殻とハサミをしているポケモン、ごろつきポケモンのヘイガニが目の前にいる黒い衣を纏った謎のポケモンに向かって言った。すると黒いポケモンはギシっと拳を握りしめ、怒りの叫びを上げた。

「当たり前だろうがあ！！テメエらごときに人間様の崇高な「錬金術」と「魔法」を使える訳ねえだろうが！！嗚呼（ああ）！？」

怒りを露にした黒いポケモンが人差し指を突き出し、虚空に目に見えない速さで何かを描いた。それと同時に赤い陣が出現し、燃え盛る火柱がヘイガニに向かった。

「クロードーーーー！」

火柱に飲み込まれたヘイガニの名をブラムが悲痛な叫びを上げながら呼んだ。火柱が消えた頃にはクロードは動かなくなっていた。

「安心しろ。全員最高に痛めつけてから纏めて賢者の石の材料にしてやるからよ！ヒャーーハハハハハ！！」

目線を真上に向けながら両手を広げて叫ぶ黒いポケモン。ギルドの一員はそれを悔しくも見過ごすことしかできなかった。それはうつ伏せになって倒れているイーブイ、フロムも同じだった。

「桁が……違い過ぎる……」

ギルドの一員が全員倒れているが、フロランとカミーユの除いた彼らは弟子。弟子ではあっても探検隊としては中級から上級者レベル。早々倒れることなどないはず。だが相手が悪く、黒いポケモンとの戦いは戦いに成らずに一方的な虐殺になっていた。（まだ誰も死んではいないが。）

彼らが全員倒れる結果となったのは数十分ほど前である。

「どわ！？」

まず最初にフロランが黒と紫の入り乱れる空間に落ち、上から次々ギルドの一員が雪崩れのように降りかかった。

「…えーと、フロラン？」
「フロラン、大丈夫か？」
ギルドの一員が生き埋めになっているフロランに声を掛けていく。
「とりあえずお前達、体を退けてくれ……」
生き埋め兼、下敷きになっていたフロランが呻き声を上げて翼をパタパタ小さく振った。そう言われて次々に退いていくギルドの一員。退く最中、フロムは異形の空間を見て体を震わせた。体中に寒気が走り、僅かにだが吐き気もする。これらの不気味な色のせいであろうか？
「うっ…気持ち悪い……」
「それは私もだ。一体何だこの空間は？」
目を瞑って体を丸めるフロム。その様子にフロランも気分が悪そうに翼を振った。すでに全員気づいている事だが、この空間は異質だ。足場、頭上も含めて辺りは黒と紫が螺旋上に入り乱れている。数々の不思議のダンジョンでは見た事がない場所だ。いや、ヘタしたら不思議のダンジョンではないのかもしれない。ともかく全員はここから一刻も早く立ち去りたかった。しかし出る方法が見つからない。団体で行動して出口を探すが何も見つからない。こうした無駄な時間に浸かる中、フロムが考えていた。もしこういった事態に起こる要因は何か？その中である考えに辿り着いた。
「ねえ、フロラン。」
「何だ？何か見つけたのか？」
フロムに話しかけられたフロランは期待したが、すぐに裏切られる

こととなる。

「そうじゃないよ。ただ、ここに来た要因を考えてて…」

「要因？」

ややガッカリ気になったフロラン。しかし「要因」という言葉を聞いて表情が険しくなった。

「あたし達、突然出現したあの手に掴まれてここに連れてこられたんだよね。なら……ここに当事者がいるんじゃない？」

「はーい、テメーら気づくの遅ーい！その言葉聞くのに待ちくたびれたわこのド低脳が！！」

フロムが要因の結論を話して直後、一員の団体の中心に狂人のような声が発せられた。声の主は以前ソロを上空から見ていた黒いポケモンである。この黒いポケモンに気づいた全員が飛び退き、何時でも攻撃できるよう重心を低くした。しかし…

「どわーーーー！？」

ニロゲムが突然足場から突然発生した爆炎に真上へ跳ね上げられ、宙を舞った。

「ニロゲム！うわーーーー！」

次にニロゲムに叫んだブラムが左右から来た巨大な流水に打ち付けられた。突然の事態にギルドの一員が慌てた。

「お前達、落ち着いて周りをよく見ろ！風起こし！」

常に冷静を保っていたフロランは声を上げながら真上から降ってきた鉄の針の雨に気づき、風起こしで振り払った。だが攻撃の手は一向に緩まない。それどころか鼠算式に増えてくる。

「はぁ…はぁ…シャドーボール！」

フロムも次々に来る暗闇からの攻撃を回避、シャドーボールで相殺する。避ける、相殺、体力が減る、そのループに陥っていたのに気づいてはいたが、攻撃が激し過ぎて対処ができない。

「そらそら踊れ踊れー！ヒャーハハハハハハ！！」

四方八方から来る様々な物質による襲撃を黒いポケモンはオーケストラの指揮者のような動きをして虚空に陣らしきものを描いていた。描かれた陣のようなものは赤い光や青い光を放って浮かび上がると同時に消え、暗闇の奥底から見えないような位置に先程描いた陣が浮かび上がり、それから様々な物質の猛攻が襲ってきていた。他のギルドの一員が陣から発せられる猛攻に対処すべく躍起になっている中、フロムとフロランは黒いポケモンが様々な物質による攻撃を行っているのに気づき、そちらに向かって行った。

「電光石火！」
「燕返し！」

フロムとフロランの繰り出した電光石火と燕返しが黒いポケモンに迫りくる。黒いポケモンは右手だけを翳すと2つの技を軽々と受け止めた。片手だけで受け止められたことに驚きが隠せず、血の気が引いた。

「2つの技を片手で……」

「そんな…！」
「あーれ？技って確かこうゆうのじゃないっけ？あー…悪の波動。」
黒いポケモンはやる気無さ気に頭を掻きながら空いている左手を翳す。眼を見開いた長後に両手の掌から黒いエネルギーが集束し、辺りを覆いつくす巨大なエネルギー波がフロムとフロランを飲み込みながら放たれた。それは従来の悪の波動とは掛け離れた威力と範囲、性質である。さらに黒いポケモンは右手を１８０度に振りながら桁違いの威力と範囲を持つ悪の波動を放った。陣から放たれる猛攻に躍起になっていたギルドの一員も全員黒いエネルギー波に飲み込まれ、辺りが全て黒に染まった。
「う…そ……」
フロムがエネルギー波の去った時に目にした光景は、ギルドの一員全員が呻き声を上げて倒れている様。先輩も、後輩も、フロランも例外なく倒れていた。あまりにもあっけない、あまりにも差がある現実。不条理で理不尽な現実に、絶望で体中が支配された。
「ヒーヒヒヒ…ヒャーハハハハハハ！！」
これが数十分前の出来事、ギルド全員が倒れるシナリオ。
そして、現在に至る。
「まったくよ～俺様はさっさとあのワン公をぶっ殺して大好きな錬

金術をしてえってのによー。ま、あいつら送ったんだからすぐに殺されてくれるか。擬似、あるいは完全覚醒さえしてなけりゃ…」

「こいつ……さっきから…何を言っている？」

あの強大な悪の波動に直撃したフロランがうつ伏せになりながらも黒いポケモンに向けて嗄れた声を出した。そうすると黒いポケモンは目をニヤつかせて睨みつけてきた。

「あっれー？おかしいじゃねえか。テメエらはもうあの糞リオルの正体知ってるかと思ってたんだがなー？あれ？知ってない？あ、知ってねえっけな。てか言っちゃったよ。わりぃネタバレして！ゲヒヒヒヒ！！」

体を変な方向に曲げながら不気味な笑い声を上げつつ、ギルドの一員が知らないソロのことを口走った。それを聞いた瞬間、全員が弱弱しい声でざわめき始めた。その最中でフロランがフロムを除く、全員を震撼させた事を言った。

「…元人間、だろ……？」

『え……？』

「うう……ごめん……」

ざわめきの中、フロムに小さく謝り、少し咳き込んだ。とても説明できそうにない状態の彼女を見てまだ少し余裕のあるフロランが代わりに口を開いた。

「お前達、黙っていて…悪かったな……これはフロムから聞いた事なんだが…ソロは、姿こそ今はリオルだが……元々人間だ。そして…奴は、ただの人間ではないようだ……ぐあ…！」

これに流れるように黒いポケモンが黒い手でフロランの体を掴んで持ち上げ、地面に真っ直ぐ叩きつけた。そこで不気味な笑い声を上げて黒いポケモンが全員を見渡しながら声を張り上げた。

「そう。野郎はただの人間じゃねえ。あの野郎は、あいつはなぁ……世界を揺るがす人類最悪の殺人鬼なんだよお！！」

「ああそうかよ。じゃあテメエは嘘ばら撒き&何兆という人間を材料にした人類最悪の錬金術師だなぁ…嗚呼！？」

突如、異形の空間内にドスの効いたあの男の特徴的な荒い声が響いた。それを聞いた黒いポケモンは目を見開かせて肩を震わせた。

「…このクッソむかつく言動は…キヒヒヒヒ！そうだなあ。そりゃそうだよなーーー！！俺様がいるって分かったら世界を渡ってでも来る超殺人鬼（スーパキラー）だからなーーー！！なあ！クロノスちゃんよお！！」

そう言い放ちながら西の方角に両手で巨大な陣を描き、両手を掲げた。途端に陣は緑色に光り、今までの火や水などといった物質とは違い、緑色の竜のような生物が陣から出て真っ直ぐ空間の奥へ突進していった。すると奥で何か大きな物がぶつかったような音がした。音が止んだ途端にもの凄い風圧が襲いかかり、吹き飛ばそうになったフロムとフロラン。風圧がまだ流れている最中に機械が出すような金属音が少しずつ途切れ途切れに響いてきた。音が相当近くなると空間の奥からいよいよその主が姿を現した。大鉈を後ろ腰に担ぎ、赤い眼光を放つ青年、クロノスが両手に赤と黒の燃え盛るようなオーラを纏わせながら黒いポケモンに向かって真っ直ぐ、人間離れした速度で走ってきていた。

「久しぶりだなああ！！トリスメギストス＝ヴァージニア＝スパイ

ク！！時空間内でよくも俺の余分な人格を生み出してくれたなあああ！！ええ！？挙句の果てには表の優先人格まで変えられたじゃねえか！！」

怒号を放ちながら黒いポケモンに人の名と思える名を口にしながら手前まで来て左足で大きく踏み込み、右手を大きく振りかぶった。右手に纏っていた赤と黒のオーラは、刃のトサカを持った赤と黒の竜になって黒いポケモンへ三日月上に動いて突進をした。黒いポケモン、スパイクと呼ばれた者は赤と黒の竜を見た直後に右手の指全てで奇妙な形の陣を描き、右手に黒と紫のオーラを纏わせて竜を殴りつけた。殴りつけられた竜は唸り声を上げた直後に霧のように分散して消えた。竜が消えたのを見たクロノスは後ろ腰に担いでいた大鉈を右手に取って高く上げ、真っ直ぐ力任せに振り下ろした。黒いポケモンは右手にオーラを纏わせたままで大鉈の刀身をそのまま掴み、盛大な笑い声を上げて口走った。

「ヒャアアッハーーーー！！やっぱあん時変えられたんだなあ！！スンバラシイ！！時空間によって生まれたもう一つの人格のテメエはもしかしたら『二対の青』を持ってるかもなーーー！！」

「知るか！！俺に向かって話せよスプラッターアルケミスト！！」

「テメエにゃあ興味ねえつってんだろうが！！こちとら赤と黒にはウンザリしてんだ！！用済みなんだよ！！俺様はもう一つの人格に話してんじゃボケ！！」

「…おい……これはどういうことだよ。あのスパイクって奴が言ってる通りにいくと、オレがもう一つの人格ってことになるんじゃな

いのか？」

スパイクの言っていた言葉にソロは声を震わせ、ダーインに目を向けた。しかし、彼は当然のように黙っていた。

「……」

「おい……答えろよ！」

声を張り上げるが、ダーインは黙ったままで答えなかった。ギシリと歯軋りをして魂から写っている黒いポケモン、スパイクと呼ばれた者を見た。

（こいつは…記憶を失う前のオレを知っているのか？）

「間違っても彼の言葉を真面目に聞いてはダメだよ。彼…いいや、あいつは嘘つきだから。」

「死ね！」

「死ねえ！！」

「死ね死ね死ねぇ！！」

「テメエが！！」

『死ねよ！！』

クロノスとスパイクは戦いなどということはしていなかった。どちらも殺す気でいる。これは卑怯な手段も普通に適用される無法な殺

し合いだ。クロノスは大鉈に赤と黒のオーラを纏わせて振り下ろす。振り抜かれたと同時にオーラが波のように広がった。波の直撃を受けたスパイクは大きく吹き飛ばさつつ青白い球体が体から出てクロノスの中に入っていった。刃の直撃ができなかったクロノスは舌打ちをして左手を強く握りしめて殴りかかろうとした。

「クソが！！」

次の攻撃準備を見たスパイクは右手の人差し指で赤く光る陣を描き、爆炎を直撃させた。

「…殺す、ぶっ殺す！！」

「ぶげぁぁぁ！！」

爆炎を直にくらったクロノスは歯をむき出しにして大鉈の腹でスパイクを殴った。奇妙な叫びを上げながら地面をスライドして飛ばされた。スライドがピタリと止まった所で起き上がり、彼を睨みつけた。

「テメエェェェェェェェ！！殺す！！もうぶっ殺すっぶごおおお！？……誰だ今やった奴は！！」

真横から突然襲い掛かった黒いエネルギー波に直撃し、再度スライドしたスパイク。この黒いエネルギー波は放射部分の外部が紫と黒、内部が黒い刃のようなものになっていた。従来の悪の波動である。

「誰だ。だと？それはこちらの台詞だ。人間と私と同じダークライが何故ここにいる？」

悪の波動を放った主は黒いポケモン、ダークライと呼ばれるポケモ

ンと全く同じをしていた。自分と同じ姿をした者をみたスパイクはまた不気味な笑いをした。

「ヒャーハハハハハ！！あーらら、俺様と同じダークライ様が来ちゃったよ！ま、俺様は意図的にテメエと同じ姿をしてるだけなんだがなー。」

「意図的だと？まるで自分の本来の姿を持っているような言い草だな。」

「ヒャハハハ！！そりゃあそうだろうよ！！俺様は元々人間…」

「余所見してんじゃねえ！！」

会話最中のダークライ2人、スパイクも含めて大鉈を真横から薙ぎ払うように振ったクロノス。スパイクは黒と紫のオーラを纏った右手で刀身を殴り、ダークライの方は悪の波動のエネルギーを留めたまま大鉈の刀身にぶつけた。反発の運動エネルギーを大鉈にぶつけられ、大きく退いたクロノスは大鉈を構え直して左手を強く握った。

「スパイクがどいつかなんて俺には分かる…が…おい！！この世界のダークライ、巻き込まねえ自信なんかねえからここから退いてろ…」

「私の空間に勝手に踏み入れてその態度か？お前、いや、お前達…ここから生きて出られると思うなよ……」

「ヒャアアアアッハアアアアアア！！魔法も錬金術も使えねえ上に力もねえテメエが俺様に楯突くのかよ！！舐めんなよ糞黒餓鬼（ファダキンボーイ）！！ワン公！！テメエもここで死ねや！！」

赤黒（クロノス）、紫黒（スパイク）、そして漆黒（ダークライ）。それぞれ違う目的、だがやることは同じ、三つの力が対立した。

第八話：赤黒と紫黒と漆黒（後書き）

今回クロノスとスパイクの説明をします。

ソロ「作者。」

なんすかい？

フロム「だんだん…」

ソロ「ドラゴ〇ボールみたくなってないか？」

クロノス「いや、これはブリー〇のウ〇キオ〇ＶＳ〇護みたくなってるだろ…」

あ、あはは…だ、大丈夫…これぐらい刺激欲しいでしょ？

スパイク「にしても序盤から派手過ぎんだろ。大丈夫かよこれ？」

大丈夫でしょ…うん。ていうか何で悪役臭たっぷりのお前がここにいるんだよ！！

スパイク「俺とクロノスの解説をするみたいだから来たんだよ。」

そんなに心配かよ！ていうか、一人称変化してるし若干いい奴になってるし！

…では解説します。

トリスメギストス＝ヴァージニア＝スパイク

「はい、もう見ての通り悪役です。文中から推測するに彼は元人間

で、人間時代に錬金術師をしていて魔法も扱える者であるようです。今は訳有りのようでダークライというポケモンの姿をしています。意図的に行っているのだから何かのカモフラージュにも思えますね。戦闘能力は作中で分かるようにかなり高いです。オマケに学者であるにも関わらず、ダークライの体でも肉弾戦ができる模様。また陣を描いて火や水などといった自然物質を扱う他、竜を召喚したりと多彩な攻撃を仕掛けます。クロノスと深い関係があるようで、彼を見ると過剰な反応を示します。また、ソロがなぜ元クロノスであるのかも知っているようです。ちなみにこれはクロノスも知っているようです。

「トリスメギストス」は歴史上で実際に存在する錬金術師で、フルネームはヘルメス＝トリスメギストスです。スパイクの名はこの錬金術師から頂きました。」

はい次は外道青年クロノスです。

クロノス「消し炭になりやがれ！！」

ウボァーーー！！

クロノス

「正確な名前は不明で、本名なのか偽名なのかまだ分かりません。名字がないので偽名の可能性が高いのですが…

黒く長い下向きに下がっているギザギザした長髪をして赤い眼をし、コートのような法衣を着て後ろ腰に身の丈ほどの大型の鉈を担いでいます。文中ではないですが黒い長ズボンを穿いていて、靴は全ての部分が金属性です（高温、低温に強い素材で出来ている）。これが金属音を出す起因となっています。ヤクザのように殴ったり力任せ、大鉈を持っているのにフルパワーの拳で殴るなど切断外傷より打撃外傷を重点的に行う訳の分からない外道野郎です。（あれ、切

断と打撃って同じだっけ？）赤と黒のオーラを相手に当てて体内にある何かを削り取って己の糧にする能力を有しています。魔法であるか単なる能力であるかは不明です。また赤と黒のオーラは自身を高速で回復させることができます。ソロの傷が完治していたのはこれのおかげです。スパイク同様、彼と因縁があるようで常に過剰反応ですがスパイクの事や見つけると歯をむき出しにして斬りかかります。そしてソロがなぜ生まれたのかも知っている模様。その中で特に気になるのが

『時空間内でよくも俺の余分な人格を生み出してくれた。表の優先人格が変えられた』ですね。

クロノスとはギリシア神話における時間の神、または農耕の神の名です。詳細はネットで調べてください。この青年の名はこの神から取りました。」

こんな所だろうか。

後は『二対の青』と呼ばれる何かですね。これの意味は…作品名で分かるんじゃないかな？

他に気になる所があったら言ってください。たぶんお答えします。

それでは、前回からシリアス方面で恒例となった次回予告をどうぞ。

（仮）

次回予告

ぶつかり合う力と破壊。黒、黒、黒、赤、紫、黒。周りが黒（はかい）しか見えない。圧倒的で絶対的、彼らはもはや止められない。『二対の青』

が輝き始めるその時まで…

第九話：蒼が目覚める時　世界の影（前書き）

今度こそ…今度こそだ…今度こそこのクソ野郎をぶっ殺す！！

ヒャハハハ！！ワン公は今ここで潰してやるぜえ！！

余所者どもが…邪魔だ。

語り：クロノス　スパイク　ダークライ

第九話：蒼が目覚める時　世界の影

禍々しい空間内に大きく響く爆発音、衝撃音が響く。それらを引き起こしているのは紛れもない彼らだ。

「悪の波動！」

ダークライが両手から悪の波動を放ち、クロノスとスパイクを狙う。

「邪魔くせえ！！」

クロノスはオーラを纏った左手で迫ってきた黒いエネルギー波を殴りつけ、相殺をした。スパイクは素早く黒く光る陣を虚空に描いた。その同時に陣から黒い渦が発生し、悪の波動を飲み込んだ。

「こいつら…」

（…本当にただの人間か？特にあの人間のほう…とても生きている者と思えない。）

攻撃に失敗したダークライが舌打ちをして顔を顰めた。そんなダークライに目も暮れずクロノスはスパイクに畳み掛けていた。大鉈を振り下ろしが避けられたら左手から刃のトサカが付いた竜を生み出し、吹き飛ばそうとする。

「Gワイバーンは飽きたなあ！！もっと別の使えよ！！」

眼をギラつかせて悪の波動を刃の付いたトサカの竜に放つスパイク。

辺りが激しく揺れるクロノスとスパイク二人の攻防にダークライが介入した。両者に向けて強烈な冷気を放つ青いビーム、〝冷凍ビーム〟を放った。

『邪魔だこのクソボケ！！』

眼が憤怒で逝っているクロノスと狂気で眼を光らせたスパイクが冷凍ビームを素手で弾き返した。

「っ…！」

「邪魔しやがってよお…クソダークライ！！」

「分かってんだろうなー…糞悪餓鬼（ファダキクボーイ）！！」

敵意を剥き出しにしたクロノスが大鉈にドス黒く、鈍く光る巨大なオーラを纏わせてダークライに突っ込んだ。一方、スパイクはクロノスに向けて陣を描きながらダークライに無数の陣を描いた。

「爆発しろォ！！ヒャハハハハ！！」

陣がダークライの所へ瞬時に移動し、大爆発を起こした。爆風と爆炎はクロノスも飲み込み、熱風が辺りを包み、波状に広がった。

「何だよこれは……クロノスの奴、こんなに強いのか…？いや…それよりも……」

（こんな連中相手にしても全然退けを取らないなんて…本当に人間かよ！化け物だ…！）

ソロは初めて恐怖を体感していた。自分自身、実力はあるほうだと思っていた。いや、実際に結構はあるのだが…比べる桁が違った。経験面でも、能力面でも彼らは反則的だ。

「あーよっこいしょっと。よう、ダーイン。戦況はどうよ？」

「ん、こいつは……」

ソロが振り向くとそこにはダーインと似た形だが黄色い色をした炎のような物体、南の騎士のブリッツがいた。ソロの隣にいたダーインは「戦況は僕から言わせれば良くないね。」と彼の問いに顔も見ずに答えた。やっぱか、と言ったブリッツはソロを見るような動きをして「あぁ、」と何かを思い出したような声を出した。

「お前、クロノスの欠格品か。」

「欠格品って言うな！」

何時にも増して過剰反応をするソロ。ずっと前まではあまり大きな反応をしない彼であったが、ここ最近は過剰に反応するのが目立っている。短期間で次々と頭へと叩きつけられるストレスによるものなのだろうか。。がしかし、まだストレスの弾は頭に被弾していく。

「いやあ、クロノスの経験を少ししか引き継いでねえし、お前。」

「それを欠格品て呼ぶな…！」

「お前、性格もなんか緩くなってるし弱えし…モロポンコツスペックだぞ。」

「ポンコツでもねえよ！」

「クロノスと戦ってみると欠格様が分かるぞ、マジで。」

「あー…頭にきた…！一発殴らせろ！！」

ストレスがとうとう極度に達し、ブリッツに殴り掛かった。しかし彼はダーインと同じ思念体。実体を持たないのだからダメージを与えることはおろか、当てることもできない。そして黄色いあの物体がソロを怒り狂わせるある発言をした。

「ばーか。」

「……」

その一言を言われて黙り込んだソロ。その様子を見たダーインは頭突きをするような動作をしてブリッツにぶつかった。

「いてえ！何しやがんだ！」

「あのねえ…ソロは人格元のクロノスの性格を少なからず継いでるんだよ？表面の性格と裏面の性格は違うんだからね……」

ダーインがブリッツを咎めた時にはもう遅かった。ブリッツとダーインの真正面にいるソロが頭を下げて肩を震わせていた。

「…ブリッツ、一回死んできな。」

「へっ？」

「…死ねよテメエ！！」

ブリッツの言葉に怒り狂いだしたソロが両腕を？にクロスさせて振ると背後から赤いオーラが噴き出し、赤い体毛をした狼らしき獣が悲鳴を上げながら、口を大きく開けてブリッツへ真っ直ぐ突進した。

『キィャァァァァァ！！』

「ちょ…！Sウルフ（スクリーム）！？ぎゃあああ！」

「馬鹿ブリッツ……赤（怒り）の感情を無理矢理叩き起こすからこうなるんだ。」

惨めな悲鳴を上げたブリッツにダーインが哀れむような口調で言った。Sウルフ（スクリーム）という技を撃ち出したソロはまだブリッツに攻撃しようと、怒り狂って先程の悲鳴を上げる狼を飛ばし続けた。

「さすがに感情を具現化した攻撃には思念体でも耐えられないか。哀れブリッツ。」

現実ではクロノスが戦い、意識空間、思念の神殿ではソロが怒り狂いながらブリッツに攻撃していた。お互いとも躍起になっていたのは言うまでもない。特にソロは現実のほうで何が起きているのか気にも留めなかった。

「逃げんなゴラァ！！」

俊敏に後退するダークライに怒声を上げて迫るクロノス。スパイクを潰すより先に邪魔なダークライを潰そうとしているのだが、ダークライ自身素早いので中々捕らえられないでいる。後退を続けているダークライは冷凍ビームを発しながら迫りくるクロノスを迎撃している。

「ヒャーハハハハ！！纏めておっ死（ち）ね〜〜！！」

陣を次々と描き、爆炎、流水、稲妻を、追うのに夢中となっているクロノスへと向けるスパイク。陣から発せられたそれらにクロノスは飲み込まれた。

「ごの野郎がああああ！！調子に乗りやがってイカレ野郎！！」

全身血塗れになって物質の嵐から出てきた更なる激昂をしたクロノスが大鉈をギシッと握りしめてダークライを一旦無視し、スパイクの方へ突進していった。背を向けた瞬間を見たダークライは残忍な笑みをして手を前方に翳した。

「死んでもらおうか人間！」

背を向けて走りだしたクロノスにダークライが冷凍ビームと悪の波動を同時に放った。

「うごっ！」

背を向けていたために、直撃は避けられなかった。冷凍ビームはクロノスの体を一気に凍らせ、動けなくした。チャンスとばかりに遠隔攻撃を行っていたスパイクがクロノスに急接近し、右手に紫と黒のオーラを宿らせた。

「チャーーンス！！チャンスチャーーーンス！！あばよワン公！」

右手の振りかぶりが眼前にまで迫った時、クロノスが眼を大きく見開かせて手に噛みついた。

「イデエ！離しやがれ！！」

「離すかよクソ野郎が…！これで死にやがれ！！」

噛む力を強くした瞬間、スパイクの周囲から黒い光を発する巨大な球体が発生した。球体はひとりでに回転を始め、スパイクのいる場所に迫り始めた。

「テ、テメエ…何しやがる…オイオイ止めろやそれは！！」

球体を見た直後に血相を変えて必死にもがき出すが、手を深く噛まれているせいで中々振り払えない。それに彼の噛む力が尋常ではないせいで尚更簡単にはできない。

「誰が止めるかよボケが！これくらって死ねクソボケ！！ダークライ！！テメエもだ！！」

「なっ！？」

冷凍ビームと悪の波動を2人に放とうとしていたダークライがクロノスの肩から噴き出したオーラによって形成された手で掴まれ、スパイクの近くまで寄せられた。ここまでの準備をし終えたクロノスが口を限界まで開けてこれまでにない怒声を叫んだ。

「爆破だ爆破！テメエらクソ障害なんて爆破よお！！〝Eグラトニー！！〟」

黒い球体が回転速度を速めるとスパイクとダークライへぶつかっていった。ぶつかった黒い球体は直撃後に赤い光を発し、膨張を始めた。次々と球体が2人にぶつかって膨張をしているその間にクロノスは冷凍ビームの拘束を破り、距離を取ってから大鉈を後ろ腰に担いで右手の指をバキバキ！と鳴らした。

「爆発して！！」

その怒声をした直後、先程までの球体が赤い光と黒い光を発しながら大爆発をした。

「飲まれて！！」

続けるように怒声を上げ、右手から赤い球体を発生させて爆心地へ投げ飛ばした。

「拡散しろ！！」

その言葉を最後に赤い球体が爆心地にまで届き、赤い火柱を噴き上げた。

クロノス、ダークライ、スパイクの殺し合いを遠くから見ていたフロムとフロラン、そしてギルドの一員達はただただ呆然としていた。圧倒的な戦闘力に彼らは見ているだけしかできなかった。全員が重傷を負っていなくても、恐らく彼らは見ていることしかできないであろう。

「……なんだか…ちっぽけに見えてくるなぁ……あたし達が……」

生気の無い声でフロムが呟いた。その一言を聞いたフロランは申し訳なさそうな顔をして頭をガックリ垂れ下げていた。

「あたし…違う、あたし達だって…必死に探検隊の修行をしてきたのに……結構長い間…やってきたのに……！……こんなのってないよ……」

フロムは話していく次第に悔し涙を流し始めた。自分達の今までの苦労と努力、経験が全て無駄になり、否定されたかのような出来事がさっきまでも、今も起きているのだからだ。悔み続ける彼女だが、残酷な現実はそんな暇も与えてくれない。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「え…？」

気づいた時にはもう遅かった。奇怪な叫びを上げてこちらまで弧を描くように飛ばされてきたダークライ、スパイクがフロムの目の前で落下、バウンドをした。

「ク…クソッタレがぁぁ……」

スパイクはボロボロの状態でユラユラして立ち上がり、陣を虚空に描こうとした途中で手を止めた。

「…ああん？」

「うっ……」

重傷で殆ど動けない状態でいるフロムを眼に捉え、睨まれて思わず小さな声を上げてしまった彼女の体を掴み上げた。

「ん〜〜……」

ボロボロの状態でも悠長に考えているスパイクにフロムは嫌悪した。

「おい嬢ちゃん。ちょっと楽しいことしようやぁ……！」

スパイクは数秒考えた後、残忍な目をしてフロムをクロノスのいるところへ連れて行こうとした。しかし、後ろから誰かに攻撃され、倒れそうになった。

「行かせるか…」

スパイクの真後ろから攻撃を仕掛けたのは一番近くにいたフロランだった。スパイクは鬱陶しく思って陣を描き、爆炎を浴びせた。

「…鳥野郎のくせして邪魔すんじゃねえ！！」

「あっ……がっ……」

満身創痍の状態で強烈な一撃を加えられ、とうとう倒れた。動かない様子を見たスパイクが笑い声を上げてクロノスのところへ向かった。

「おいワン公！！いや、ソ（・）ロ（・）！！こいつを見なぁ…！」

相手を挑発する声でクロノス、ではなくソロの名を言った。その名を聞いたクロノスが叫びを上げる赤い狼を飛ばす技、Sウルフを飛ばした。

「テメエ、今頃になって俺の名呼びやがって……」

「はあ？テメエに言ってねえよ！テメエはクロノス、ソロじゃあねえ。テメエの偽名はあの人格に持ってかれたんだよバーカ！！ヒャハハ！」

「嗚呼！！？ざけんなよテメエ！！」

「ソロォ、なんかスパイクが重要なこと言ってるけど？」
「はあ！？後にしろ！」

一方、ソロはスパイクの言葉を全く耳に入れずにブリッツをＳ（スクリーム）ウルフでタコ殴りにしていた。殆ど聞く耳持たず、である。ソロの様子を見てダーインがボソッと呟いた。

「君のパートナー…スパイクに捕まってるけど？」
「後に！……おい、今なんて言った？」
「だから、君のパートナーが、スパイクに捕まってるけど？」
「……！！」

ダーインの言葉を聞いたソロが急いで石の杯まで行き、魂を通して現実を観とおした。

「フロム！……野郎…！」

「もっしもーし！ソロちゃ～ん？俺様は現在見ての通りテメエの彼女を手に持ってま～す！これで何時でも殺すことが出来るし身代わりにもできまーす！さあそこでテメエどうする？ど～するよ～！？」

おふざけ全開の声を発して思念の神殿にいるソロに現実の状況を見せさせた。クロノスは己に向かって話しかけず、内部にいるもう一つの人格に話しかけているスパイクにイライラして大鉈を右手に握りしめた。

「俺に向かって話せよ！」

「ワン公は黙ってろや！！おーい！彼女を助けてほしいか～？もし助けてほしいんならクロノスのこれから起こす強行を止めてみなあ！！ヒヤッハハハ！！」

思念の神殿の杯から現実の様子を見ているダーインは横にいるソロをチラッと見てすぐ杯にある魂に向いた。

「強行…だと？」

ソロにはイマイチ理解できなかった。しかし、クロノスがこれからする行動ですぐに理解できた。

「ちっ、女のイーブイが邪魔だな…おんなぁ……悪く思うなよ？」

「あっ……」

フロムの顔から血の気が引いた。クロノスは大鉈を構え、フロムごとスパイクを斬ろうとしていた。

「何だと…？やめろ！」

クロノスがフロムごと斬ろうとするのを見て阻止しようと声を張り上げるが、彼には届かなかった。クロノスは大鉈を構えたまま、彼女に迫る。フロムに危機が１つ迫っていたが、もう１つ危機が迫った。

「貴様ら…全員…！」
「もう1人来やがった！」

ボロボロになったダークライが現れ、冷凍ビームをクロノスとスパイクに放とうとしていた。フロムごとスパイクに攻撃を加えようとする者が2人現れ、ソロさらに焦りを感じ始めた。

「…やめろ……」

（やめろよ…そいつはオレを導いてくれた人なんだ…やめろ…やめてくれ……）

「ヒャハハハ！！さあ嬢ちゃんどうするよ！！このままじゃ死ぬぞお？？」

（やめろ…やめろ……！）

「あんた達…」
「俺の目的のためだ。死んでもらうぞ……」
「お前は邪魔な奴の1人だ……！ここで死ね…」

次々と彼女に死の宣告が浴びせられていく中、ソロは目の前に映るモノを見ていることしかできなかった。

（やめろ…その手を下ろせよ！当てようとするな！！）

自分の中で、鼓動が早くなるのを感じた。心で言葉を発する度に焦りが強くなり、鼓動が早くなる。

「冷凍…」

無慈悲にダークライは手をスパイクとフロムに翳し、冷凍ビームの発射準備をした。

（やめろ、殺すな！やめろォ！！）

鼓動がさらに早くなる。焦りと失う恐怖と湧き上がる僅かな怒りが全身を巡った。

「死ね、おんな…！テメエがいると…邪魔なんだよおお！！」

じれったさにイライラしたクロノスが大鉈を振り上げた。それを見たスパイクがフロムを前に突き出して盾にした。

「ゲームオーバー…だな！ヒャーハハハハ！！ウイヤーーーーハハハハハハハ！！悔しみ、泣き叫びなぁ！！ソーロちゃーーーーん！！」

スパイクの言葉を最後に、２つの死の宣告が迫った。クロノスが大鉈を振り下ろし、ダークライが冷凍ビームを放とうとした。だが、２つの攻撃が迫るより前にクロノスに異変が起きた。

「ぐ……な、何だこの感覚…？」

（殺すな…）

クロノスが頭を押さえて膝を付き、体を震わせた。思念の神殿ではソロが魂を掴んで呟いていた。

「あぁ？」

突然の異変にスパイクが首を傾けた。フロムは何が起きているのか理解できず、クロノスを凝視している。

「うご…ごが……誰だ…俺の頭に言葉をぶつけてくる奴は！！」

（テメエ、フロムを殺そうとするんじゃねえよ……！）

「クロノスの欠格品…中々やるじゃねえか。」

「……」

ブリッツは今起きている事に興味深そうに凝視して、ソロの隣にいるダーインは黙って彼を見ていた。

「…これは、まさかのまさかか！？」

スパイクはクロノスの身に起きていることに期待し、手を震わせていた。

「テメエ…俺の別人格か！！」

（ようやく声が届いたか。ああ、そうだよ！クロノス…テメエは表に出てくるな…！テメエがいると、あいつが死ぬだろうが！それに…）

「テメエらもだ！！」

『！？』

クロノスが突然、ドスの無い純粋な怒りの声を発し、左手をグシャリと握りしめてふらふらと立ち上がった。

「黙って見てればスパイクはギルドのやつに手を出し、ダークライはオレ達全員を殺そうとしやがって！」
「ソ、ロ？ソロ…なの？」
何時も聞いたことのある口調、発声の仕方にソロを思わせたフロム。そう、今の人格はクロノスではなく、ソロである。
「クソ野郎が！！邪魔すんじゃねえ！！」
ところが、ソロの干渉をクロノスが拒絶しようと赤と黒のオーラを一気に体中から発した。思念の神殿にいるソロは魂から溢れてきたオーラに魂から手を離しそうになるが、力を強めてさらに強く干渉をした。その際、ソロの体中から蒼いオーラが湧き出した。
「邪魔なのはテメエだ！！オレの体を…さっさと返しやがれ！！」
ソロの人格となったクロノスが左手をさらに強く握り、体中から発していた赤と黒のオーラが蒼いオーラに変わった。
「おお…！おおおおおおお！！！」
この蒼いオーラを見たスパイクが歓喜し、全身を震わせた。その時に用が無くなったフロムを投げ捨て、陣を描いた。その陣を通して今のクロノスの体を見た。
「間違いねえ…蒼だ……再生の青だ…生命の青だ…回帰の青だ！！不完全だが目覚めやがった！！やっぱり、こいつが持ってやがったか…『二対の青』を！！」

興奮絶頂のスパイクはひたすら歓声を上げ、観察をしてた。しかし穏便に観察などできる訳がなかった。

「冷凍…」

「ド三流野郎が研究の邪魔すんじゃねえええ！！」

蒼いオーラを出しているクロノスにダークライが冷凍ビームを放とうとした。その瞬間を見たスパイクがダークライを殴りつけ、取り押さえた。

「クロノス…テメエは、神殿で寝てろォ！！」

各所で混乱が起きている中、ソロが押し負けているクロノスに向かって叫ぶと、クロノスの体がガラス片のように砕け散り、リオルの体が現れたと同時に蒼いオーラが空間内に広がった。

（クソォ…ソロォォォォ！！覚えてろテメエエエエエエ！！）

表（現実）から裏、意識空間に戻されそうになったクロノスが怒声を上げ、意識空間へと飛ばされていった。

「おお…蒼が、蒼が広がっていくぞおおおお！！」

その頃、現実、異形の空間の中では蒼いオーラが空間の奥、奥へと広がっていた。蒼く染まっていった所はヒビが入り、白い光りが差し込んできていた。

「わ…私の空間が壊れる？！」

ヒビが各所に入る度に白い光りが差し込み、足場も脆くなってきた。

この蒼いオーラを出している張本人、リオルの体に人格を入れてるソロは自分で何をしているのか分からずにいた。ヒビは次第に大きくなり、ついには空間内全てにヒビが入った。そして、次の瞬間……

空間内全てが真っ白に染まった。

「う、ぅぅ…」

呻き声を上げながら、ソロは起き上がった。眩しい光りはすでになくなっていて、何時の間にか崩壊したギルドの食堂にいた。真上を見上げると夜空が見え、月が光りを照らし、星々が輝いていた。が自分以外にもギルドの一員、全員が倒れこんでいた。勿論、フロムもいる。だが…

「スパイクとダークライが、いない…」

ソロがギルドにいた頃、カミーユはある洞窟に来ていた。今、彼の目の前には3人の人影がいた。

「ねえ、その話しって本当？」

「ああ、本当だ。この世界は何かがおかしい…それに、俺が知るギルドの親方はカミーユなんて名乗っていなかった。お前の名はプクリン、種族名そのままのだったはずだ。」

「それに肝心の彼らがいない。さらに起きている事も知らないことばかりだ。世界の形はワタシの知るものと全く同じだというにだ。」

「わたしは世界については来たことがないので詳しくは知らないのですが…この世界にある2人組の探検隊、『エヴァンとロイ』がいないんです。」

「エヴァンとロイ？」

「知らないか？」

「ごめんね。僕のギルドにその2人はいないんだ。」

「そうか……いずれにしても、調べる必要がありそうだな。」

俺の知る世界と、何がおかしいのかを…何故、エヴァンどころか、ロイもいないのか……

次章へ続く

第九話：蒼が目覚める時　世界の影（後書き）

はい、第三章終結です。

ソロ「なんか、一気に謎増えたな。」

うん、増えたね。

フロム「これから先どうなるんだろう…」

辛いことがすごい待ってます。おっと、そろそろ時間だな。では次回予告！

次回予告

ファル「よー！読者諸君！大怪盗ルパン・ザ・ファルだ！！え、何で俺がいるかって？それは次回俺が主役だからだ！」

ザグ「嘘じゃないからな。」

キリマル「嘘ではないぞ。」

ファル「俺達はまた探検（盗み）をしている最中だった。なんか臭そうな馬鹿トリオに出くわしてな！ちょっとズバーっと遊んでったぜ。その帰り道にな、なーんか強そうなジュプトルに出くわしたんだよな。「お前は誰だ？」って言われたもんで名乗ったら「そうじゃない。お前は何者だ？」って言われたのよ。これどう思う？つーわけで次回は俺の物語だ。見逃すなよ～！」

ルッパ～ン♪ザ・ファル！！

ドカーン♪

ｃｈａｐｔｅｒ４：ファル一行と謎のジュプトル

気づいているかどうかは分かりませんが、ＧワイバーンとＥグラトニーは非公開となっている作品「ｆｅｎｒｉｒ　ラグナロクと魔界の破壊者」の主人公、ソルが使っていた技です。それをクロノスが使っている。これ、どういうことかわかりますか？

第零話：最強の刃　ブラッドサイズ（前書き）

刃が照らす光は私に真っ赤な血を見せるだけ……

語り：？？？

第零話：最強の刃　ブラッドサイズ

何処の洞窟で不気味な笑いをするダークライ、スパイクは指を退屈気味に動かしてある者の帰りを待っていた。

「スパイク様。ブラッドサイズ、ただいま戻りました。」

彼の待っていたある者とは今、目の前にいる白い体毛に鎌のような形をした角を生やしたポケモン、わざわいポケモンのアブソルである。自らを血の鎌（ブラッドサイズ）と名乗ったアブソルの声は静かであまり響く声量ではなく、まだ大人に成り切れない若い少年の声であった。眼は刃の切っ先のように鋭く、顔立ちがキリッと整っており、容姿も全体的にかなり良い。俗に言う「理想のイケメン」という存在である。いや、正確には『裏さえ無ければ理想のイケメン』である。

「お～おかえり～。刃化（ブラッド）の具合良かったぜー？さすがは俺様が一番手がけた半悪魔のリーダー格〝デーモン〟の一角だ。」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。」

「いやーすげえよ？テメエあのエンテイを「たった一撃の斬撃」で仕留めるんだからよ！ま、俺様もできるけど。」

「スパイク様、伝説の存在とはあれほどにまで脆いのでしょうか？あまりに弱くて殺せませんでした。」

「あ？殺さなかったの？何でだー？」

スパイクが馬鹿にするような声で言うとブラッドサイズは失望で満たされジトっとした眼をする。スパイクはその表情を見ると「同感だ。」とでも言うように肯いた。

「…メッチャ落胆したってことか。よし、許す。」

「申し訳ございません。この次は必ず命の糸を切ります。」
「あ～…ワン公以外の連中にメッチャ落胆したらそいつはほっといていいぞー。」

会話の最中ブラッドサイズは伝説の存在に期待していたようだが、していたが故に期待を裏切られたことに酷く落胆、失望していた。そして落胆の様子っぷりが先程の会話にまだ出ていた。

「スパイク様～！ダークライ一味の1人をぶっ倒しました～！」
「あーお疲れエンヴィー。」

会話中のブラッドサイズを蹴り飛ばして陽気な女性の声を出す一匹のウサギのようなポケモンが割り込んできた。長く大きい耳にグラマラスで人間のような体格をしたうさぎポケモンのミミロップである。嫉妬（エンヴィー）とスパイクに呼ばれた彼女は彼に子犬のように近寄り、抱きついていた。この時に見えたのだが、彼女の両腕両足は濃い灰色と赤色で染まっていた。以前にソロと対峙したあのストライク二匹組と特徴が酷似している。一方、フルパワーで蹴り飛ばされたブラッドサイズはまだ失望に満ちた眼をしていた。蹴られても別に気にしていないようだ。

「あーらブラッドサイズ、最強のあんたが何でそんな所で倒れてるのかしらー？」
「エンヴィー…何か甘い食べ物無いか……？」
「ぐぎぎぎぎぎ…またも視野に入ってないなんて……あんたにくれてやる物なんか無いわよ！！あ、スパイク様にはしっかりとありますよ！」
「あーそう。じゃあ貰うぜえ～キヒヒ！」

エンヴィーが手を後ろに回して1つの木の実を差し出した。ピンク

色で果物の桃に似た〝モモンの実〟と呼ばれる木の実で、非常に甘い味と解毒効果があるのが特徴的である。スパイクがモモンの実を1つ取るとそのまま口に運んだ。口があるかどうかは見た感じだと分からないのだが…

「ごちそうさん！」

「満足できて頂けて嬉しいです！あら？ブラッドサイズ、あんたはいらないのー？」

エンヴィーはスパイクにモモンの実を差し出した後にブラッドサイズへもう1つちらつかせた。先程までの行動で分かると思うのだが、彼女はブラッドサイズを過剰にまで嫌悪しており、さらにスパイクへ近づけないようにしている。そんな概念が行動に反映されており、今のようなことになっている。

「あれ～いらないんだねえ？じゃあ頂きまーす。」

欲している物を目の前で食べる。これも彼女のブラッドサイズへの嫌がらせの1つだ。桃色の果実はエンヴィーの手から離れ、彼女の口の中に、

「では頂く。」

入らなかった。エンヴィーの反応できない速度でブラッドサイズはモモンの実を奪い取り、すでに口の中へ入れて味わっていた。エンヴィーは沸き上がる怒りで体をわなわなと震わせた。

「ブ…ブラッドサイズゥ……あんたいい度胸してるじゃない？」

「貴様がいらないのか？と言ったのだろ。私はさっき欲しいから言葉に従ってあの実を貴様から取っただけだ。」

「『受け取った』はせめて付けるべきなんじゃない！？」
「起こした行動を有りのまま言葉で表しただけだが…？」
「うがあああああ！！マジでムカツク！！あんたはここでぶっ殺す！！」

ブラッドサイズの直球すぎる言葉にエンヴィーは激昂して分身体を30人ほど出現させながら彼に突っ込んだ。そんな彼女の様子を見てスパイクは腹を抱えてゲラゲラ笑っていた。無謀。スパイクの目には彼女の強さはそう見えていた。

「これだけの暗黒分身の攻撃に耐えられるからしら！？炎のパンチ！！」

炎を宿らせたパンチの嵐がブラッドサイズに迫った。普通、これだけの数を見たら腰を抜かしたくもなる。しかし、ブラッドサイズは興味無さそうに眼を瞑り、そっと呟いた。

「刃化（ブラッドサイズ）…」

言葉を発したと同時に鎌のような角が白銀に染まり、前足と後ろ足が濃い灰色と赤色に染まった。ブラッドサイズもあのストライクと同じようである。エンヴィーはブラッドサイズの能力を初めて見たのか、または威圧されたのか、一瞬動揺を見せた。そしてその隙を見逃すほどブラッドサイズは優しくない。

「刃の巨壁。」

角を真下へ真っ直ぐ振り下ろすと無数の刀の刃が床から出現し、球体上の刃の壁を造った。刃の有効範囲にいたエンヴィーの分身は全身を無残に切り刻まれ、煙のように消えていった。本体は左腕に刃

が突き刺さっており、痛みを堪えるように呻いていた。

「エンヴィー、テメエじゃブラッドサイズにはぜってえ勝てねえからー、諦めろ♪」

無様な姿でいる彼女をスパイクはまだ笑いながら腹を抱えつつ言った。そんな言葉を叩きつけられたエンヴィーは絶望で顔を強張らせた。

「ふぅ……では、スパイク様。私はファルを殺しに行きます。」

「おう。おい、そいつは絶対殺せよ？ｎａｋａｍａの約束だからな？」

「了解しました……」

ブラッドサイズは息を吸って刃化（ブラッド）を解くと、スパイクと短い会話をしてその場を後にした。左腕を押さえてブラッドサイズの後ろを見ていたエンヴィーは彼をまるで化け物と言うかのように凝視していた。その彼女の隣にスパイクが近寄り、肩を叩いた。

「テメエも半悪魔のリーダー格デーモンだが、あいつと一緒じゃねえってことを認識しとけ。俺様も正直あいつは強くし過ぎたと大好評反省中だ。ヒャハハハ！！」

「血の鎌（ブラッドサイズ）……あんた…何者なのよ？」

呆然としているエンヴィーにスパイクが嫌らしい眼で遠くにいるブラッドサイズを見ながら言った。

「あ、エンヴィーいい事教えてやるよお……ブラッドサイズの弱点についてだ……」

「え…？そ、それはなんですか？」

「それはなあ……あいつは温もりを知らないでそれに飢えてるってことだぁ……」

（勝手に野郎に干渉して死になメス豚ァ♪俺様がブラッドサイズを殺してほしいってテメエが勝手に思い込んで野郎に殺されやがれや！！）

ｎａｋａｍａとはなんだ？

家族とはなんだ？

友達とはなんだ？

愛とはなんだ？

絆とはなんだ？

私には解らない…解らないのだ……誰か…この私に教えてくれ……

……

これらを全て合わせて何というのだ？

第零話：最強の刃　ブラッドサイズ（後書き）

新たにアブソルのブラッドサイズ、ミミロップのエンヴィーが登場しました。

ブラッドサイズ「初めまして…」
エンヴィー「こんにちわ～！」

エンヴィーはほっといて…

エンヴィー「おい！！」

ブラッドサイズは悪役の中で一番気に入っているキャラです。彼はこれから大きく心が変化しますからね。

ブラッドサイズ「その時まで私は解らないままでいるのか？」

うん、苦しいだろうけど耐えろ。それと今回、あのストライクの正体と思える個体「デーモン」が明かされました。というか、何か外伝話となってしまいましたが、次回からは予定通りファルが主役として動きます。シリアスとの差が激しい回になりそうですが、付き合ってくれる方、どうか読んでください！

第一話：日常風景と終わり（前書き）

ルパ～ン♪ヘイ！今日は何を盗む（ゲット）に行くかな？

語り：ルパン・ザ・ファル

第一話：日常風景と終わり

「大怪盗」誰もが一度は必ずと言っても耳にするだろう。それとは別に珍怪盗というのも聞くだろう。だがこれはどうだろうか？『大珍怪盗』中々聞かないであろう。いや、それ以前にその語句さえ無いはずだ。だが世の中にはそんな大怪盗、珍怪盗も存在してしまうものなのだ。

「待てー！この盗人ー！！」

「やーいやーい！何でもかんでもごめんなさい、盗んでしまってごめんなさい～だ！」

その大と珍の付いた怪盗が彼…ヒコザルの少年、その名をルパン・ザ・ファルである。アホらしい言動に飄々とした性格、底なしに明るいハートの持ち主だが、非常に腕が立ち、どんな状況下もすぐに打開してしまうとんでもない頭脳を持ち合わせている。そんな男であるのに大怪盗とは何の冗談であろうか？ちなみに彼には相方と呼べる二人が常にいる。

「おー来た来た。今日も客いっぱいだな。」

キモリの少年、ザグ。

「おーいザグ！後ろから来てる攻撃の迎撃頼んだぞ！」

「やれやれ…世話の焼ける怪盗さんだ、な！」

面倒臭そうに呟いて彼は両手から緑色のエネルギー玉を発生させて小さく圧縮し、連続で飛ばしてファルに唸りを上げて迫る遠距離型の技全てを相殺した。ザグは遠距離技の命中率に優れ、主に支援役

になっている。しかし単独でも彼は強いため、時々戦線に踏み入れて支援に回らない時もある。
ザグの援護によって直撃を避けたファルがもう一人の相方に向かって言った。

「キリマル！後は頼んだ！」
「承知した…」

渋い声の掛かったワニノコの少年、キリマル。眼前いっぱいに広がる追手を前にしても怯まず、腰を低く落として居合い斬りをするような構えを取った。相手の手が己の体にまで届く距離になった瞬間、右腕を連続で斬るように振った。

「斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬！！」

彼の右手には氷の刃が何時の間にか握られており、追手は一人残らず刃の餌食になった。……餌食になった箇所は肉体ではなく、主に体毛、外殻などであったが。

「ああ！俺の毛が！？」「あたしの殻がぁ！」「うぎゃあああああ！見ないでくれーーーー！！」「ちくしょう！こんな姿嫁に見せたくねえ！」
「…またつまらぬものを斬ってしまった……御免！」

謝罪の言葉を入れて退却をし、ファルとザグの後を追うキリマル。追ってきていた連中は戦意喪失し、地面に崩れていた。キリマルの役目は追ってきた敵を排除（プライド殺し）すること、障害物の排除、敵陣の強行突破である。
それはともかくとして、彼らにとってこの行いと反応は日常茶飯事なのである。しかし、まだもう1つある。それはファル一行を悩ま

し続ける一人の刑事である。

「ルパ～ン！逮捕だーーー！！」

オヤジ刑事のハガネール、コガネスケ。フルネームは黄金沢騎助。コガネスケとは周囲から呼ばれる略名である。このオヤジの執念にはファルも舌を巻かされるばかりで…障害物（建物）など平気で破壊し、種族の型破りな素早さを備え、圧倒的な戦闘能力を有する。彼に立ち塞がった数々の犯罪者は巨体から繰り出される重撃に崩れ落ちた。ファル一行を除いては……

「やっぱり来やがった！とっつぁんＫＹ！！」

彼が来た時は飛ぶように逃走をするファル一行。ファル自身、コガネスケのような男は苦手なのである。何故ならしつこいから。諦めてくれないから。そして異様に速いからである。素早さの高いガブリアスをも抜かしてしまうほどなのである。

そんなこんなでルパン・ザ・ファルとコガネスケは常に追いかけっこをしているのである。しかし…この流れは今日をもって断たれることとなる。

ファルがどういう男か知る者はまだ多くはいないだろう。

彼は大きな事が起きると必ずそれに顔を突っ込むのだ。

それには何かしらの因果が絡むのだから。

そしてファルはどれほど事態が重いのか、見ただけでその事の重大

さを理解できる。
彼は『知り過ぎている』のだから……

だから彼は今回も顔を突っ込む事となる。
世界の影へと誘われるかのように。

（……気になる…）

一方、ブラッドサイズは今現在、トレジャータウンを散策中だった。
何でも住民からヒコザルとキモリ、ワニノコの三組を見かけたのだから…である。ところで先程のブラッドサイズの心の言動は一体何か？正体は周囲からの視線である。

「ヒソヒソ…ヒソヒソ……」

（おい見ろよあいつ。）（ああ、随分といい姿してやがるなぁ…）（あんなカッコイイ人いたかな？）（旅人なんじゃないの？それにしても素敵ねえ…）

容姿がかなり良いせいか、相当目立っていた。ブラッドサイズは基本無関心でいるのだが、こういった視線には完全に無視できないようだ。

（こういった時は早く去るに限る…）

「イテッ…」

ウンザリした気持ちで十字路を通った時、瓦礫を運んでいる赤いバンダナを首に巻いたリオルにぶつかった。

「…すまない。前を見ていなかった。」

そのリオルとは紛れもないソロであった。彼の顔には砂ぼこりが付着しており、何かの作業をしていたかのようなものが感じられる。ブラッドサイズは頭を下げて謝罪をした。ソロの方はというとイラついた顔で彼にこちらも謝った。

「こっちこそ悪かったな。急がしくて気づけなかった。」

「あぁ、クソ面倒くせえ…」そうぶつくさ言って瓦礫を担ぎ直し、十字路を後にしていった。

「……私は急いで奴を見つけねば…」

己の使命を果たすために彼も十字路を後にした。そのブラッドサイズの姿を一匹の緑色のトカゲのようなポケモンが見ていた。

「……気づかれたか。」

後ろを向くと同時に両腕から緑色に光る刃を生み出し、ガードの態勢をとった。後ろには十字路を後にしたはずのブラッドサイズが、そのポケモンに鈍い光を放つ数多の刃を向けていた。

第一話：日常風景と終わり（後書き）

ファル「ダイジェスト？」

というよりも日常だね。

ザグ「ていうかブラッドサイズって奴、怖いな。一瞬で背後にいるなんて。」

だって半悪魔のリーダー格、デーモンの一角だよ？最強だよ？

キリマル「にしてもあれは恐ろしいと思うが…」

そう怖がらない！物語進めにくいでしょ！

ブラッドサイズ「次は貴様の…」

ごめんなさいごめんなさい…！

ブラッドサイズ「冗談だ。」

そ、そうすか…

第二話：歯車の動き（前書き）

動き出した歯車は易々とは止まらないよ。

語り：ダーイン

第二話：歯車の動き

逃走において彼に勝てる者は絶対と言っていいほどいない。

「待て～い！ルパ～ン！！」

「あぶねぇ！！」

どれだけ瓦礫を飛ばされようが避けられ、

「逃がすかぁぁぁぁ！！」

「スピード上げて来やがったあああああ！？ダッシュダーッシュ！！」

どれだけ必死こいて追いかけようともすぐに距離を離され、

「行き止まり！？」

「観念しろ～！！」

行き止まりがあっても…

「なんつって☆」

「か、壁が回転したあ！？ぶが！」

必ず先に手を打たれ、逃げられてしまう。

「あばよとっつあ～ん！あれ？ちょ、標高たかぁぁぁぁぁぁ……」

間抜けな声を出されて、だ。

「お前らなぁ…いくら俺が体丈夫だからって高さ配慮しろよ！８００メートルなんて高さから落ちたら無事で済むわけねえだろ！」

あの後から数時間後の事。ある森でファルは全身包帯でミイラ状態になっていた。標高８００メートル、はっきりと分かるだろうが、十分に死ねる高さである。しかし、何だかんだいって無事なのがこの大（珍）怪盗だ。

「しょうがねえだろ。逃走ルートあれしか無かったんだからよ。」

そう言ったのはザグ。回転する壁を仕掛けたのは彼なのである。ちなみに、あの壁は一度回転したら二度と回転しないようになっていた。そしてかなり強固な材質で出来ており、通常の力、技ではビクともしない。破壊しようならそれまで時間稼ぎをしてしまおうという根端だ。尤も、誰もあの高さからは飛び降りたくないと思うが…

「この男は多少乱雑に扱っても平気だろう。いくら死にかけようがすぐ復活するのだからな。」
「おい！「多少」の度合を超えてるだろ！”はがね”タイプならまだしも俺は”ほのお”タイプ一色だからな！？」

もう一人の相方、キリマルは澄ました顔でさらっと酷い事を発言した。相方二人兼、二匹はファルに対してデリカシーがゼロである。というよりもかなり荒く扱っても必ず生存していのだから自然とそう扱うようになっているのだ。

「あーもうひでえ相方を持ったよ俺は！ま、お宝は盗れたんだし…よしとするか。」
「だな。」
「終わり良ければ全て良し、だ。」

それでも結局最後は一言で丸く収めてしまう。いい加減な一行であるが、無駄な協調性が高いのも彼らの特徴なのだ。
盗ることに成功した品を再度確認しようとファルはショルダーバッグから取り出そうと手を突っ込んだ。

「ん？あ、あれ？」
『どうした？』

ファルの反応に相方二人は顔を傾げ、彼に尋ねる。するとファルはこう言った。

「無い。」
『…は？』
「……霊魂の石版が無い！」

『はあああああああああああああああああああ！？』

一行の声が木霊した。

「アニキィ。この白い石版、ホント何でしょうかねえ？」

「ククク…さあな。だがもの凄いお宝というのは見ただけで分かるだろう？」

「へへ！とにかく高く売れそうですね！」

ファルのいる場所とは少し離れた所にスカタンク、ズバット、ドガースの三組がいた。覚えている者はいるだろうか？彼らは以前ソロとフロムにタコ殴りに遭った残念で非弱でしょうがない探検隊、ドクローズ2である。

「ところでアニキ。ずっと前から気になっていたんですが…」

仲間の一人、ズバットがスカタンクに話を持ち掛けた。

「ククク、何だ？」

「俺達って結成してまだ間もないですよね？しかも何で最初から『2』が付いてるんですか？」

「あ、それって俺も気になりましたアニキ！」

奇妙な話である。実は彼ら、チームを結成してまだそれほど歳月が経っていなく、これといった「2」を付けるような出来事が彼らには起きていなかった。だが何よりも奇妙な事は『結成日の初めから2が付いている』のだ。相棒達の言葉を聞いてスカタンクは疑問符を浮かべた。

「んん？それはそうだな。俺様は何故か結成した日から2を付けていたな。何故なんだ？」

「え、アニキ意図的に付けたんじゃないんですか？」

「付けるわけがないだろ。」

ドガースの一言にスカタンクが牙を向けた。威嚇されたドガースは一歩後退りをした。まあいい…とスカタンクはカッコつけて呟き、何処へ歩み出した。

「うふふ…霊魂の石版、見いつけた♪」

何処へと向かっているドクローズの行方を、デーモンの一人であるミミロップ、エンヴィーが目に映らせていた。しかし、その彼女にとんだ邪魔が入った。

「あの石版を奪う気か？貴様には渡さんぞ。」

「あらぁ…？」

後ろから何やら声が聞こえた。振り向くが木々しか見えない。幻聴かとエンヴィーは一瞬思ったが、目を凝らして中央の木々を見た。

「あーら、黒の司（くろつかさ）が何のよおかしらぁ……？」

残忍な響きのする妖気な声を出し、足元にあった木の枝を蹴りで飛ばした。木の枝は中心の木々へ飛んでいき、途中で木々に偽装された壁のような物を貫いていった。

「あはは！影のくせして何て美術品置いてるのかしら？」

「黙れ雌豚（めすぶた）……」

木々の影からクロノス、スパイクと対峙したあのダークライがゆらりと現れた。一方、雌豚と言われたエンヴィーは目を限界まで見開くと突然声を荒げ、性格が豹変した。

「テメエのような糞中年があたしを罵（ば）とるなんざふざけんじゃねえよ！！悲鳴上げさせてぶち殺すぞ嗚呼？！」

「勝手に吠えていろ雌豚……床に伏せろ。頭（こうべ）を差し出せ。惨めで汚いその顔を飛ばしてくれる……」

「ジュプトル……貴様、一般人ではないな。」

また別の場……ギルド近くの十字路から離れた海岸の磯にあのトカゲのようなポケモン、種族の名ジュプトルをそのままに呼ばれたジュプトルと、ブラッドサイズが対峙をしていた。

「誤解をするな。ただの一般人だと言っているだろ？」
「そうか。ならば何故飛刃の死角に隠したもう一枚の刃を弾けた？」

「行け。」
「…！」

キィン！カァン！

振り向いたあの時、ジュプトルは腕から生やしたあの刃で飛ばされてきた刃を弾いていた。しかも、死角に隠されていたもう一枚の刃も弾いていたのである。

「私は初めから貴様を刺すつもりであれを飛ばした。が…貴様は隠された刃を見抜いて弾いた。これで一般人と呼ばなくて何と呼べばいい？」
「…なるほど。どうやらお見通しということか。」

種族の名をそのままに呼ばれているジュプトルは腕から生えている緑色の刃で対象を切り裂く“くさタイプ”の技”リーフブレード”を向けてこう言った。

「お見通しついでに教えてくれないか？お前のその異様な気配……『まるで死人のようだな。生きてるように思えないぞ？』」

「……消す。」

（正体が知られた以上、止むをえん……）

ジュプトルの言葉を聞いたブラッドサイズが刃化（ブラゼトド）を発動した。

「……何だ？このざわめきは……」

各所で対峙が始まった頃、ソロが十字路にある水飲み場の近くで水の波紋を見てボーッとしていた。

【とうとう動き出したようだね。】

「…！この声、ダーインか？」

【君の波導を媒介としてテレパシーを使ってる。そうそう驚く事じゃないでしょ？それよりも……動き出したよ。】

「動き出したって何が？」

次々とダーインから送られるテレパシーの内容に困惑しながら聞き返し、答えを待つ。そして彼はこう言った。

【歯車がね……】

第二話：歯車の動き（後書き）

各所で対立が始まりました。

ソロ「何か、予想以上に事が大きくなってないか？」

フロム「というかどんどん大きくなってるよこれ！？」

言っておくけどまだまだ大きくなるからね？

ファル「ところで俺達の活躍少なくないか？」

あ～…次回で出すよ出す！

キリマル＆ザグ「本当かよ……」

第三話：追う者　追われる者（前書き）

あの男を何としてでも捕まえる……そしてお尋ね者は全て捕まえる。
それがワシの正義！！

語り：黄金沢騎助　またの名コガネスケ

第三話：追う者　追われる者

黒の森と呼ばれるダンジョンの近くに一般人には分かり辛い小さな崖がある。そこは探検隊のギルドのように1つのギルドがあった。しかし、そのギルドは探検隊のためのものではなく、お尋ね者を捕まえるための、保安官と刑事のためのギルドとなっている。

「観念しろお！！2つ星ランクのお尋ね者、メタモンのライン！！」
「くっ…！」

その保安官と刑事のためのギルドにあのオヤジ刑事は務めていた。

「チッ、へんし…」
「アイアンテール！！」

オヤジ刑事はその巨体からは想像できない速さで鋼の尻尾を振り下ろした。紫色でゲル状のポケモン、”へんしんポケモン”メタモンは技が間に合うより早く尻尾の餌食になった。

「ライン！！貴様を強盗、殺人未遂の罪で逮捕する！！」
「く、くっそぉ！！」

そう…崖のように聳え立つ巨体に鋼の鎧を包み込んだ鉄蛇、黄金沢騎助またの名コガネスケとは彼である！！

「ギルド“治安機構”、コガネスケ警部。ラインを逮捕しました。」
「おお、ご苦労だコガネスケ警部。」

ポケダン治安機構。黒の森の崖の下にあるギルドの名がこれである。そのギルド内の2階にコガネスケは目の前のいる年配の上司であるポケモンと報告を行っていた。年配のポケモンの姿は人のようで筋骨隆々と体格をしており、4つの腕が生えている。

「君は少々荒っぽいところがあるが、戦闘力、逮捕術が素晴らしく評価されている。よって、近頃昇級を考えている。」
「真でありますか！ユキヒサ殿！」

カイリキー、ユキヒサの言葉にコガネスケが身を乗り出した。ユキヒサは大きく肯いて笑みを見せた。だが…と付け加えて険しい表情を見せた。

「その昇級試験としてあるお尋ね者を逮捕してきてほしい。」
「あるお尋ね者とは…？」
「つい最近現れたばかりのアブソルだ。性別は男でまだ若く、容姿が良いとのことだ。」
「ぬぅ…イケメンとは妬ましいガキですなぁ……」
「だが、油断してはならない。彼はたった一匹で何十もの探検隊を返り討ちにしたらしい。」
「なぬう？！」

ユキヒサからの情報にコガネスケは目を丸くし、全身に悪寒が走った。

「しかもその探検隊の殆どがプラチナランク以上の手練れだ。それ

だけの実力と実績を持つ彼らが…たった一匹のアブソルにやられた。これがどういうことか分かるだろ？」
「…なるほど。そこでワシというワケでありますか。」
「君は残存しているハガネールの中で機動力と防御力が一番高く、この治安機構で一番の実力を持つ刑事だと思っている。黄金沢喜助、頼まれてくれるか？」

ユキヒサからの依頼にコガネスケは、少し間を置いてから依頼の承諾をした。ユキヒサから「頼んだぞ。」と言われるとコガネスケは一礼をして外へ向かって行った。

まさか彼まで顔を突っ込むとは思っていなかっただろう。

ブラッドサイズとファルを追っていく内に、知ってはならないことを知ってしまうことを……

「たくっ…この馬鹿珍怪盗が。」
「馬鹿は余計だ馬鹿は！」
「珍怪盗は認めるんだな…」

その一方でファル一行は霊魂の石版を落とした日から早くも三日間経ったこの日、執拗に探索をしていた。ファルにとって、霊魂の石版と呼ばれる宝は必ず必要な物であった。これまで盗ってきた宝はごく一部を除いて無くなってもいいが、あれだけは今、絶対に必要なのである。それにはある理由が携っていた。

「ファル、あの石版は絶対に必要なんだろ？早く見つけないと…」
「わーってるよ。しかもあの石版が半悪魔を生み出す原因の１つかもしれないんだからよ。」
「石版の有効範囲内にいる者の力を増幅させる代わりに平常心を少しずつ奪っていく石版……それが霊魂の石版か…」
「それはあくまでこれまでに起きた事だけどな。実のところ、本来の用途は違うのかもしれねえ。あの石版が単に扉の鍵とは思えねえし、何せ『力が増幅される』辺りが謎なんだよなあ。心を狂わすだけならまだ納得できるのによ。」

力が増幅されること…それがファルにとって不気味でならなかった。ファルが石版を盗み出す前に襲ってきた追手と彼自身もその時、やけに力が強まっていたと同時に平常心を失いかけていた。ただ、彼らの中で何故か、ファルだけは平常心を保っていられた…
それはともかく、ただ心を狂わすだけならいいものを、霊魂の石版は自身に宿るあらゆる力が増幅されるのだ。だが…ギミックの分からない辺り、非常に気になる。一体何によって力が増幅されるのか？それは何故なのか？得体の知れないモノを石版の周辺にいた者や、ファル自身も取り込んでいるのだ。何が起きるのか分からない上に危険である。だからファルは身を挺して己以外の被害を止める形で霊魂の石版を盗んだ。尤も、盗んだのにはもう１つ理由があったが。

「あれが無いと扉の向こうに行けないんだよな～…」
「底なし海の最深部にある蒼い扉か。暗号に隠された石版があの霊

魂の石版だったな。」

底なし海と呼ばれるダンジョンの最深部に丁度、霊魂の石版を埋め込む扉があるらしく、ファルはそこの謎を解き明かそうとしているのだ。彼は盗みを主に行うのだが、よく探検にも出かけたりする。しかし探検をするにも、やはりとある理由によって突き動かされていた。

「霊魂の石版…あれで開く扉の先にはあの時と同じようなモノが待ってそうなんだよな。」

とある理由…あの時…それがファルを探検へと突き動かしている原動力である。

（あんなものが世界の裏側に眠ってるなんてな……ホントにビックリしたぜ。）

「……オイオイ……マジかよ…」
「ファル…この蒼い渦って、まさか！」

キリマルとザグ、ファルは青色の鉱石から発せられる青色の洞窟で、深い大穴のそこにある『それ』を目にしてしまった。この世界の住民が、目にしてはいけないものを。

「ああそうだ。この蒼い渦の正体は……生命エネルギーの塊だ。」
「……俺達は……見てはいけないものを見てしまったな…」

「一体、誰が何のためにあんな所に生命エネルギーを集めてるんだろうな？」

ザグはあの光景を目にした記憶が呼び覚まされて、吐き気を抑え込みながら呟いた。その言葉を聞いたキリマル、ファルも気持ち悪そうな顔をした。

「分からん……だが、何者かが意図的に造ったのは明らかだ。自然にあんな所へ生命エネルギーなど集まるものか……」

「お前達吐き気押さえろよ。俺も結構辛いんだからよ。しっかし驚いたよな。まさか半悪魔発生の原因があれだなんてよ……器に入りきらないエネルギーはその器を歪めてしまうのはまさしくってワケか。」

生命エネルギーに限らず、あらゆるエネルギーは力を与えてくれるが、時には牙を向けてくる。その中で特に危険なのが、誰もが善良に思えるだろう生命エネルギーなのだ。肉体とはエネルギーの蓄積された袋であり、その中に入るエネルギーは個人差であるが限りがある。もし容量以上のエネルギーが蓄積された場合、肉体という器を歪めるか、最悪…エネルギーの核と言える魂が破裂してしまう。エネルギー系統の中で最も危険な生命エネルギーがあのような場所に蓄積されるのが、何者かによって施されたことは明らかである。あれを造ったのは神か？生ける何者かであるのか？いずれにしても、ファルの目的はただ一つ。

「まあとにかく、あの洞窟を造った奴を見つけて破壊させねえと。放置すると危ないしな。」

「危ないで済むもんなのか？体へも直接影響するだろ。」

「話している暇があるか？早く霊魂の石版を取り戻すぞ。」

遠回り気味になりながらも、ファル一行は石版の探索を続行をした…瞬間である。三人組の毒々しい配色のポケモンが白い石版を持ってこちらに向かって来ている姿を見た。その三組の毒々しい配色のポケモンとは、ズバット、ドガース、スカタンクの三人組、チーム“ドクローズ2”である。そしてあの白い石版は、ファル一行の目的の宝であった。

「「「……」」」
「ククッ…何だお前ら？」

スカタンクが固まっているファル一行の様子を見て挑発気味に尋ねた。そこで帰ってきた返答はというと…

『グッドタイミング！！！』
「なあ！？」

ドクローズ2はファルに霊魂の石版を素早く奪い取られ、ザグに近くにあったオレンの実の汁を目にかけられ、「目が、目がああああああああ！！！」（何故かズバットにも効いた）と叫びながら地面を転がり回り、キリマルに背中を蹴られて逃げられた。目の痛みから立ち直った三人は怒声を上げてファル一行を追い始めた。

「待ちやがれドロボー！！」
「この盗人がー！返しやがれーー！！」
「俺様の自慢の毛を汚しやがってーーーーー！！」

惨めな彼らをファルが横目気味に見て目を細めた。

「お前らもあんまり人のこと言えねえだろ…」

事実、彼らドクローズ2は意地悪な探検隊なので、強ち間違ってはいなかった。残念な馬鹿トリオである。

第三話：追う者　追われる者（後書き）

今回で一つ謎を明かしました。半悪魔の正体は…なんと生命エネルギーの暴走体なのです！

ファル「うひえ～恐ろしい。あいつら相手にするのキツイんだよな。」

しかし、このアイディアが思い浮かぶのには結構時間が掛かったよ。めっちゃ疲れました。

コガネスケ「ところで、ワシは前半しか出ていないのだが…」

あ、まだ先送りよ。

コガネスケ「なぬぅ！？」

残念！次回は…ついに……続く！！

ザグ＆キリマル「言えよ！！」

第四話：交差　遭遇（前書き）

この世界は、何かが狂っている……何かが……

語り：ジュプトル

第四話：交差　遭遇

「はぁ～遊んだ遊んだ。」

満足気に歩を進める大珍怪盗ことファル。あれから結局ドクローズ2は、石版が近くにあったにも関わらず、ファル一行に追いつけずに巻かれてしまった。彼らが追って来なくなったのを確認した一行は、何処へと歩いていた。しかし、行き先は既に決まっている。あの扉を開けるために、”底なし海”へと向かっているのだ。尤も、ダンジョン名が海というだけあって海を渡る手段が必要となってくるのだが、そんなことファル一行には朝飯前である。

「にしてもあいつら、よく平常心保ってられたな。霊魂の石版の悪影響を受けない奴って結構いるんじゃないのか？」

追いかけられている時、ドクローズ2の様子に違和感を感じたザグ。霊魂の石版は周囲に力を与え、平常心を少しずつ奪っていく代物のはずだが、あの様子だと平常心が欠けてる様子は殆どなかったように見えなかった。それには、石版の隠された仕組みが関係していた。その仕組みとは…

「この石版、誰かに掴まれてると力を放出しなくなるのよ。」

ファルが「驚き！」とばかりに言葉を漏らした。そう、霊魂の石版は誰かに掴まれていると力を放出しなくなるのだ。ドクローズ2は、スカタンクがこれまでずっと手にしていたからこそ平常心が保てられたのだ。ファルも逃走時に石版を素手で掴んでいたため、平常心を保っていられたのかもしれない。
ただ、彼の場合は石版を持つ前から、石版の力が放出されている時

にも平常心を保っていられた。

（何故か俺は持つ前からも平気で、他の連中は全員狂ってた……何で俺だけ何も悪影響を受けねえんだ？）

「ファル…おい、ファル。」

「……ん？何だ？」

考え過ぎていたせいだろうか、ザグに呼ばれても全く聞こえなかった。深い考え事とは珍しい。そういう目でキリマルからも見られていた。

「は、はは…」

相方達から変な眼差しで見られるとは……。

言い逃れをしようにも言葉が見つからない。苦笑でその場をはぐらかす事とした。

「ん…？」

そうした中、何かに気づいたらしいキリマルが、北の方角を向いて目を細めた。

「誰か来たな。」

ザグも何者かの気配を感じたらしく、北を見つめた。苦笑をするしかなかったファルもすぐに気配を感知し、北へ目を向けた。気配の進行はゆっくりとした速度でこちらへ向かって来ているようで、少しずつだが気配が強くなっている。

「ファル…この気配は……」
「ああ、結構の手練れだな。…敵じゃねえといいんだが。」

キリマルはファルに言いながら早くも姿勢を低くし、戦闘態勢になっていた。気配の主は相当の実力の持ち主らしく、ファル一行は警戒心を持たざるを得なかった。一般人と戦闘慣れした実力者では当然、気配が全く違う。さらに立ちの悪い事に、ファル一行が知る中でこの気配は最も強い。引き返すという手段があるが、相手はこちらの気配に気づいているだろうし、それではかえって怪しまれてしまう。その相手がもしも、自分達の正体を知る者だったら、逃げ切るのは恐らく難しいだろう。何時でも逃走ができるよう、僅かに足へ力を込めて歩いていく。

「…あいつが気配の持ち主か。」

ザグがそう呟いた時、ファル達の警戒する人物が山なりになった道から姿を現した。全身が森に溶け込むかのような緑色で染まっており、トカゲのような風貌をした、あのポケモンだ。

「ジュプトルか…余計に厄介だな。」

”もりとかげ”ポケモンのジュプトル。ファルは表情を表に出さないよう、面倒だなと心で呟いた。ジュプトルは”森蜥蜴(もりとかげ)”の名を持つだけあって、森林内では大きな驚異へと成る。
まず種族自体が持つ特徴だ。奴らは俊敏性に優れており、同時に奇襲の天才でもある。そして、奴らが特に厄介なのは、森林、山で発揮する隠密性だ。音を立てずに森の中を移動する事ができ、気配を消して木へ、木へ、飛び移る事も可能で、奇襲の真価が発揮される。それが視界の悪い森で行なわれるのだ。こちらが森に聳える木々に翻弄される中、隙を見つけて獲物を確実に仕留める。それがジュプ

トルの大きな特徴だ。

（頼むぜぇ…頼むからそのまま行ってくれよ……）

表情を表に出してはいないが、奥底では戦闘が起きないことを祈っている。今は力を放出させないように石版を手に持っているのだ。充分に動く事も戦う事もできない。そして、『あれ』を使う訳にもいかない。

確かに『あれ』を使えばすぐに決着が着くだろう。しかし、反動が凄まじく、とても連続して使える代物ではない。それに今月、ソロに突如襲撃を仕掛けたサンダーに使用したばかりなのだ。下手して使うと体が壊れるかもしれない。いや、恐らく壊れる。

「……」

思考が混雑する中、とうとうジュプトルが目の前までに迫って来た。

―来る―

一行と、一匹のトカゲが、流れる水のようにすれ違った。……よし。ファル一行は内心で小さく歓喜した。……だが…

『待て、お前達。』

背筋が凍りついた感覚が走った。待てと言ったのは当然ジュプトルであり、鋭い声を発してきた。ここはバカになるのが一番だろうと、ファルが演技を入れて答えた。

「おやあ？何でございましょうかイケメン？」

―この馬鹿が！―

この話し方をした瞬間、後ろから2つの殺気を感じたが、ガン無視した。一方ジュプトルは、白けていた。

（…こいつらは芸人なのか？）

そう思ったジュプトルは、それを忘れようと、本来の話題を持ち出す事にした。

「お前、誰だ？」

「……へ？」

予想もしてない質問が来た。訳が分からなかったが、とりあえず適当に自己紹介をした。

「あはは～！面白い事言いますねイケメン！俺はファル、しがない芸人でさあ。こちらは相方のツッコミコンビ、キモリのボケとワニノコのアホですわ。」

『誰がアホ（ボケ）だコラァ！！』

ズバァァン！！

「あら～！？」

自分だけはマトモな名前を言ったのに俺達の名前は何だよオイ？という思念を込めたWD☆T（ダブダイナミックコミ）がファルに炸裂した。メニューはザグの小形体に圧縮し、連射性と命中率に特化したオリジナル〝エナジーボール〟と、キリマルの氷の刃による一閃。結果、見事に、清々しく、吹っ飛んで木に激突した。

「あーイッテェ…ね、芸人でしょ？」

にも拘らず、彼は平然とし、こちらに痛そうな素振りをして戻ってきた。その時も白けていたジュプトルは、右手で頭を抱え、哀れむように言った。

「…お前達が苦労する奴というのは分かった。うん…」

―ヒド！―

「こんな同情嬉しくねえ。」よろしく、相方の心の叫びがシンクロした。こうしていると、ただの雑談会にしか思えなくなってしまった。ジュプトルは本来の目的が大きく反れてしまったため、訂正を付けて言い直した。

「て、自己紹介の意味ではない。お前は『何者』だ、と言っている。…相方二人にも言える事だ。」

『何者だ』。こういう質問がされる場合、大抵ロクな事に巻き込まれない。このジュプトルの言っている事は恐らく、俺達の「正体」だな。何故こんな質問を初対面でされるのか分からなかったが、どちらにしろ、ロクでもない事になりそうだ。一行を警戒力を強め、何時でも逃走、戦闘ができるよう準備をした。その時…「

「ッ…！伏せろ！」

「…！？」

キィン！

刹那、一行が伏せると同時に金属音が鳴り響いた。その数秒後に、鈍い光を放つ一枚の刃が地面に突き刺さった。警告を行なったのはジュプトルであり、腕から発生している緑刃、〝リーフブレード〟で刃を打ち落としていた。

「…またお前か、執念深いな。」

（また？）

ファルがそう疑問に思った時、木陰から一匹のアブソルが姿を現した。容姿こそ良いが、向けている殺気が凄まじく、一般人だと恐怖のあまり、力が入らなくて座り込みそうなほどの威圧感を感じる。スパイクの配下であり、半悪魔の上位種デーモンのアブソル。紛れもないブラッドサイズだ。ブラッドサイズは姿を現した瞬間、自分の周囲に刃を発生させて配置し、いきなりファルに斬りかかった。

「ヤバッ…！」

反撃に出ようとするも、石版が手をかさ張っていてタイミングが狂ってしまう。数本の刃に刺されるか、切られるか、そう思った瞬間、キリマルは氷の刃、ザグはエナジーボールを、お得意の技で弾き返した。攻撃の反動で大きく後退したブラッドサイズは、身軽な動きで態勢を立て直した。その時に一時的に構えを崩し、刃でファルを指差して殺害宣告をした。

「ルパン・ザ・ファル……貴様は、あの方にとっての邪魔者だ……消えてもらう。」

その瞬間、角が白銀の光りを発し、両腕、両足が濃い灰色と赤色で染まった。ブラッドサイズの持つ固有能力、刃化（ブラッド）だ。それを見て、

ジュプトルを除く一行が顔を強張らせた。それは当然だ。本来の姿を隠す事が可能で、理性を持ち合わせた半悪魔、デーモンを目にするのは、初めてなのだから。

「お前達、話しは後にするぞ。今はこいつを倒さないとマズイ……」

「そいつはいい提案だ。俺達でも手に余りそうな奴だしな。」

意見に同意し、口調を元に戻したファルは石版を抱えたまま戦おうとした。が、石版をザグから乱暴に取られた。

「トラップとスピード、潜在能力に優れてるお前がこれ持って戦っちゃ効率悪いだろ。俺の方はいいから奴に集中しとけ。」

至極尤もな事を言われて鼻で笑い、ブラッドサイズに向き直った。指の骨を鳴らし、悪戯少年のような笑みを浮かべてブラッドサイズに歩み出した。

「俺が勝ったらあの方とやらと目的を聞かせてもらうぜ？」

宣言をし、ショルダーバッグから複数の道具を手にして接近して行った。

「……斬り伏せる……」

第四話：交差　遭遇（後書き）

次回、ファル一行＋αとブラッドサイズが衝突！そして最後にファルの隠された力が解放される！？

ザグ「やっぱり何か力あんのね？」
キリマル「正直どうでもいいが。」
ファル「オーイ！もうちょっと関心持ってくれよ！」
ジュプトル「…何か、調子狂うな。こいつらといると。」

まあ、こんな愉快迷惑極まりない一行いないと思うしね。

では、次回に続く。

第五話：衝突！血の刃（前書き）

最近、やたらと敵が多いな。しかも今回…相手が最悪だ。

こいつに、どこまで通じるか……

語り：ファルの相方、ザグ　キリマル

第五話：衝突！血の刃

「かまいたち…」

ブラッドサイズが角を振る動作をしたが、何も起きない。今は、だ。かまいたちの動作を見たファルは、斬撃のタイミングが何時来るか、警戒をしながら技を発動させた。

「くらいな！」

口から炎を吐きながら体を回転させて突進する技、〝火炎車〟で真正面に突っ込み、飛ばされてくる刃を跳ね飛ばして攻撃を試みた。

「行くぞ…！」

ファルに続いてキリマルも氷の刃を手にし、ブラッドサイズに向かって行く。傍らに途中までジュプトルがいたが、その当人は姿を消していた。だが、どこにいるのか大体見当はついていた。

「切り裂け…」

「っと！危ねえ！」

その一方、火炎車の攻撃が失敗したファルは、ブラッドサイズと素手で近距離戦を繰り広げていた。ファルの技構成は癖が強く、トリッキーな戦法を強いられる。そのため、いざ近距離戦となると対応が難しい傾向がある。しかし、その近距離戦でも、対応はしっかりと行っている。

「雷鳴の怒り…」

ブラッドサイズが稲妻を発する黄色い刃を右足に装着させ、直接斬りかかった。

（掛かったな！）

ファルがガードの直前でポーズを取ったのを見たアブソルは、咄嗟にファルへ飛刃を飛ばし、〝雷の怒り〟という黄色い刃を、氷の刃の切っ先を向けているキリマルに向けた。

「チッ、見破られたか！」

発動直前に対近距離用の技を直前で見切られ、舌打ちをした。キリマルがブラッドサイズと剣劇を広げる中、距離を取って先程まで手にしていた道具を複数、地面に埋め込んだ。１つは、一見、何の変哲もない鉄球。もう１つは、鋭利な鏃（やじり）状の鉄の刃が、４方角に露わになっている鉄球。いずれも鉄球ではあるが、特性は違うようだ。

「お前達、久々に働いてもらうぜぇ♪」

コン！と両方の鉄球を強く叩くと、カチ…カチ…と鳴り始めた。それからして、ファルはブラッドサイズに飛ばされてくる飛刃を避けつつ、トラップを次々と仕掛けた。

「ハイドロポンプ！」

剣劇を繰り広げていたキリマルは、口から大量の流水を放出する技、〝ハイドロポンプ〟を行なった。ブラッドサイズは、その流水に対して傍らにあった一枚の刃を正面に配置、高速回転させて受け流し、

防御した。

「凍てつけ！」

直後、流水の向こう側から発せられたキリマルの”冷凍ビーム”で流水を一瞬で凍らせられた。

（氷の壁を築いて奇襲を狙う気か…）

回転をしていた刃が凍らされたのを見ながら、ブラッドサイズがそう考えた。周囲を見回せば、受け流した流水が壁のように自身を囲んでいた。相手のキリマルがハイドロポンプの直後に冷凍ビームを行なったのは、攻撃するためではなく、相手の攪乱を狙ったため。

この空間から、どちらから来る…？

左か？右か？上？下？

「…下……」

呟きを漏らしたその時、真下の地面が膨れ上がり、ジュプトルの〝リーフブレード〟が覗かせて唸りを上げ、迫った。左足を斬られそうになるが、周囲に配置させていた刃で防御、”雷鳴の怒り”で地面を撫で斬る。地面の中で金属音が響き、もう1つの〝リーフブレード〟と共にジュプトルが姿を現した。

「『二度』は効かないか…！」

「逃がさん…」

攻撃の失敗に悔み、素早く後退を行うが、ブラッドサイズが前足を

踏み鳴らし、周囲に飛刃が出現、飛ばされてきた。そこで体を無理矢理捻って避けつつ、ギリギリ避けられそうにない飛刃を〝リーフブレード〟で弾き落とす。辛くも成功したおかげで後退は成功、〝穴を掘る〟を駆使して地中に潜って距離を取った。

「…邪魔だな。」

ヒュン…と〝雷の怒り〟で氷の壁を一閃。〝雷の怒り〟を解除した時に上部分が斬撃跡に沿ってズレ始め、地面に落ちて砕けた。だがその前に、ザグは木陰から気配を消して見ていた。「攻撃するなら今だな…」とそっと呟き、トラップを仕掛け続けているファルにアイコンタクトをとって、あらゆる箇所に張り巡らされている白い何かの糸を手に持ち、実行指示を発した。

「いいぞ、やれ。」

氷の壁が砕けて音を出したその時、糸を勢いよく引っ張り、トラップを作動させた。そこで、ありとあらゆる自然物が変化を始めた。土が突然爆発し、鉄の刃が飛ばされたり、木々は幹の中段が切断されて縄が括り付けられた丸太になったって飛ばされたりと、とにかく多彩なトラップがブラッドサイズに襲い掛かった。

「…易い仕掛けを……」

爆発で舞い上がった土地の煙幕の中、風の僅かな音を頼りに、鉄の刃を弾き落とし、飛ばされてくる丸太を切り裂く。一体どれだけの仕掛けがあるのか、トラップが一か所に何十発もの集中砲火を浴びせるが、「つまらん仕掛けだ。」と、眼中にも入らないらしく、無気力な目をした。

「つまらねえか…じゃあ楽しく踊ろうぜ！」

呟きを入れた直後、陽気なあのヒコザルの声が響いた。このタイミングで、左右から細い糸が括り付けられた鏃状の刃４つが迫ってきたが、周囲に配置させていた長身の刃で全て弾く。しかし、弾いた瞬間に爆発を起こし、直に巻き込まれた。が、刃を瞬時に盾にして防御していた。そのため、無傷であった。ブラッドサイズは「この程度か…」少しずつ無気力に始めたが、あの鏃の刃が来た以降、猛攻が激しさを増した。

「…ッ！」

小エネルギー玉に圧縮された〝エナジーボール〟と、流水と氷の嵐、ファルお手製のトラップが嵐が次々と激しさを増す。この場から離れなければ…。舞い上がり続けている土の煙幕から脱出しようとするが、目の前にあのジュプトルと緑刃が迫った。ブラッドサイズはすぐに対応しようと〝雷の怒り〟を発動させて応戦。ギイン！と金属音が響き、火花が飛び散った。

「ここからは出さないぞ。」

「貴様…」

ジュプトルが脱出させようとしないため、素早く倒そうと刃同士の押し合いになり、再び剣劇が始まった。その最中でもトラップは無限剣劇を繰り広げる二人へ無差別に襲い掛かり、手を一切緩めない。視界がほぼゼロの中、ザグは目を凝らしてブラッドサイズに狙いを定めていた。

「あいつ…俺が命中率いいのを見抜いてやがるな？ピョンピョン飛んで照準から外れやがって。」

両手に緑色のエネルギーを溜め、視界ゼロの中で動き回るブラッドサイズを狙う。後は隙が生まれた瞬間に発射すれば当たるのだが、これが中々決まらない。まず誤射をする可能性があるが、ザグにとってはさほど問題はない。よほどの事が起きない限り、外しはしない自信があるからだ。問題は、標的が動きを止めてくれない上に、常に味方へ誤射させようとジュプトルを盾にしながら戦っているのだ。いくら命中率が良いといっても、盾にされた確実に誤射をしてしまう上に、ヒットには若干のタイムラグがある。

「あいつらは…」

中々狙いが定まらず、近距離で乱闘中の二人以外、つまり外野から攻撃を仕掛けているファルとキリマルをチラッと見た。キリマルは流水と〝冷凍ビーム〟を応用した氷塊を飛ばし続けている。一方、ファルは何かから逃げるように飛び回っていた。不審に思い、彼の動作をよく見てみた。そうすると、何から逃げていたのかが良く分かった。

「ああ、そういう事か…」

ファルが逃げ続けていたのは、四方八方から現れる斬撃を避けていたため。これは〝かまいたち〟の特徴的な現象である。

『かまいたち』は奇襲に長けた戦略系の技であり、真っ向勝負に使うための技ではない。何故なら、この技は速攻性のものではなく、時間差を使った遠隔技であるからだ。時間の差を使って相手を揺さ振り、忘れた頃に急所への斬撃をお見舞いする…それがかまいたち。尤も、斬撃が繰り出されるのは一瞬で、継続的に発生したりはしない。…が、ブラッドサイズの〝かまいたち〟はどういうわけか、斬撃が連続して発生していた。ファルはこれに対応できる術が無かっ

たから、今まで避け続けていたのだ。

「ホントに世話が焼けるんだからよ…！」

合点承知とばかりに、ファルへ高圧縮して威力を高めた〝エナジーボール〟を発射した。エネルギー玉が向かって来たのを見たファルは、木からすぐさま飛び降り、地面に着地した。その際、ファルが先程までにいた場所に斬撃が発生し、エネルギー玉に衝突した。それ以降、斬撃は発生しなくなった。

「おお、危ねえ危ねえ。」

〝かまいたち〟からようやく逃れたファルは、一息を吐いてザグにジェスチャーで「ありがとよ！」と送った。これに対し、ザグからは「いいから早く行け。」と指差された。

「…さて、そろそろ隙を見せてもらえないもんかね……」

救助に成功したのを確認して、再び煙幕の中にいるブラッドサイズに目を通した。

ギイン！ガアン！

煙幕の中、ジュプトルとブラッドサイズは、今だに激しい斬り合いをしている。ジュプトルは距離を取って遠距離技を仕掛けたい所だが、相手がそうさせてくれない。それに下手に距離を取ると、折角味方の支援のトラップに引っ掛かり、逆にやられる事にもなる。

「くっ…！」

尤も、今は思考を回転させる暇などない。相手は近距離から遠距離まで、全てに対応しているオールラウンダーなのだからだ。背後から迫ってきた飛刃を弾きながら、〝雷の怒り〟の突きを交差斬りで受け止める。ここで鍔迫り合いになったがために、眼が合った。

「お前は、何であいつを狙うんだ？」

ジュプトル問いに、ブラッドサイズは静かに答えた。

「あの方の邪魔になるからだ…」

そう言って押し返し、地面から鋭い刃を生えさせ、ジュプトルを貫こうとした。ジュプトルは素早く後退し、両手に緑色のエネルギー玉を集束させて問いをもう一度ぶつけた。

「あの方の邪魔だと…？前にもお前は言ったな。そいつは何者だ！」

質問をしながら、〝エナジーボール〟を発射した。迫りくる〝エナジーボール〟を、ブラッドサイズは飛刃で受け止め、ジュプトルへ跳ね返した。

「貴様に答える義理など、ない…！」

跳ね返したと同時に、背後に2枚の刃を配置し、交差斬りをさせて斬撃を飛ばした。

「どうせそう言うと思ってた！」

返答など分かっていた事だが、僅かな可能性を掛けて質問をしてみ

たかった。跳ね返されたえなじーボールと、追撃の斬撃をステップで回避し、もう一発〝エナジーボール〟を飛ばした。支援として飛ばされてくるトラップと、ブラッドサイズの飛刃に当たらないよう動きながら、決定打を作り出せないだろうか？と、ほんの数秒で作戦を考案し始めた。

（あいつは普通に戦っても隙は見せてくれない……現にこれだけの猛攻でも隙を見せていない……なら、『引っ掛ける』しかないな……）

作戦が決まり、実行に移した。成功する可能性は低いが、このままの硬直状態でいる訳にはいかなかった。獲物を捕まえるには、まず『餌』と『罠』を仕掛けないといけないからだ。飛ばされてくるトラップと斬撃を避けながら、こちらからも攻撃を幾らか仕掛ける。ここまではさっきと同じだ。

「うっ……！」

ここでジュプトルは少し盛り上がった地面に左足を着けた。その時、足に根が突然絡みつき、身動きができなくなった。そこで、リーフブレードで斬ろうとブラッドサイズから目を離した。

「もらった…」

絶好の好機を見逃すまいと、〝雷の怒り〟を振り上げて斬り落とそうとする。

―まずは貴様からだ―

止めの一手を打たんと、狙いを完璧に定めて振り下ろしている。根が足に絡みついているせいで、回避は不可能だ。尤も、ジュプトルには回避をする必要がなかった。獲物が餌に、ようやく食いついたのだから。

「っ…！」

バチイ！！

刃が振り落とされる前より、背中に衝撃が襲った。それも槍のように鋭い、何か尖った衝撃が、だ。その衝撃の正体は、〝エナジーボール〟であった。。が、この〝エナジーボール〟は、さっきの一撃これだけでは終わらなかった。

「ぐぁぁ…！！」

エネルギー玉が爆発を引き起こし、至近距離で2発目の痛手を負った。〝エナジーボール〟は着弾時で消滅するはずだが、どうもこのエネルギー玉は、一手間加えられてるようだ。恐らく、ザグによる改良タイプのためだろう。不意の一撃で体が大きくよろける。そこをジュプトルに狙われた。根を断ち切ったジュプトルが、ブラッドサイズの背後へ回り込み、容赦なく地面に叩きつけた。そして反撃をくらう前に、〝リーフブレード〟を首筋に当てて拘束した。

「お前達、もう解除していいぞ！」

ジュプトルがそう叫ぶと、過剰攻撃満々のトラップが、全て停止した。砂はこれ以上巻き上がらなくなり、丸太と鉄の刃が襲うことも無くなった。砂塵が晴れたと同時に、ファル一行が、駆け寄ってき

た。

「お勤めご苦労さん。」

ザグがブラッドサイズを睨みながら、拘束しているジュプトルに暗黙の礼を言った。

「礼には及ばないさ。それにお前達がいなければ、たぶん俺はやられてただろうしな。さて……」

僅かな味方との会話を終えると、全員がブラッドサイズに目を向けた。

重い空気が流れる。先程は戦いに夢中で空気が踊っていたが、今は静まり返っている。まるで嵐前の静けさのような空気だ。緊迫する中、まず先にファルが質問を投げかけた。

「お前の目的は何だ？何の理由で俺を狙うんだ？」

まずはシンプルな内容を問うた。狙われた側が真っ先に質問する、模範解答通りの質問だ。

「……」

その問いに、ブラッドサイズは答えない。口を閉じたままだ。

「……あー…誰に命令された？」

問い詰めることなく、第二の質問をした。

「……」

それに対しても無反応。返答は無し。

「あ～…」

「もういい、俺がやる。」

グダグダな質問に痺れを切らしたザグが、ファルを押し退けてブラッドサイズの鬣を乱雑に掴み上げた。

（…！？）

「カッコつけてないでさっさと答えろよ。誰に命握られてると思ってんだ？」

一行は唖然とした。ザグが、ここまで乱暴な行為を行うとは思ってなかったからだ。…が、彼の行動を見て、ファルは違和感を感じた。

（変だな…こいつにイラついてるワケでもねえのにこんな凶行を行うなんて……待てよ？）

この行動を通して、ファルの頭の中では、いくつかの仮説が一気に吹き出していた。

もし、相手を挑発する目的としてなら？

もし、相手を探るための行いだとしたら？

『もし……今、対話している相手と会話が成立しないのなら？』

最後に浮かんだ仮説。これは、最悪の事態が起こる危険なパターンだ。まさかとブラッドサイズを見た時、奴が口を開いた。

『掴まれてる側が何を言っているのだ…？』

チャキ…

「…！」

「な……」

「なに…！？」

「……やっぱりか。」

全員の背後に冷たい物質が押し当てられた。それがどういう物かなど、分かり切っている。

「私が、何も考えずに罠が見えている餌へ飛びつくと思っていたのか…？」

さらに背後から、拘束しているはずのブラッドサイズの声が響いてきた。全員が、恐る恐る振り向く。

数メートル先には、もう一人のブラッドサイズがいた。

「もう一人、だと…！？」

「分身なんてありかよ。それも自立行動可能な……」

「…お前、何でもありだな……」

ジュプトル除く一行が、それぞれの反応をした。キリマルは驚き、ザグとファルはげんなりとしている。そんな最中、ジュプトルが聞く。

「何時から分身を使った？」

「砂煙が最初に巻き起こった時……起動時、すぐに貴様は移動がで

きなかったようだからな、その時に分身を変わりに配置させた……」
種明かしをされ、ジュプトルは半分納得した。何故、半分かという
と、聞きたいのがまだ1つあったからだ。
「もう1つ聞かせてくれ。どうやって姿、気配を消していた？」
「欲張りなトカゲだ……気配に至っては聞く必要など無いだろう。
それは貴様が一番分かっているはずだ……姿に至っては種明かしは
できないな……」
そうか。それだけ答えて、ジュプトルは口を閉じた。背中に当てら
れている刃の圧力が高くなったからだ。下手に動けば、串刺し確定
だろう。キリマルとザグが冷や汗を垂らす中、ファルは自傷気味に
笑っていた。
「は…ははは……」
「……何がおかしい…？」
そんな彼の様子を、ブラッドサイズが目を向けた。すると、ファル
は少し、青ざめた表情で向き合った。
「ふぅ～…もう今月は使わない予定だったんだけどな～……」
「……」
「しょうがねえよなあ……」
ブラッドサイズから冷めた目線を向けられると、ヤル気無さそうに、
ファルが腕を垂らした。そこで息を一杯まで吸い、声を上げた。
「死にそうだもんなあ！！」

その声が発せられた瞬間、ファルが白い衝撃波を突然発生させた。
その白い衝撃波が刃に当たると、刃をガラスのように砕け散らせた。
無論、その衝撃波は広く行き渡り、全員の刃が砕かれ、さらにブラッドサイズの分身までもが砕け散った。

「な、何を使ったんだ…！」

こんな力、聞いたことがないぞ！と、ジュプトルが訳が分からないまま、ファルに聞こうとした。

「聞くのはやめとけ。」

その時、ザグに聞くのをやめろと言われた。キリマルも無言だが、目でやめろと言っている。

「何かワケありなのか…？」
「俺達はともかく、あいつ自身も知らないからな。今は聞いたって無駄だ。それに、『あれ』のせいであいつには良い思い出がない。」

ザグがそう、話した。あまり聞かないほうがよさそうな代物だと思ったジュプトルは、それ以上今は聞くのを止めた。

「ザグ、キリマル。できるだけ援護頼む。後、俺の体の運搬、頼んだぜ？」
「…あんま無茶すんなよ？」
「また運ぶのか…」

（運ぶ？どういう事だ…？）

話しの中に出てきた「運ぶ」という単語を耳にして、ジュプトルが

疑問符を浮かべた。なんにせよ、あの力は、良い事があまりなさそうだ。一方、ブラッドサイズは身構えたまま、ファルを睨みつけている。

（……あれが、スパイク様の言っていた『波動機関』の力か……確かに、あれは厄介だ……）

スパイクに聞かされた話しを思い出し、仕切り直しにと神経を研ぎ澄ませる。

目標達成。それをしない限り、帰るつもりなどない。

第五話：衝突！血の刃（後書き）

波動機関、さて、これは何でしょう??何でしょうねえ?

ファル「なんだろねえ～?」

ザグ「分かんねえな。」

キリマル「…それはまさ――」

はい、お口にチャック！ネタバレはだめよ。

ジュプトル「…ここは何時もこうなのか?」

こうなのよ。ちなみに、次回は、チャプター5でーす！

一行『え?』

いや、だってここで尺取り過ぎたし、あんまりネタ明かすワケにはいかないじゃん?間合いが悪い気がするけど。

という訳でまた次回！

次回予告

「スパイクとクロノスの騒動が起きてからの3日後、ギルドは地下1階部分までは修復『建て替え』はできた。修行もできるようになったが、嬉しくはなかった。奴のせいだ。何を企んでるんだか知ら

ないが、良い事じゃないのは明確だ。けど、全員で捜索をしてもどこにもいない。一体どこにいるんだ？……そういえば、最近フロムが変だな。やけに暗い性格になってやがる。…何かあったのか？」

「……あたしって、何でこんなに力が無いんだろう？あいつに一撃も当てられなかった…前も、そうよ……力が無いせいで、ソロの足を引っ張っちゃった…あたしのほうが、経験者なのに……ソロ…どうしたら強くなれるの？…あたし……どうすればいい？……」

助けて……

chapter5：迷走

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6106r/

ポケモン不思議のダンジョン　半魔界の探検隊～蒼（碧）の波導の悪魔～

2012年1月13日00時45分発行